オートマティック・リベンジ

mitiida

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オートマティック・リベンジ

【Ｎコード】
Ｎ６８５７Ｏ

【作者名】
ｍｉｔｉｉｄａ

【あらすじ】
いじめ続けられ、自殺をも考えたタケダ・トモヒコ。
殺したいほど憎いやつらが、次々と、トモヒコの目の前で、被害者となっていく。
そして、ついに殺人事件が…。
トモヒコにかけられた疑い。
やっていないはずの犯罪。

クワタ刑事は捜査を開始する。
トモヒコへの嫌疑は強固になっていく。
トモヒコは殺人者となってしまうのか？

ミツヤ君シリーズ第２弾。

☆★判決★☆

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｘｘｘ．ｘｘｘ．ｃｏｍ

主文

被告人ニノミヤ・トオルを死刑とする。

被告人サカタ・テツヤを死刑とする。

被告人トウドウ・ミノル、バンドウ・キョウコに肉体的苦痛をあたえるものとする。

被告人イワタ・ミドリには性的な苦痛をあたえるものとする。

理由

被告人ニノミヤ・トオルは数々の陰湿な事件の首謀者。こいつのおかげでぼくの人生は暗く悲惨なものとなった。こいつの心は氷のように冷たく、人が苦しむことによって快楽を得る。情状酌量の余地なし。

被告人サカタはニノミヤの命令に逆らえなかったという点では、多少同情の余地はある。しかしサカタの性格は残忍で、ニノミヤの命令とはいえ、人を傷つけることを楽しんでいた。ニノミヤがいなかったら、こいつが首謀者となりえた。生きている資格なし。

被告人トウドウと被告人バンドウは、ニノミヤに弱みを握られており、しかたなく彼の命令に従っていたと思われる。しかしこいつら、人間的な感情が欠けている。だから自分の体が傷ついたら、どれほど痛いか、身をもって知ってもらう。

被告人イワタは、その心と体をニノミヤに支配されていた。直接ぼくに危害を加えることはなかったが、いつも周りで煽っていた。

ぼくの肉便器になって、罪を償ってくれ。

プロローグ　ある日の夕暮れのこと

今年は空梅雨だった。
先週天気予報で梅雨入り宣言がされたが、ほとんど雨が降ることがなく、生温かい風が吹く蒸し暑い日が続いていた。
その日も昼から気温は上昇して今年三度目の真夏日となった。
タケダ・トモヒコは学校が終わるとゲームセンターや本屋によって時間をつぶした。特にやりたいゲームや読みたい本があったわけではない。ただ中々決心がつかなかったのだ。

死ぬ――ということは、どういうことだろう。
トモヒコはもう一週間もそればかり考えていた。
死ぬ――ことを決心してから一週間がたった。しかし中々実行できずに、今日もただ無駄な時間を過ごした。
死ぬ――ということは、どういうことだろう。
もう何度も何度も繰り返し自分に問いかけた。
しかし答えはもちろん返ってこない。自分は死んだことがないのだから。
死んだ人に聞くわけにもいかない。死んだ人は答えてくれない。
死とはいったいどういうことだろう。
トモヒコの頭の中に『死』という文字が渦巻く。

ぼくは、今、生きている。
ぼくは、今、考えている。
ぼくが死んだら、ぼくの心臓が動かなくなる。
ぼくが死んだら、ぼくの脳は考えなくなる。
考えなくなるってことはぼくが無くなるってこと？
それは眠っているような感じなのだろうか？
いや、眠っている時は夢を見るではないか。

それは、苦しいのか？
それは、楽しいのか？
いや、楽しいとか、苦しいとかは感じないはずだ。ぼくの脳が動かないのだから。
じゃあ、何があるんだ。

トモヒコは駅のプラットホームに立って、だらだらと、そんなことを考えていた。
ちょうど夕日がビルの谷間に沈むところだった。プラットホームからビルが二つ見えた。その間をオレンジ色の夕日がゆっくりと沈んでいく。
トモヒコはしばらくその夕日を見つめていた。円形の夕日がもやもやとした街に接合してその形を変えていく。半円になる頃には辺りが暗くなってきた。
ホームには仕事帰りのサラリーマンが占める割合が高くなる。サラリーマンは口々に何か話している。

――これから、一杯、どうですか？
――今日はさあ、かみさんが、うるさいんだよ。
――課長、明日までに必ずやっておきます。
――はい、すみません。これから、行きます。

トモヒコはぼんやりと夕日を見ながら、駅の音、人の声を聞いていた。やがてビルの間にあった夕日はほとんど西の街の中に取り込まれてしまい、その円形の上部だけを見せていた。オレンジ色だった街も序々にその輝きを失い、夕日がいよいよビルの谷間から見えなくなると、うっすらとした闇がやってくる。
トモヒコは死について考えるのをやめた。いくら考えたって答えはでてこないのだ。
死んでしまおう――。

もう、考えるのもめんどくさい。

駅のアナウンスが次の列車が来ることを告げる。
黄色い線の内側へ入ってください――。
電車がホームに入ってくる。
トモヒコの前に並んでいたサラリーマンやＯＬが電車に乗り込んだ。トモヒコは後ろから押されて、電車の中に吸い込まれそうになったが、何とか乗らずにホームに留まった。
「おい、どけよ」
「何、突っ立てるんだ」
サラリーマンらしき男から罵声を浴びせられたが、トモヒコは、かまわずにホームに残った。
電車の扉が閉まり、満員のサラリーマンやＯＬを乗せ走り出した。
トモヒコはホームに残された列の先頭になった。

――よし、次だ。
――次の電車だ。
次の電車が来たら、飛び込もう。

それで、終わりだ。
それで、終わりだ。
トモヒコはそう決心した。

次の電車が来るまで七分間。
これがぼくの最後の時間。
最後の七分。
そう思うと体が硬直してきた。トモヒコは肩を回してみた。ポキポキと小さな音がした。
その場で足踏みする。ややぎこちないが足は動く。

ぼくが死んだらどうなるのかな。

まず父と母の顔が浮かんだ。しかしそれはすぐに消えた。
父親とは、もう何年も話したことがない。仕事なのか、遊びなのか分らないが、父親は家にいないのだ。
母親も働いている。いつも仕事ばかりで夜も遅い。母親の話は愚痴ばかりで、トモヒコの話なんか聞いてくれない。
そして親子三人で何か話したということは、遠い遠い過去のこと。もういつのことなのかよく覚えていない。
家庭は崩壊している。

ニノミヤやサカタはどう感じるのか？
自分のやったことを後悔するのかな？
いや、それはないだろう。やつらの心はトモヒコが死んだくらいではなんともならない。
トモヒコは多少なりとも、彼らに気をつかったことを悔やんだ。それは間違いなのだ。

先生はもしかしたら、少し悲しんでくれるかもしれない。
先生はトモヒコを助けてくれようとした。
先生の顔が浮かんで、トモヒコは涙が出てくるのを感じた。

駅のアナウンスが次の列車が来ることを告げる。
黄色い線の内側へ入ってください――。
ああ、ついに、その時が来た。
もう後戻りはしない。
トモヒコはもう一度そう強く思い、線路の方に向かって一歩進んだ。

ホームから電車の来る方を見てみると、黄色いライトを点けた車

両が滑り込んできた。
段々と近づいてくる。
電車の音が思ったより大きい。駅のざわざわした音も、何故かトモヒコの頭の中で増幅された。
いよいよ電車がすぐ近くまでやってきた。
今だ！
トモヒコは後ろ足で、ホームを蹴った。
ふっと、体が空中に舞った。
電車の警笛――。
人々の叫び声――。
後、何かは分らないが、トモヒコの頭の中でいろんな音が反響しあって、もう頭が割れると思うくらいだった。

◇◇◇◇◇

トモヒコは電車の前部に衝突して、肉体が砕け散り、絶命するはずだった。
少なくても数秒前はそう思っていた。
しかしトモヒコがホームから電車めがけて飛んだ瞬間、異様に強力な力が反対方向に働いて、ホームに引き戻された。トモヒコはその時ジーンズを履いていたが、ジーンズのウエストに隙間があり、その部分に誰かが手を入れて、強力な力で強引にホームに引き戻したのだった。
トモヒコはホームに転倒した。列車はすごい警笛を鳴らしたが、停止することなく、ホームに滑り込んできた。
トモヒコがあっけに取られて後ろを振り返ると、トモヒコの後ろに並んでいたサラリーマンが、青ざめた顔をしてトモヒコを見ていた。
そしてトモヒコの後ろには、銀髪で黒いサングラスをして、黒いシャツを着た男が立っていた。サングラスをしているため男の表情

は読み取れないが、少し微笑んでいるようだった。
金色の装飾品が首からぶら下がっていた。右耳にはシルバーのピアスが光っていた。
「何があったか知らないけど電車に飛び込んだら、死んじゃうよ」
その男は静かな声でそう言った。
周りのサラリーマンは一瞬トモヒコの方を見ていたが、電車に乗り込んでいった。
遠くから駅員が走ってきた。トモヒコの近くまで来ると慌てた表情になって言った。
「おい、君、大丈夫か？」
トモヒコが黙っているとサングラスをした黒づくめの男が言った。
「すみません。ちょっとふざけてしまいまして――」
「ふざけたって――危ないだろう。そっちの君は――学生だな。どこの学校だ。ちょっと駅員室まで――」
駅員がそう言いかけると、黒づくめの男が制した。
「まあ、今日のところは大目に見てくださいよ。特に被害はなかったでしょう？ダイヤの乱れもない。誰も被害を受けていない。何故駅員室に行かなければならないのですか？」
男がそう言うと、駅員は黙ってしまった。
それならば――とにかくそういう危険行為は絶対にやらないでくださいよ。
そう言って駅員は立ち去っていった。

トモヒコが立ち上がると、黒づくめの男の顔から微笑みは消えていた。
男はトモヒコの手を取ると、ホームの端のベンチまで連れて行って、トモヒコを座らせ、自分も隣に座った。
「君は電車に飛び込むつもりだったよね？自殺しようと思ったの」
トモヒコは黙っていた。男の言うとおりだった。
「君は見たところ――中学生か？　中学三年生くらい？」

トモヒコの方を見て男は静かに訊いた。トモヒコは黙って頷いた。
「ふーん、俺と同じ歳だね」
その言葉を聞いてトモヒコは唖然としてしまった。この男が中学三年生？　トモヒコは男の風貌から、少なくても二十代後半、あるいは三十代かとも思っていた。
「君が――中学生？」
トモヒコは思わず、口に出してしまった。
「そうだよ。君と同級生だ」
そう言って男はサングラスを取った。その顔は欧米人のように彫が深くとても日本人には見えなかった。よく見ると身長はそれほど高くないが、がっちりとした胸板が黒いシャツの上からも分った。
「俺は電車に乗ることがめったにないので、どの電車に乗っていいのかよく分らないでいた。ホームをうろついていたら、君が目に付いた。電車を何本かやり過ごし、目が虚ろでぼんやりとしている。そのうち君がホームの先頭になった時、もしかしたら電車に飛び込むんじゃないかと思った。それで強引に君の後ろに並んだんだ」
トモヒコは黙っている。
「次の電車が来るというアナウンスがあると、君は一歩前に進んだ。これで俺の想像は間違いないことを確信して、君のズボンに手をつっこんで、君をホームに引き戻した。君のズボンがぶかぶかじゃなかったら、もっと手荒いやり方をしたかもしれない」
男はそう言って視線を遠くに向けた。
「こんなことを聞いても君は話してくれないかと思うが、何故、自殺しようと思ったんだ？」
トモヒコは黙っている。
「そうか、まあ、それはいいや。死ぬほど辛いことがあったんだよね。でもどうだろう、俺が思うに、自殺するってことは負け。そもそも君は負ける前に戦ったのか？生きていく上で解決できないことはない。必ずどうにかなる。自殺する必要はない」
男は自信に満ちていた。おそらく強い人間なんだろう。

トモヒコのこれまでの人生で、このようなことは散々言われ続けていたことだ。所詮、強い人間だからこそ言える言葉なのだ。トモヒコはそんなに強くなれない。

「まあ、どうせいつかは死ぬんだぜ！わざわざ自分で死ぬことないと思うけどなあ」

トモヒコはようやく口を開いた。

「そんなことは分っているよ。君は強い人間だから、弱い人間の心なんて、まるで分っていないんだ。だからそんな無責任なことが言えるんだ。結局他人はみんなそう言うんだ」

トモヒコは我慢できなくなって、初対面の男にそう言ってしまった。

黒づくめの男はしばらく考えていたが、ゆっくりと口を開いた。

「強い人間だろうと弱い人間だろうと、他人の心なんか分らないよ。君は君で、俺は俺。俺の考えを押し付けるつもりはない。俺が君を自殺させなかったのは、電車が止まって家に帰れなくなるが嫌だったからだ」

トモヒコは愕然とした。この男は自分のためにトモヒコを救ったのか？

トモヒコが黙っていると、男は手帳を取り出して何かを書いてトモヒコに手渡した。

「これも何かの縁だ。自殺するならもっといい方法があるよ。連絡くれれば教えてあげる」

その紙にはこう書いてあった。

ズイセンジ・サンタ

０８０－ＸＸＸ－ＸＸＸ

ｓａｎｔａ@ＸＸＸ．ｎｅ．ｊｐ

ある日の午後の会話　その１

ようやく春めいてきた風が、静かに吹いていた。
午後の陽光が校庭の桜のつぼみを照らしている。春休みの校庭には人はなく、静まり返っていた。
教育相談室は教室からも職員室からも離れた場所にあって、普段はほとんど使われない。古ぼけた細長いテーブルと椅子が二つ置いてあり、部屋の隅には古い資料が山積みにされている。
カンベ中学校の教師であるサトウ・キヨシはタケダ・トモヒコの方を見ながらゆっくりと口を開いた。
「久しぶりに学校に来て、どんな感じだ？」
トモヒコはサトウに目を合わせないようにうつむいていた。
それを見てサトウは深いため息をついた。
「タケダ、僕にはだいたい分っているんだ。僕がこの学校に赴任して君の担任になって一年――君が学校に来なくなってから半年――。何故、君が学校に来なくなったか？　僕にはだいたい分っているんだ」
トモヒコはまだうつむいている。サトウは続けて話す。
「君は何も話してくれなかった。クラスの生徒も何も話さない。だから僕のクラスでこんなことがあったなんて知らなかった。君が不登校になって、僕はようやくそのことに気づいた」
サトウはまたため息をついた。
トモヒコはまだうつむいている。
「ニノミヤなんだろう――」
サトウの力強く低い声が静まり返っていた相談室の中に響いた。
「なあ、ニノミヤなんだろう？」
もう一度、サトウははっきりと言った。
トモヒコはやっと顔を上げてサトウの方をみた。サトウは真剣な目でトモヒコの方を見ていた。

「そうだよ、先生。あいつだ。あいつが原因なんだ。あいつは悪魔なんだよ」

トモヒコはつぶやくような小さな声でそう言った。

静かな始まり

薄暗い空からぱらぱらと雨が降っていた。
その雨粒のひとつひとつが、トモヒコの心に中に進入してきて、ぱしゃ、ぱしゃと不快な音を発した。
トモヒコは車窓に広がる曇った街を見ながら、その雨粒の音を心の中で聞いて憂鬱になった。
そもそも雨など降っていなくても憂鬱なのだ。
最後に学校に行ったのはゴールデンウイークの少し前だから、もう一ヶ月以上学校に行っていない。
担任のサトウ先生が何度か家庭訪問に来た。トモヒコの親にも会って何か話をした。
それでもトモヒコは中々学校に行く気になれなかった。トモヒコの両親は最初はトモヒコを叱咤したが、そのうち何も言わなくなった。
あの人達は忙しくて、トモヒコのことなんかどうでもいいらしい。もう何年もそうだ。トモヒコはもう何年も両親とまともに会話をしていなかった。

車両の扉の上にある電光掲示板の文字が変わって、トモヒコの降りる駅名を表示した。トモヒコの通う学校のある駅だ。
ああ――嫌だな。
トモヒコが感じていた憂鬱がいっそう強まる。
できれば、学校なんか行きたくない。
できれば、家の中に引きこもっていたい。
しかし昨日の夜サトウ先生がトモヒコの家にやってきて、二時間くらい話をして、トモヒコは最後に先生に約束をしてしまったのだ。
一時間で帰ってもいい。

いや、三十分でもいい。
教室に行くのが嫌だったら行かなくてもいい。
他の生徒に会うのが嫌だったら会わなくてもいい。
とにかく学校へ来てくれないか？
君の顔を学校で見たい。

サトウ先生の懇願は二時間続いた。それでトモヒコは最後につい約束をしてしまったのだ。
サトウ先生はトモヒコが学校に行かなくなった原因を知っている。
トモヒコは中学校二年生の二学期から、半年くらい学校を休んだ。

頭が痛い――。
体がだるい――。
憂鬱だ――。
何もしたくない――。
トモヒコの両親は最初はトモヒコがただ怠けているのだと怒ったり、なじったりしたが、それでもトモヒコが部屋に引きこもっていると、トモヒコを一応病院に連れて行った。
しかしトモヒコの体調不良の原因は解らなかった。
二年生の時の担任もサトウ先生だった。先生はトモヒコの両親と話をして、トモヒコを神経内科に連れて行った。神経内科での診断結果は「鬱病」だった。
ただその原因はついては、両親はもちろんサトウ先生にも、病院の先生にも言わなかった。

自分がいじめにあっているのだということ――。
トモヒコはそれを人に言うのを何故かためらった。
あんなに酷い目にあっていて、あんなに苦しかったのに――。
先生にちくってもっと酷い目にあうのが怖かったということも多少はある――。

それは肉体的苦痛というより、精神的な苦痛だ。

トモヒコをいじめていたのは――。

トモヒコに精神的な苦痛をあたえていたのは――。

ニノミヤ・トオルという男の生徒だった。

ニノミヤとは小学校も同じで、もう八年間も同じ学校に通っている。

トモヒコは小学校一年生の時ニノミヤと同じクラスになって、それ以来苦痛をあたえられている。

中学生になってからその「いじめ」はより残酷にエスカレートしていった。

ニノミヤだけではない。ニノミヤの周りの生徒にも残酷なやつがいた。

ニノミヤ達に酷いことをされるは嫌だったけど、それよりニノミヤという人間に恐怖を覚えた。

やがて電車が駅についた。トモヒコは地球の重力が何倍にもなったように感じた。手足を動かすのに普段の何倍もの力が必要だった。

それでもトモヒコはなんとかホームの階段を上がり、駅の外へ出た。

雨はまだ降っていた。トモヒコは持ってきたビニール傘をさして、何倍にも重くなった手足を必死に動かし、学校に向かった。

駅から学校までは五分程度歩く。駅の周りには商店街もなく、閑散としている。

時刻はもう十時近くなので二時間目が終わる頃だと思う。完全に遅刻だ。

トモヒコは学校には行くのだけど、教室に入るつもりはなかった。クラスの生徒らに見られるのも、できれば避けたかった。

だからトモヒコはみんなが登校する時間をあえて避けた。学校へ

行ったら、職員室に行って、サトウ先生と少し話をして、家に帰ろう――そう思っていた。
駅から学校までは閑静な住宅街で、ほとんど歩いている人はいなかった。細かい雨が降っていて、トモヒコはビニール傘をさしながらゆっくりと住宅街を歩いた。
途中、小さな公園の木々が雨に濡れて独特の匂いがした。それ以外にもいろいろな匂いがした。それは――街の匂いなのだろうか？何だか懐かしかった。トモヒコはここ数日ほとんど外に出ていなかった。
公園を過ぎるといよいよ学校の正門が見えた。トモヒコの足取りはさらにゆっくりとなった。
トモヒコは正門の前で立ち止まり、覗き込むように校庭を見てみた。
まだ二時間目の授業は終わっていないらしく、校庭は静まり返っていた。
校庭の向こうに古びた校舎の端が見えた。校舎の壁は白く、所々にひびが入っていた。いつ建てられたのか、トモヒコは知らないが、もうかなり昔のことなのだろう。

トモヒコはしばらく正門の前で立ち止まって考えていた。二時間目が終わると休み時間になって生徒達が教室から出てくる。そうするとクラスの生徒と廊下ですれ違うこともある。校舎に入るのなら授業中がいい。
二時間目が終わるのは何時だったのか――。
トモヒコはしばらく考えたが、思い出せなかった。
三時間目が始まるのを待つか――。

そう考えもしたが、休み時間の間、どこで隠れていればいいのだろう？

トモヒコは意を決して校門を通って校庭に入った。

今度は足早になって校庭を通り過ぎ、下駄箱のある入り口を目指す。校庭からトモヒコの教室は見えないが、校舎二階の教室の窓が気になった。

入り口にたどり着いたが、トモヒコは自分の下駄箱がどこにあるのか解らなかった。

そもそも自分に下駄箱なんかがあるのか？校舎内ではスリッパを履くことになっていたが、トモヒコは三年生になってから自分のスリッパを見た記憶がない。

それでトモヒコは下駄箱のある入り口で靴を脱ぎ、脱いだ靴を持って職員室へ向かった。

下駄箱から職員室へ向かう廊下にも、誰もいなかった。トモヒコは誰にも顔を合わせることなく、職員室の入り口の前まで歩いた。

職員室の入り口は引き戸になっていた。引き戸の上に「職員室」という黒いプレートがあった。

入り口の前でトモヒコは大きく深呼吸して、思い切って引き戸を右に引いた。

がらがらと思ったより大きな音がした。

トモヒコは職員室の入り口から、おそるおそる室内を見た。

サトウ先生の席は入り口から向かって右の奥の方だったような気がした。しかし職員室にサトウ先生の姿は見えなかった。

職員室は静まり返っていて、三、四人の先生が机に座っているのが見えた。トモヒコがしばらく入り口に立っていると、入り口に一番近い席に座った中年の女の先生がトモヒコの方を見た。

女の先生は怪訝な顔をしていた。トモヒコがそのまま立っていると、

「あなた、今、授業中でしょ。何か用なの？」

と言って、トモヒコの方に冷たい視線を浴びせた。
トモヒコの心はその女の先生の威圧的な態度と冷たい視線で少し不安定になった。
「あの――その――サトウ先生を――」
トモヒコは小さな声でたどたどしくそう言ったが、その女の先生にはよく聞こえなかったみたいだ。
「何、言ってるの！」
女の先生の声が少し大きくなった。その声は静まり返った職員室によく響いた。それで他の先生もいっせいにトモヒコの方を見た。
「あっ、タケダ君！」
職員室の右奥の方から聞き覚えのある高い声がした。英語のニッタ先生の声だった。
ニッタ先生はトモヒコを見ると席を立ち、軽やかな足取りでトモヒコの方にやってきた。
ニッタ先生は去年教師になったばかりのショートヘアーの若い女性だった。
「タケダ君、よく来たわね。サトウ先生は、今、授業に出ているの。わたしはタケダ君、今日来るって、サトウ先生から聞いていたから待っていたのよ。そう――、相談室に行こうか？」
ニッタ先生は笑顔で言った。
トモヒコに最初に声をかけた中年の女の先生は、目をぱちぱちとさせながらニッタ先生の方を見ていた。
ニッタ先生は中年の女の教師に目配せをしたようだった。中年の女の先生はそれで何か分ったらしく、何度か軽く頷いてトモヒコから視線をそらした。

おそらく――。
あの不登校の引きこもり生徒がやっと登校してきたのか。
でもわたしには関係ない――。
おそらく、中年の女の先生はそう思ったのだろう。

トモヒコはそう感じた。

「さあ、相談室に行きましょう。あと少しで二時間目が終わるから。そうしたら、サトウ先生も来るわよ」

ニッタ先生はそう言って、廊下の方に歩き出した。

トモヒコはニッタ先生に続いて廊下を歩いた。教育相談室は校舎の端の方にある。職員室から一年生の教室をすべて通り過ぎ、突き当たりを右にまがったところが教育相談室だ。教育相談室は後から増築された場所にあり、教室からも職員室からも離れていて、昼間でもその部屋のまわりは暗い感じがする。

ニッタ先生は白いブラウスに紺のタイトスカートを履いていた。足取りは心なしか速かった。ニッタ先生は形のよい尻をリズミカルに上下させながら、トモヒコの前を歩いていた。トモヒコはそれを見ながら大人の女性を感じていた。

こんな時にぼくは何を考えているんだ――。

トモヒコは自分が嫌になった。

ようやく相談室の前についた。ニッタ先生は手に持った鍵で相談室の扉を開けた。相談室の入り口は古い職員室の引き戸とは違って、鉄製の頑丈な扉だった。

ニッタ先生は相談室の中に入り、部屋の明かりをつけた。相談室は窓が小さく、昼でも暗い。

「さあ、タケダ君、入って」

ニッタ先生はまた笑顔をトモヒコの方に向けた。

トモヒコは言われるがまま部屋の中に入った。

「あとちょっとで授業が終わるから。サトウ先生は三時間目は空いているはずだから、ゆっくり話ができるわよ」

相談室は普段あまり使っていないらしく、変な匂いがした。それに少し埃っぽかった。

部屋の中には細長い机とパイプ椅子が二つあり、トモヒコは小さな窓側のパイプ椅子に座った。
ニッタ先生がそれを見て軽く頷いて言った。
「じゃあ、ここで少し待っていて。すぐにサトウ先生が来るから」
トモヒコは何も言わずに小さく頷いた。それを見たニッタ先生は部屋を出て、鉄の扉を閉めた。

ばたん――。

トモヒコは薄暗い相談室に閉じ込められたような気がして、少し不安になった。

本来、相談室は先生と生徒がちょっと他の人には聞かれたくないことを話すための部屋だと、トモヒコは思う。
個人的な相談――例えば進路指導などを想定しているのだろう。しかしこの部屋は生徒からは『説教部屋』などと呼ばれており、ここで先生と話をすることはあまりよく思われていない。
そう、ここで先生と話している生徒は『何かしでかした生徒』であるということが、トモヒコの学校の共通認識だった。
しかしトモヒコは、それでも、教室や職員室に行くよりはましだと思っていた。教室では他の生徒からの視線が気になるし、職員室では生徒ばかりか、他の先生の視線までも気にしなくてはならない。
トモヒコは相談室でサトウ先生が来るのを待った。
校舎全体が静まり返っていたが、静けさに慣れるにつれて、どこからか生徒の笑い声や歌声が聞こえたような気がした。トモヒコにとってそれらの声はとても遠く、まるで周波数の合わないラジオからの声のように聞こえた。
トモヒコがぼうっとその声を聞いていると、胸ポケットの携帯が振動した。メールが届いたようだ。トモヒコが携帯を取り出そうとした時、二時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。その音もど

こか遠くから聞こえてくる。トモヒコは確かに学校に来ているのだが、学校にいるということが何だかピンと来ない。ネットの仮想空間にいるような感じだ。
トモヒコは携帯を取り出しメールを確認した。
受信ボックスのリストには見たこともないアドレスが表示されていた。

差出人：ａｎｇｅｌ@ｘｘｘ．ｘｘ．ｎｅ．ｊｐ
件名：お知らせ
ＸＸ工業の倉庫におもしろいものがあるよ
倉庫は駅の北口のＹＹ公園の近く

いったい誰からのメールなのか、トモヒコには心当たりがなかった。そもそもトモヒコの携帯のメールアドレスを知っている人間はほとんどいない。学校には友達なんていないのだ。トモヒコのメールアドレスを知っているのは、ネット上のごく限られた会ったこともない人ばかりだ。
トモヒコは携帯を握り締めたまましばらく考えていた。しかし差出人は分らなかった。そしてメールの内容についても意味不明だった。
そうしているうちに、相談室の鉄の扉をノックする音が聞こえた。トモヒコが何か言おうとすると、扉がゆっくりと開いた。

サトウ先生は紺色のスーツを着ていた。
黒いストレートの髪を真ん中で分けて、黒縁の眼鏡をかけている。髪はこの前会った時より伸びていて、両耳が半分くらい隠れていた。
サトウ先生はトモヒコの姿を見るとにっこりと笑った。
「やあ、タケダ。よく来たな」
サトウ先生はそう言ってトモヒコの前に座った。
「今日は来ないんじゃないかと思っていたよ。よく来たな」

サトウ先生は黒縁の眼鏡を触って、トモヒコの目を見た。トモヒコは軽く目をそらした。
「いや、本当によく学校に来てくれた。それだけでも進歩だ」

進歩とは？
いったい何に向かって進んでいるのだろうか――。
トモヒコはサトウ先生の言うことがよく分らなかった。
トモヒコはうつむいたまま黙っていた。

体調はどうだ？
久しぶりの学校はどうだ？
懐かしいか？
たまにはいいだろう？

サトウ先生は次々とトモヒコに話しかけた。
しかしトモヒコはその言葉にほとんど反応することができなかった。先ほどから感じていた感覚――何だかネット上の仮想空間にいるような感覚。それが続いていた。
しきりに話しかけてくるサトウ先生も、ネット上の仮想空間にいるアバターのような感じだ。

――に行ってみないか？
小さな声だったのでよく聞き取れなかった。
「教室に行ってみないか？」
もう一度、サトウ先生が言った。トモヒコは思わずサトウ先生の目を見た。
「今日は、ニノミヤもサカタもいない」
トモヒコは唖然とした。例えニノミヤやサカタがいなくても、教室へ行くなんてとても無理だ。今日は先生と話をして帰るつもりだった。教室へ入る心の準備ができていない。

トモヒコはぶるぶると痙攣したように首を横に振った。
「そうか――」
サトウ先生は残念そうに言った。先生には悪いが、教室に行くなんて、やっぱり無理だ。ニノミヤやサカタだけがトモヒコの不登校の原因ではない。
トモヒコは立ち上がって小さな声でサトウ先生に言った。
「先生、ごめんなさい。今日は帰ります」
ふと、相談室に案内してくれたニッタ先生の顔が浮かんだ。
ゆっくり話ができるわよ――。
ニッタ先生はそう言っていたが、今日もサトウ先生とまともに会話ができなかった。
しかし学校に来ただけでも『進歩』なのだろう。トモヒコはそう思うことにした。

リベンジ　その1

トモヒコの通う中学校では休み時間は十分間だった。
トモヒコが椅子から立ち上がってサトウ先生を見ていると、休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴った。それは三時間目の授業開始のチャイムでもある。
サトウ先生が話している時に、ざわざわとした声が聞こえていた。それは静まり返っていた授業中に聞こえた声より、はっきりとトモヒコの頭に響いてきた。ここは仮想空間なんかじゃなくて、やはり現実なのだ。トモヒコは現実に学校に来ているのだと、そう思った。
チャイムが鳴ると、そのざわめきがフェードアウトしていって、また静寂が帰ってきた。
「そうか――帰るか」
周りが再び静寂に包まれる頃、サトウ先生は、もう一度言った。
トモヒコは黙ってサトウ先生の顔を見ながら頷いた。
「まあ、なんだな――。無理しなくていいから――。徐々にやっていこう」
サトウ先生はにっこりと微笑んでそう言った。

トモヒコがニノミヤ達にいじめられている――。
トモヒコの不登校の原因はいじめだ。
トモヒコはサトウ先生に言ったのだ。
トモヒコの不登校の原因はサトウ先生にも分っている。すなわち学校もわかっている。

サトウ先生は、
「俺が何とかしてやる。いじめをするやつを許してはおけない」
と、そう言った。
しかしトモヒコは先生にこうも言った。

「ぼくがいじめられていることを先生に言ったなんて、ニノミヤ達には絶対言わないでくれ」
先生は何故？　という不思議な顔をした。
それで小学生の頃担任だった先生のことを話した。あの時も担任の先生はサトウ先生のような言葉をトモヒコに言った。そしてニノミヤ達を叱って、いじめをやめるよう指導したのだ。
しかしいじめはなくならなかった。むしろ酷くなった。
先生に叱られるくらいニノミヤは何とも思っていない。小学生の頃からそうだった。中学生になって、ニノミヤはさらに残酷で、冷酷になった。
サトウ先生のことを信用していないわけではなかったが、トモヒコはサトウ先生に小学生の頃の担任の教師の話をした。
先生が間に入って、結局、何も解決しなかったこと。
さらにいじめが酷くなったこと。
そういった話をサトウ先生にした。
それを聞くとサトウ先生はゆっくりと頷いて、
「おまえの言うことは分った。うん、時間はかかるが、慎重にやろう。俺はおまえの味方だ」
と、そう言った。
トモヒコは少し胸が熱くなった。

サトウ先生はゆっくりと相談室の鉄の扉を開けて、頭だけを外に出し廊下を見渡した。廊下に誰もいないのを確かめると、トモヒコの方を向いて言った。
「今日は残念だが、また、来いよ」
トモヒコはゆっくりと相談室から廊下に出た。校舎に静寂が戻っていて、廊下を歩く生徒はいなかった。
トモヒコはサトウ先生に向かってぺこりと頭を下げ、下駄箱の方に向かってゆっくりと廊下を歩く。
音楽室の方から微かに歌声が聞こえたような気がした。トモヒコ

は誰にも会わずに下駄箱までたどり着いて、誰にも会わずに校庭を横切り、校門を出た。
校門を出ると滝のような汗が流れてきた。校内では夢中で気づかなかったが、おそらく異常なほど緊張していたのだろう。
トモヒコは校門の前で大きくため息をついた。
トモヒコの頭の中に、サトウ先生の言葉が浮かんだ。

まあ、なんだな――。無理しなくていいから――。徐々にやっていこう――。

いや、本当に、よく学校に来てくれた。それだけでも進歩だ

進歩とは？
いったい何に向かって進んでいるのだろうか――。
トモヒコの頭の中にまた疑問が渦巻く。
サトウ先生の思いは何となく分る気がしたが、トモヒコはこの後どうなってしまうのか、不安はなくならなかった。

トモヒコは学校を後にして、駅へ向かって歩き出した。足取りは学校へ向かっている時より明らかに軽くなった。
しばらく歩いてから、相談室でサトウ先生に会う前に受信したメールのことを思い出して携帯を取り出した。

――ＸＸ工業の倉庫におもしろいものがあるよ
――倉庫は駅の北口のＹＹ公園の近く

まったく見覚えのないアドレスからだった。
ＹＹ公園は駅の北口から三分くらい歩いたところにある小さな公園だ。
トモヒコはいつの間にかＹＹ公園に向かっていた。

雨は小降りになっていたが、空は黒い雨雲で覆われており、太陽は見えなかった。
トモヒコは駅への道を途中で左折した。左折して少し歩くとＹＹ公園が見えた。もう一度携帯を取り出し、メールを確認する。
ＸＸ工業の倉庫――。
ＹＹ公園は何度か来たことがあるが、ＸＸ工業なんて知らなかった。おそらくそんな会社が公園の近くにあるのだろう。
公園の周りは静かな住宅街で歩いている人はいない。
トモヒコは公園の中に入ってみた。小さな公園で周りには少しばかりの木があって、鉄棒、ベンチが二つ、それに小さなブランコがあった。
公園のベンチにスーツ姿のサラリーマンが座っていて、携帯で話をしていた。それ以外には公園に人は見えなかった。
トモヒコは公園を横切って反対側の出口へ向かった。何となくそちら側にＸＸ工業があるのではないか、とそんな気がしていた。
公園の反対側の出口を出て公園の周りを歩く。やはり歩いている人はいない。
トモヒコは公園の周りを一周したが、ＸＸ工業は見当たらなかった。
一周して公園の入り口に戻って、今度は北側の道を歩いてみた。しばらく歩くと三叉路に突き当たった。そこを左に曲がって少し歩くと、ＸＸ工業の小さな看板が見えた。
看板は古くなっていて、ＸＸ工業という文字も消えかかっていた。トモヒコは看板の下まで足早になって歩いた。
ＸＸ工業の入り口は五メートルくらいの幅があり、鉄パイプでできた引き戸の門扉があった。トモヒコが引き戸の取っ手を持って軽く右に引くと、がらがらと音を立てて引き戸が動いた。
トモヒコは少し驚いて回りを見たが、道には歩いている人はいなかった。ＸＸ工業の中もしんと静まり返っていて、人がいる気配が

ない。
　トモヒコは少しだけ開けた門に体を滑らすようにして入った。X工業の敷地内には平屋建ての倉庫らしき建物があった。その建物は、プレハブ建築というのだろうか？味も素っ気もない事務的なもので、白い壁は古臭く所々茶色に変色していた。
　その倉庫にはシャッターがついていた。トモヒコはシャッターに手をかけて上げようとしたが、シャッターには鍵がかかっているようで引き上げることはできなかった。
　よく見るとシャッターの左側に小さな扉があった。トモヒコは今度は扉の前に行ってドアノブを回してみた。鍵がかかっているだろうと思ったが、何の抵抗も感じることなくノブは回って、あっけなく扉が開いた。
　トモヒコは扉を少しだけ開いて倉庫の中を見てみた。

倉庫はトモヒコの学校の教室ほどの広さがあった。
小さな窓があるようだが、中は薄暗く、がらんとしていた。
棚も、机も、椅子も、ない。
何もない――と最初は思った。

しかしよく見てみると、倉庫の奥に何か見える。
セーラー服？
セーラー服が脱ぎ捨てられている。
そしてその横に――よく見えない――。

トモヒコは静かに倉庫の中に入っていった。

人が倒れている。
人は白い紐のような物で縛られている。
茶色がかかった髪。
ああっ、人は女だ。女の子だ。

白いブラジャーは外れかかっていて、乳房が半分見える。
下はピンク。
そして口をガムテープのようなもので塞がれている。

近づくにつれて、トモヒコは心臓がばくばくと音を立てて振動するのを感じた。息が荒くなってくる。
トモヒコはゆっくりと歩き、ようやく倒れている女の子の側まできて、その顔を確認した。
ああっ――これは――。
この子はトモヒコのクラスのイワタ・ミドリだ！
少し顔に傷がついている。トモヒコはミドリの横に座って、思わず顔を触った。
ミドリは意識がなかったが、息はしているようだ。ミドリは生きている！
何故イワタ・ミドリがこんなところに？
それも半裸な姿で縛られている。
これはただごとではない。いったいミドリに何があったのか？

トモヒコは混乱した。
何故？　何故？　何故？
『何故』という文字列が何個も頭の中に浮かんで、ぐるるぐと動き回った。

何故、イワタ・ミドリがこんなところに？
何故、自分がこんなところに？

そして――どうすればいいのだろう？　と次の自分の行動を考えた。

イワタ・ミドリはぐったりとしていて、ほとんど動かなかった。

トモヒコはおそるおそるミドリの細い肩を軽く掴んでゆすってみた。ミドリの細い眉が少し動いたような気がした。なんだか眠っているようだ。
思い切ってミドリの体に目をやる。
ミドリの体は全体的に白く細い。白いブラジャーの紐が肩からずり落ちている。二つの胸の膨らみは思ったより大きいような気がした。そしてピンクの小さなショーツは少しずれ下がっていて、へその下に薄い陰毛が少し見えた。
トモヒコの心臓はさらに速く、もう破裂しそうなくらいにどきどきと振動した。
トモヒコはインターネットやビデオでは時々女性の裸を見ることがあったが、幼女でない女性の体をこんなに近くで見るのは初めてだった。
これは夢や幻ではなく現実だ。イワタ・ミドリがトモヒコの目の前に横たわっている。

トモヒコはしばらくその体を見ていた。
呆けたように、その体を見ていた。

ミドリのちょっと茶色がかかった長い髪。
やせた体にしては大きなやわらかそうな乳房。
そして小さなショーツからはみ出している薄い毛。
白く程よい太さの太もも。
トモヒコは体が硬直してしまい、しばらく動けなかった。
よく見ると太ももには青い痣のような痕がいくつかあった。
それを見た時ようやくトモヒコは我に返った。

ミドリは――ミドリは、乱暴されたのだ！
これは、ただごとではない。

警察――。
警察に届けなくては――。
トモヒコの頭にまず一一〇という数字が浮かんだ。
そうだ警察に電話だ。
そう思って立ち上がり、胸ポケットから携帯を取り出した。
一一〇番は携帯からもつながるはずだ。
携帯のボタンを押そうとした時手が止まった。

この状況は――？
この状況では、トモヒコは疑われる？
いや、自分は何もやっていない。
説明すれば警察の人も分ってくれるはずだ。
そう、変なメールがきて、そのメールに記された場所に行ったら、ミドリがこんな状態だった。
説明すれば分ってもらえる。
トモヒコはもう一度自分に言い聞かせて、携帯のボタンを押そうとした。

その時、倉庫入り口の方で声がした。二、三人が何か話しながら倉庫に入ろうとしているようだった。
トモヒコは慌てた。この状況を誰かが見たらどう思うだろう。
トモヒコがミドリに乱暴したと思われてもしかたがない。むしろそう思う方が自然だ。
とっさにトモヒコは入り口に向かっていき、半開きだった扉を閉めて、ノブについていた鍵を回して、扉をロックしてしまった。

「あれ、ドアが閉まったぞ」
「なんだ、なんだ」
倉庫の外でそう声が聞こえた。そしてがちゃがちゃとノブを回す音、シャッターを叩く音が聞こえた。

「おい、鍵がかかったぞ。誰かいるのか！」
倉庫の外の声が言う。
トモヒコは今度は別な意味で心臓がどきどきとしている。
そう、ミドリを襲った犯人だと思われてしまう。自分は疑われてしまうのだ。
トモヒコは入り口の反対側に小さな窓があるのを見つけた。
アルミサッシの窓はトモヒコの胸くらいの高さにあり、ちょうど人が抜け出せるほどの大きさだった。トモヒコはミドリの姿を少し見て窓を開けた。
窓の外にはブロック塀があった。トモヒコは思い切って窓から倉庫の外に出て窓を閉めた。
入り口の方ではドンドンと扉を叩く音がしていた。トモヒコはブロック塀を伝って、倉庫の周りを歩き、ＸＸ工業の敷地の入り口に向かった。
倉庫の角まできて、立ち止まり、敷地の入り口を見てみると、鉄パイプの門扉はトモヒコが入ってきた時のまま少し開いていた。
シャッターのある倉庫の入り口では、二、三人の学生服を着た人が見えた。トモヒコの通う中学校の制服だ。顔は見えなかった。

五メートル。
ほんの少しの距離。歩いて一〇歩もない。
トモヒコのいる倉庫の角から施設の入り口までは、そんな距離だった。
トモヒコはもう一度倉庫の扉の前にいる学生が施設の入り口を見ていないのを確認して、思い切り走った。
トモヒコは倉庫の前にいる学生達に気づかれずに、入り口を抜けて、住宅街に出た。

――逃げてしまった。
トモヒコは何もしていないのに、逃げてしまった。

☆★市立カンベ中学校★☆

65　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／11　23：03

今日、サカ○呼び出されていたね

66　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／11　23：42

サカ○だけじゃないみたい。説教部屋に何人かいた

67　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／11　23：44

サカ○って誰？

68　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／11　23：55

おまえは誰なんだよ

69　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／11　23：58

キョウちゃんも呼び出し

70　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／12　00：02

キョウちゃんも呼び出し

71　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／12　00：15

何かあったな

72　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／12　00：17

何かあったな

73　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／12　00：24

先生も騒いでた。職員室に行ったら追い返されたよ

74　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／12　00：36

＜＜73

何かあったな

何かあったな

何かあったな

何かあったな

何かあったな

何かあったな

何かあったな

75　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／12　00：39

何もないってw

76　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／12　00：42

警察の人がいました

77　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／12　00：50

→まじ？

78　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／12　01：22
何かあったな
何かあったな
何かあったな
何かあったな
何かあったな
何かあったな
何かあったな

79　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／12　01：34
うるさいよ、おまえ

80　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／12　01：46
ミ○リちゃんに何かあった？
最近、休んでますね

81　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／12　01：46
＜＜80
あの子の休みは日常茶飯事ｗ

82　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／12　01：50
でもかわいいね

83　名前：　名無し学生　投稿日：2008／06／12　01：55

そうだね

８４　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０６／１２　０２：０１

休んでいるといえばデカッチｗｗｗｗｗ

８４　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０６／１２　０３：２０

＜＜８４

デカッチなんかどうでもいい

それより何があった？

８４　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０６／１２　０３：３０

デカッチって人間ばなれしてるな

あの頭の大きさは異常ｗｗｗ

８５　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０６／１２　０４：１２

デカッチなんかどうでもいいって

８６　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０６／１２　０５：２２

朝ですよ♪

ぼくの思い出　小学校三年生

ぼくの通っていた小学校では二年に一度クラス替えがあったのだ。
驚くべきことに、ぼくはクラス替えのある当日までそれを知らなかった。
先生はおそらくホームルームの時間にそれを伝えたのだと思うが、ぼくは聞いていなかったか、あるいは休んでいたのだろう。
ぼくの親には学校から連絡がいっていたとは思うが、母親はぼくにそんなことは言わなかった。
ぼくは二年生になってもクラスのみんなに無視されていて、クラス替えがあるなんてことをぼくに言う人はいなかった。
重要なことは連絡プリントとして配布されていたはずなので、ぼくがクラス替えのことをまったく知らなかったというのは、今考えるとおかしい。

もしかしたらみんなぼくに隠していたのではないだろうか？
先生も――。
両親も――。
クラスの生徒も――。
みんな一緒になってぼくを無視していたのではないだろうか？

だから二年生の春休み前、クラスがいつもの休み前よりもざわざわと騒がしかったのに、ぼくはひとり蚊帳の外だった。
ああ、いつでもそうだったな。そう、ぼくはいつでも蚊帳の外だ。
それを思うとなんだか涙が出てくる。
ぼくはいつも蚊帳の外。
家でも、学校でも、ひとりだ。
もうそんなことには慣れたと思うのだけど、時々、何故か涙が溢れてくる。

寂しさなのか、悔しさなのか、分らない。
自分がどんな感情でいるのか、分らない。
しかし涙だけが――ただただ次から次へと溢れてくる。
小学校二年生の頃もそんな涙を何回流しただろうか？

終業式が終わったのはお昼ちょっと前で、その後、二年生最後のホームルームがあるのだと思って、ぼくは静かに教室の隅にある自分の席に座っていた。
それが終われば春休みだ。しばらく学校へ行かなくてもいい。ぼくにとって学校に行かなくてもいいということは、少し大きな重石が取れて、せき止められていた小川が流れ出し、そのわずかばかりの水で畑がほんの少し潤う。
そんな感じだ。それは救いだった。そう、楽しいことではなく、救いだった。

ぼくがぼんやりと席に座っていると、教室の後ろの方ではニノミヤを中心としてその周りに何人かの生徒が集まっていた。いつもの光景だった。しかし、誰かが突然教室の後ろの扉を乱暴に開けて入ってニノミヤに何か言ったとたん、クラスがいつもと違う雰囲気で包まれた。
みんな口々の何か話しながら、いっせいに、蜘蛛の子を散らすように教室を出て行った。

体育館――。

出てるって。

発表――。

クラスのみんなの口からそんな単語が聞こえた。あっという間に

教室はぼくひとりだけになった。
それでぼくも体育館に行ったのだ。
ぼくの教室から廊下へ出て、さらに校舎をいったん出て、『渡り廊下』と呼ばれる校庭に敷かれた道を通って、体育館に行った。まるで通勤ラッシュのように生徒が『渡り廊下』に溢れていた。
体育館はものすごい喧騒の中にあった。全校生徒が集まっていて、みんな壁に貼ってある紙を見て喚いていた。
そう、壁に貼ってある紙は新しいクラスの名簿だったのだ。
ぼくはようやくそれに気づいて、人の波を掻き分け、三年生の名簿の前まで行って、一組から順にリストを見た。

自分の名前とニノミヤの名前が同じクラスにありませんように――。

体育館の壁は茶色の木の板で、ニスが塗られているのか、少し艶があった。その壁に白い模造紙が貼ってあって、その模造紙に一組から三組までのクラスのメンバーが出席番号順に書かれている。出席番号は生年月日の早い順なので、四月生まれのぼくは、おそらく最初の方だ。ニノミヤはぼくと誕生日が近いので、同じクラスであるとすればぼくの近くに名前があるはずだ。
リストの前は大勢人がいて、ぼくは人の頭の間から必死になって、リストを見たのだ。

一組。
ぼくの名前もニノミヤの名前もリストにはなかった。
あっと小さく声が漏れた。サカタの名前が一組にあった。

二組。
ぼくの名前が三番目にあった。
そして、ニノミヤは――。

ニノミヤの名前は二組のリストには見つからなかった。
安堵。
ぼくは小学校に入ってからたぶん初めて安堵した。ニノミヤの名前は三組にあった。
ぼくはもう一度一組から順に名前の書かれたリストを見た。
ニノミヤと同じ組ではなかったこと――。
それにサカタとも同じ組ではなかった。
それをもう一度確認した。ぼくの見間違いではなく、本当に三人は別のクラスだった。ため息が出た。
ああ、よかった――。
ぼくはしばらく体育館の壁の前に立っていた。

しかし次の瞬間、いきなり天国から地獄へ突き落とされた。
誰かがぼくの足を蹴った。ぼくはふらふらとよろけて、何事かと後ろを振り返った。サカタの顔が見えた。
ええっ！と驚いていると、サカタはもう一度ぼくの足を蹴った。ぼくは完全にバランスを失って転んでしまった。薄笑いを浮かべたサカタは、今度はぼくのわき腹に蹴りを入れた。
ぼくはううっと呻いてしまった。痛いというか呼吸ができない。
ぼくがわき腹を押さえていると、誰かが背中を蹴る。わき腹を押さえている腕にも痛みが走った。
見ると、たくさんの人がぼくを囲んでいて、何回も何回もぼくに蹴りを入れていく。もう誰なのか、わからない。みんな薄笑いを浮かべていて楽しそうにぼくを蹴る。
「おい、何をしているんだ！」
大人の声がした。おそらく先生だ。
その声がすると薄笑いを浮かべていた生徒達が、一瞬でいなくなって、中年の男の顔が見えた。
「大丈夫か？」
中年の男がぼくを見ながら言った。ぼくはその先生に抱きかかえ

られるようにしながら何とか立ち上がった。
「先生、タケダ君が気持ちが悪いって、いきなり倒れたので、みんなで起そうとしたんです」
そう言ったのはニノミヤだった。
「おい、大丈夫か？」
中年の先生がぼくに聞いた。ぼくが「サカタがぼくを転ばした」と言おうとすると、周りから、
「タケダ君、大丈夫？」
「気持ち悪いの？」
と、速射砲のようにぼくを心配する声がして、ぼくはつい黙ってしまった。
その生徒達の顔からさっきまでの薄笑いは消えていて、みんな心配そうな表情をしていた。
「おい、タケダ、保健室に行こう」
先生はそう言ってぼくの肩を支えながら、体育館の入り口の方に目をやった。
ぼくはやりきれない思いを隠しながら、しかたなく先生に従った。
先ほど感じた安堵は、もう消えていた。

春休みがあっという間に終わってしまって、三年生の始業式の日がきた。
ぼくにとって桜という木とその花びらは散っている姿のイメージが強い。咲いている姿は美しいとは思うが、散っていく姿の寂しさの方が印象に残っているのだ。
始業式の日は雨が降っていて、濡れた校庭の砂利と散った桜の花びらが不思議な感じで交じり合っていた。
ぼくはその不思議な彩色の校庭を通って、新しい教室に向かったのだ。ニノミヤとサカタとは別なクラスにはなったのだけど、新しいクラスには以前ぼくを無視していた人が何人もいたし、気分は重かった。

これは今もそうなのだけど、春の雨というのはぼくの気分を必要以上に重くする。春になって、暖かくなり、氷が解け、花が咲き、生命が活気付く。春は何となく気分が上向いてくる。しかし雨が降ると、気温が下がって、その上向いた気分も一気に冷える。そう、いつだって春の雨は冷たいのだ。ぼくはそう感じている。

始業式は新しいクラスが発表されたあの体育館で行われた。ぼくはクラス発表の時のことを思い出して体育館にはあまり行く気がしなかったが、まだこの頃は体調が悪くないのに学校を休むということは考えもしなかった。

薄ら寒い体育館に行くと、どこかで見たことのある先生が並ぶ場所を指示していた。ぼくは新しいクラスである三年二組の列に並んだ。もう何人か並んでいたが、ぼくに話しかける生徒はいなかった。

少したつと、司会の先生が「静かにしなさい」と言って、始業式が始まった。始業式は坦々と行われた。

途中、新任の先生の紹介があり、そこで三年二組の担任がマツノ先生だということを知った。

クラスが替わって先生も代わった。

新しい担任のマツノ先生はぼくの母親と同じくらいの年齢の女の先生で、新任だった。

度の強い眼鏡をかけていて、髪の毛は少しウェーブがかかっていて、真っ赤な口紅をつけていた。

その時マツノ先生はおそらく新任のあいさつをしたのだと思うのだけど、ぼくはよく覚えていない。ぼくはマツノ先生が担任だということについても、その時はなんとも思わなかった。ただ担任は男のより、女の先生の方がいいなあと少し思っていた。

始業式が終わってぼくは新しい教室に向かった。三年生になると、教室は校舎の二階になった。ぼくの学校では学年が上になるに従って教室は上の階になる。五年生と六年生は最上階の三階だった。

教室にはマツノ先生も一緒に入った。教室に入るとマツノ先生がさっそく教壇に立ち、右の列から出席番号順に机につくように言った。その声ははきはきとしていて聞きやすく、ぼくはとてもてきぱきした先生だという印象を持った。

全員が席に着くとマツノ先生は大きな声で教室のみんなに言った。

「いい？今から出席を取るから、名前を呼ばれたら元気よく返事をしなさい」

みんなが黙って頷いていると、先生はもう一度言った。

「分ったの？返事は？」

先生の口調が少し厳しかったので、みんな少し驚いて慌てて返事をした。

アクツ君――。はい。

オオニシ君――。はい。

タケダ君――。

…はい。

ぼくは少し途惑ってしまって、返事をするのが遅れてしまい、小さな声になってしまった。

「声が小さい！」

突然マツノ先生が大声で言った。その声で教室中が静まり返ってしまった。ぼくは女の人のこんなに大きな声をじかに聞くのは初めてだった。

「もう一度、タケダ君」

「は、はい」

ぼくは先生の声に驚いてしまい、満足に声が出せなかった。

「タケダ、おまえは男か？女か？」

先生が何故そんなことを聞くのか、分らなかった。ぼくは男に決まっている。

「質問に答えなさい。おまえは男か？女か？」

「男です」

ぼくは小さな声で言った。
「だから、声が小さい！男ならもっと大きな声で返事する！いいな」
「はい」
ぼくはようやくまともな返事をした。マツノ先生は女の先生だけど、話し方は男みたいでとても厳しい先生だった。
そしてその厳しさはぼくにとって、とても辛いものになっていった。

あのことがあったのは、ゴールデンウイークの少し後だったから、五月の中ごろだったと思う。
その年は初春こそ雨が降ったりして少し冷たかったが、連休が近づくにつれて気温が上がって、ゴールデンウイークは暑さを感じるほどだった。
ゴールデンウイークが終わって梅雨に入るまでは、よく晴れた日が続いた。さらに気温は上がって季節はまるで夏のようだった。
ぼくがマツノ先生に呼び出されたのはそんな夏のように暑く、脇の下が汗ばむ日の午後のことだった。

「おまえ、金曜日に長袖の服、着てたよな？」
放課後ぼくが下駄箱に上履きを入れようとしていると、三年生になって同じクラスになったフルハシという背の小さな生徒が突然ぼくに声をかけた。
その頃もぼくに声をかける生徒なんてほとんどいなかったから、ぼくは少し驚いた。驚いてフルハシの顔を見てみると、何か醜い汚らしいものを見るような蔑んだ表情だった。
「先生が呼んでる。職員室へ行けよ」
フルハシはそれだけ言って、そのまま歩き去ってしまった。
ぼくは一瞬ぽかんとしてしまった。長袖の服を着ていたということと先生がぼくを呼び出しているということが結びつかなかった。
ぼくはわけが分らないまま靴を履いて下駄箱を出て校庭に向かっ

た。校庭に出たところでまた後ろから呼び止められた。今度は二、三人、同じクラスの生徒が叫ぶようにぼくの名前を呼んだ。
「タケダ、帰るなよ。先生が呼んでる！」
それでぼくはしかたなく靴を履き替えて、職員室に向かった。
ぼくが職員室に行くまでその生徒達はぼくについてきて、罵声を浴びせた。ぼくには何がなんだかさっぱり分らなかった。

職員室の扉を開けておそるおそる中に入った。小学校の頃は職員室なんてほとんど行かなかったので、ぼくはマツノ先生の席がどこにあるのか分らなかった。
入り口に立って室内を見ていると、ちょっと甲高い大きな声がした。
「おい、おまえ、こっちだ！こっちへ来い」
声の方を見るとマツノ先生が真っ赤な顔をしていた。眉毛を吊り上げてぼくを睨んでいた。
その赤い唇がまた動く。
「タケダ、こっちだ！」
マツノ先生は職員室の隅に行って、小さな古ぼけた茶色の木の扉を開けた。ぼくはわけが分らないまま、その扉の方に歩いていき、中に入った。
ぼくが中に入ると、マツノ先生も入って乱暴に扉を閉めた。
ばたん――。
部屋中が振動するような音が響いた。
職員室の隅から入ったその部屋は細長いテーブルとパイプ椅子が四脚あるだけの、狭く、暗い部屋だった。
「そこに座れ！」
またマツノ先生の声がぼくの耳に響く。ぼくがパイプ椅子に座ろうとすると、マツノ先生はいきなりパイプ椅子を蹴った。
「違うだろう、正座だ、正座！」
鬼のような顔――とでも言うのだろうか。マツノ先生の顔は何か

に怒って引きつっていた。しかしぼくは先生が何を怒っているのか、さっぱり分らなかった。
ぼくはおどおどしながらその暗い部屋の冷たいフローリングの床に正座した。
「おまえ、最低だな」
ぼくが正座すると、まず先生が言った。
「分っているんだよ。先週だけじゃないだろう？これまで何度もやっているんだろう？」
ぼくは先生が何を言っているのか、本当に分らなかった。それで先生の顔を見上げて愛想笑いをした。
その瞬間、左の頬に細い痛みが走った。
マツノ先生が指でぼくの頬をぶったのだ。
ぼくは何がなんだか分らない。何故先生が怒っているのか分らない。
「先生――ぼくは何故怒られているのでしょうか？」
ぼくは泣きそうな声で――いやもう涙が出ていたかもしれない。
ぼくは泣きながらマツノ先生にそう訊いた。
マツノ先生は度の強い眼鏡の奥にある大きな目を細めて、ぼくの顔をまじまじと見た。それはさっきぼくに声をかけたフルハシと同じような蔑んだ目だった。
「金曜日、二時間目が終わった後の休み時間、おまえは二階の女子トイレに入ったな」
ぼくは先生の言っていることがよく分らなかった。それで何も言わないで黙っていた。
「トイレの扉の下の隙間から覗いただろう」
ぼくは何も言えなかった。そんなことをした覚えはまったくない。先生は何か勘違いをしているのではないかと思った。
「そうだろう？何故、黙っている」
先生の赤い唇が動いて、低く脅すような声が漏れた。
ぼくは勘違いなんかじゃなく、先生は本当にそう思っているのだ

と、そこまで言われて初めて分った。
「ぼくじゃない。ぼくはそんなことしていない」
ぼくとしては大きな声を出したつもりだったけど、先生にはその声はあまり聞こえていなかったようだ。
「グレーの長袖のシャツを着た男の子が逃げていったと、覗かれた女の子が言っている。金曜日、グレーの長袖のシャツを着ていたのは、全校生徒の中で、おまえだけだ」
ああっ！　それで長袖だったのか。ぼくはフルハシが最初に言った言葉の意味がようやく分った。
ぼくは少し考えた。しかし金曜日長袖のシャツを着ていたのか？よく思い出せなかった。いや、そんなことより、ぼくは女子トイレなんか覗いていない。
ぼくのいる校舎の二階では男子トイレと女子トイレが隣りあっていたから、男子トイレに行けば自然と女子トイレの近くに行くことになるが、入り口が違う。女子トイレに入るなんて考えたこともなかった。
「先生、ぼくはそんなことしていません」
もう一度、今度は思いっきり大きな声を出して言った。
先生はアイシャドウの入った大きな目を一瞬閉じて、ぼくより大きな甲高い声を出した。
「見た女の子が三人もいるんだよ。悪いことをしたんだから、まず、謝りなさい」
ぴしゃりと先生が言った。もうぼくがやったことは先生の中では疑いではなく、事実になっているようだった。
「それは見間違いです。ぼくはやっていない。誰か他の人だ」
ぼくは涙を流しながらそう言った。
「三人が三人とも間違える？おまえしかいないだろう、でか頭」
なんと先生は最後に『でか頭』と言った。それはぼくがその頃、ニノミヤ達から面白がって言われていたあだ名だった。
ぼくは、本当に、本当に驚いた。先生がニノミヤ達と同じように

ぼくを嫌っているのだと思った。
それで、それで、こんなに怒るんだ。
それで、やってもいないことの犯人にされるんだ。
ぼくは悔しくて、やりきれなくて、涙が溢れた。涙とともに鼻水も出てきた、ぼくはうつむいて、顔をしわくちゃにしながらすすり泣いた。
しかしマツノ先生は容赦せず、次々とぼくの胸をえぐるような言葉をつきつけたのだ。

おまえは、一番やってはいけないことをやった。最低だ。
自分のやったことで女の子がどんなに嫌な思いをしたのか、分っているのか？
おまえ、男として最低だぞ。
そんなことをするからみんなに嫌われて、無視されるんだ。
変態。

マツノ先生の顔をちらっと見た。いつか映画で見た悪魔のような恐ろしい顔だった。
吊りあがった目は眼鏡の上からも分る。鼻の穴が大きく開いて、への字型の口から次々と、ぼくを罵倒する言葉が発せられた。
ぼくはその言葉を聞くたびに、まるで尖った彫刻刀で胸を刺されて、ぐりぐりとえぐられるような感じがして、ずきずきと心臓のあたりが痛くなった。
「ぼくはやっていません」
小さな声でそう言うと、マツノ先生がまたぼくの頬をぶった。今度はさっきより強くぶった。でも頬の痛さより、先生のぼくを罵倒する言葉の方が痛かった。

その時部屋の小さな木の扉が小さな音とともに開いた。扉の方を見ると、一組のフジイ先生がいた。フジイ先生は白髪の混じった中

年の男の先生だった。フジイ先生はぼくの方は見ずにマツノ先生の方に近づいて、マツノ先生の耳元で何かささやいた。
扉が開けたままになっていた。ぼくは何気なく扉の隙間から、職員室を見た。
そこに女の子が二人いた。　もしかして覗かれたという女の子なのか？
ひとりの女の子は下を向いて泣いているようだった。
もうひとりはぼくのクラスのイワタ・ミドリだった。
ミドリがぼくの方を見て少し笑ったような気がした。

ヘンタイ。
ヘンシツシャ。
ノゾキヤ。

ある日ぼくがクラスの自分の席につくと、机の上にコンパスのような尖ったものでそう彫ってあった。

ある日の午後の会話　その2

サトウはトモヒコを一瞥して静かに目を閉じた。そして大きくため息をついた。

「ニノミヤがいったい何をしたんだ」

「何って――そんなの、数え切れないくらいの嫌なこと――。

あいつはぼくのことが嫌いで、嫌いで、ぼくが存在しているこ　とが耐えられないらしいです」

トモヒコの言葉は力なく、静まった午後の相談室の中にゆっくりと流れる。

サトウはもう一度トモヒコの目を見て、訊く。

「わかった。順番に聞こう。まず最初は？　タケダとニノミヤは同じ小学校だったな」

「先生、同じも何もぼく達の学区は私立中学に行かない限り、小学校と中学校は、同じメンバーがそのままです」

トモヒコはサトウに少し軽蔑した視線を向けた。

「ああ、すまない。そうだったな。この学区には小学校と中学校がひとつずつしかないのか――」

「そうです、だからぼくとニノミヤは小学校一年生から、ずっと同じ学校」

トモヒコは、そんなことも知らないのか――と少し投げやりな態度になった。

サトウは気を取り直して、椅子を少し引き、トモヒコの方に近づいて次の言葉を発した。

「小学校の時からニノミヤに、嫌がらせをされたのか？」

トモヒコはふうっと息をついて言った。

「そう、いじめられた。小学校一年生の入学式の日から、ぼくはあいつにいじめられ続けている。嫌がらせなんてもんじゃないです。もっと、もっと、酷い。いじめですよ、先生」

トモヒコの口から、『いじめ』という単語が発せられると、サトウの肩がびくりと反応した。
トモヒコはそれを見て、もう一度言った。
「先生、いじめなんですよ。あいつは小学校一年の頃からずっとぼくをいじめているんです」
「例えばどういうことをされたんだ？」
サトウが静かな、しかしよく響く低い声でトモヒコに訊いた。それを聞いたトモヒコは、またうつむいて黙ってしまった。
「言いたくないのか？」
「いえ、あまりにもいろんなことをされたから、何から話そうかと、考えていました。
一番嫌なのはクラスのみんなからずっと無視されているということです。小学校一年生からずっと。
それの首謀者がニノミヤ。あいつがみんなに圧力をかけて、ぼくを無視するようにさせている。
まあ、ぼくがこんなキモいやつだから、みんなが嫌うのかもしれないけど、クラス全員が無視するってのはおかしいですよね？
先生、ぼくはこの学校にひとりも友達がいないんです。学校で誰かと話したことなんてほとんどないです。八年間もそんなことが続いている。
あといろんなことをされましたね。小学生の頃だけでも、シャープペンで腹を刺されたり、スリッパがなくなっていたり、鞄に残飯が詰まっていたり、机に変な落書きをされたり、もう数え切れないほど嫌なことをされました。そしてそれは今でも続いている」
トモヒコは最後の方は、笑いながら言った。
「何故ニノミヤは、そんなことをするんだ？」
「何故って、ぼくが嫌いだから。存在自体がうざいって、小学校一年の頃、言われました」

穏やかな継続

イワタ・ミドリに何があったのか？

あの倉庫の中に充満していた湿った空気。

ミドリの白い肌。

トモヒコが倉庫から逃げる時にいた二、三人の学生。

そういったものがトモヒコの頭の中に渦巻いていて、目を閉じると、それらの記憶がフラッシュバックのように浮かんだ。

イワタ・ミドリに何があったのか？

そして、疑問。

トモヒコを呼び出したのは誰だ。

あのメールの差出人は誰だ。

いったい何のためにトモヒコをあの倉庫に行かせたのだ。

トモヒコの頭の中に疑問符が溢れる。

そして、不安。

トモヒコがあの場所にいたことを、誰かに知られてはいないだろうか？

逃げる時にいた二、三人の学生には見られていないと思う。

あの倉庫のある建物から外に出るところも、見られてはいない。通りがかった人はいなかった。

トモヒコにメールを出した人物。おそらくその人物はトモヒコがあの倉庫に行ったと思っているかもしれない。しかしその人物は謎。

もしかしたら、その人物は遠くから望遠鏡であの倉庫を見ていたかもしれない。

いや、そもそもその人物こそミドリに乱暴したのではないか？

そしてその罪をトモヒコになすりつけようとしているのではないか？

トモヒコは倉庫から帰った後、新聞やネットのニュースをくまなくチェックしていた。しかし名古屋地方で女子中学生が乱暴されただとか、レイプされたという記事は発見できなかった。

誰かに相談しようか――とも思った。

両親にはとても言う気になれなかった。

そんなことを相談する友達もいなかった。

一瞬サトウ先生の顔が浮かんだ。

相談するとすればサトウ先生だ。

トモヒコはもし今回のミドリのことが新聞やネットで事件になるようなことがあれば、サトウ先生に話そうと決めた。しかしそんな記事はどこにもでなかった。

トモヒコは自分の保身ばかり考えていたが、そもそもミドリは無事なのだろうか？ミドリは学校へ行っているのだろうか？

それも気になった。いや、本当はそれを一番先に考えなければならないのかもしれない。

しかしトモヒコはミドリの体の無事を第一に考えられなかった。

それは――それはイワタ・ミドリを心の底では憎んでいたからなのだろうと、トモヒコは思った。

だからミドリに対して可哀想だとか、気の毒だと思う気持ちが中々涌かなかった。

むしろ心のどこかでミドリが酷い目にあうことを願っていたのかもしれない。

何故ならミドリはニノミヤやサカタと同類。一緒になってトモヒコに苦痛をあたえた。そう、やつらと同じ血の通っていない悪魔なのだ。

真っ暗な部屋の中を古いエアコンがうなっていた。
今日も真夏日でエアコンをつけないと、とても寝ていられなかった。トモヒコの部屋のエアコンはもう一〇年も前の製品で、風量を最強にしないと冷えない。それでエアコンはフルパワーで仕事をする。得体の知れない怪物がうなるような音が、トモヒコの部屋を駆け巡っていた。
そんな真っ暗な部屋でトモヒコはベッドに横たわっていた。
疑問、不安がトモヒコの心を支配して、眠れない。
とにかくミドリが学校へ行っているかどうか？
それをサトウ先生から聞き出そうとそう思った。どうやって訊くか？それを考える。いきなりミドリのことを訊くのは変だ。どうやって聞き出そうか？
トモヒコが考えていると枕元にあった携帯からメール着信音が聞こえた。
時刻は午前二時を少し過ぎたところだった。

ベッドから上体を起こし枕元の携帯を手に取る。メールの着信を示す緑色のランプが点滅していた。真っ暗な部屋の中でトモヒコは携帯をあけてメールを確認した。

差出人：ａｎｇｅｌ@ｘｘｘ．ｘｘ．ｎｅ．ｊｐ
件名：お知らせ
ミドリちゃんは何回も何回もやられちゃって、中出しされたようだよ
可哀想だね
でも彼女はそんなことにはなれているから大丈夫だよ

トモヒコはしばらく携帯の液晶画面を見ていた。
このメールからミドリはレイプされたということが、トモヒコに

も分った。
そして差出人はあの時の「ＸＸ工業の倉庫で何かある」ということをトモヒコに伝えたメールと同じだった。
トモヒコの心臓の鼓動が速くなってくる。全身が緊張する。そして頭に血が上ってくるような感覚――。
いったいどういうことなのだろう。
さっきまで感じていた疑問、不安が、さらに加速度を増してトモヒコの精神を攻撃し始めた。

メールの差出人は誰だろう。
トモヒコは緊張してやや鈍くなった頭で考える。
真っ先に浮かんだのはニノミヤの薄笑いだった。ニノミヤか彼らのグループの誰かが、トモヒコに何かしようとしているのだ。
トモヒコを混乱させ、困らせて、楽しんでいるのか？
やつらがトモヒコのメールアドレスをどうやって知ったかは分らないが、今考えられるのはそれくらいだ。
そうであればこんなメールは無視すればいい。トモヒコはそう結論した。

携帯のメールの設定で迷惑メールを拒否することができる。このメールの差出人のアドレスを拒否するように設定すればいいのだ。
ただ気になるのはトモヒコのアドレスが知られているということだ。相手はメールアドレスを変えて、またトモヒコにメールを送ってくるかもしれない。

突然部屋の外から、ぼぼぼぼっという大地が発狂して叫んでいるような大きな音がして、トモヒコは一瞬びくりとしてしまった。不法改造したバイクがトモヒコの家の近くを通り過ぎたようだった。
その音でトモヒコの想像が打ち切られて、現実の真っ暗な部屋と、うなるようなエアコンの音が戻ってきた。トモヒコは少し冷静にな

って携帯を操作した。

件名：Ｒｅ：お知らせ

あなたは誰ですか？

単純なことだ。いろいろ考えているより差出人に訊けばいいのだ。トモヒコは疑問と不安に支配されて、こんな単純なことを忘れていた。

どういう返信がくるのか？あるいはメール爆弾みたいな攻撃を受けるかもしれないが、フィルタとかで対策できるかもしれない。最悪メールアドレスを変えればいいのだ。

そもそもトモヒコの携帯のメールアドレスにはメールマガジンやどこかのメーカーからのお知らせメールくらいしか届かないのだから。

トモヒコはメール送信ボタンを押してベッドに横になった。

カーテンの隙間から白々とした光が差し込んでいた。もう外は明るくなっていた。

トモヒコが目を覚ましたのは梅雨時に似つかわしくない青色が空を隈なく支配している午後だった。トモヒコは目覚めてまず携帯を確認した。メールの着信はなかった。その後カーテンを開けて、その空を支配している青色に眩暈を覚えた。

時刻は午後一時。頭の中は靄がかかったようで、さえない。

昨夜、というか今朝、ようやく眠ったのだが、何かに追いかけられているような夢を見た。起きてみると体中が疲れていた。熟睡していないのだろう。

もう一度携帯をひらいて昨夜のメールを見た。もしかしてあのメールは夢だったのかもしれない、とそう思ったが、トモヒコの携帯の中に確かにあのメールがあった。そしてトモヒコの返信も携帯のメモリに残っていた。

しかしそのトモヒコのメールに対する返信は今のところない。おそらくこれからも返信はないのだろう。トモヒコはそう思った。

それにしてもミドリのことが気になる。

あのメールにはレイプされたような内容が書いてあった。

彼女はなれているから――とはどういうことだろうか。レイプに慣れているなんて、考えられない。そういった行為――性行為に慣れているということだろうか？

トモヒコはセックスの経験はなかったが、何となく分っていた。それはネットや本、ビデオからの知識だった。学校で性教育を受けた覚えはない。

そしてトモヒコはそういった性行為が、何となくいけないことのように感じていた。大人のやることだと思っていた。

あのイワタ・ミドリがどんなことをされたのか？

トモヒコはミドリの顔を思い浮かべた。

トモヒコはビデオで見た性行為にミドリの顔を重ねようとした。

ニノミヤの顔が浮かんだ。

ニノミヤとミドリはそういう行為をしていたのだろうか？

そんな想像をしていると、いつの間にかトモヒコの性器が固くなってくる。

トモヒコはそんな自分が嫌になった。

部屋を出て、階段を降りて、キッチンへ行った。冷蔵庫を開けて、牛乳を飲む。

トモヒコの家には昼間誰もいない。

父親は会社だ。母親はどこに行っているのか、トモヒコは知らない。もしかしたら働いているのかもしれない。

トモヒコが半ば引きこもり状態になった当初、母親はうるさいくらい毎朝トモヒコを起こしにきたが、最近ではもうあきらめたのか、何も言われなくなった。

トモヒコは最近ほとんど両親の顔を見ていなかった。
トモヒコはしばらくキッチンの木製の椅子に座ってぼんやりとしていた。木製のテービルと木製の椅子。家族が三人がこのテーブルに揃うことはもうなくなった。最後に父親と母親、それにトモヒコがこのテーブルを囲んだのはいつのことだろう。トモヒコには思い出せなかった。

トモヒコはやはりミドリのことが気になった。何か大きな事件になっているのではないか？という不安があった。
サトウ先生に電話をしようかと思ったが、どうやってミドリのことを確かめてよいのか、いい方法が思い浮かばない。いろいろ考えて、とりあえず学校に電話をしてみようと思った。
トモヒコはそう決心して、自分の部屋に戻り、ネットで学校の電話番号を調べた。インターネットというのは便利だ。
携帯を取って、番号非通知を確認して、学校の代表番号にかけた。
「もしもし、カンベ中学校ですが――」
受話器の向こう側で上品な女性の声が言った。
トモヒコはわざと作った低い声で言った。
「すみません。そちらの中学校のイワタ・ミドリさんですが、今日は登校しているでしょうか？」
そう言うと受話器の向こう側の女性の声が突然攻撃的に変わる。
「申し訳ありませんが、どちら様でしょうか？」
トモヒコが途惑っていると、女性の声が大きくなった。
「もしもし？聞いていますか？」
トモヒコはその問いの答えを用意していなかった。それでやや早口になって言った。
「すみません。イワタさんの親戚のものですが、連絡を取りたいのですが」
「お名前をおっしゃってください」
女性の声は事務的で冷たい感じがした。トモヒコは黙ってしまっ

た。
「申し訳ありませんが、そういったことにはお答えできないことになっています」
電話は唐突に切れた。
トモヒコは学校に電話したことを後悔した。軽率だった。結局、ミドリのことは何も分らないまま、その日は暮れた。

リベンジ　その2

次にトモヒコがメールを受け取ったのは、その日から一週間が過ぎた、生温かい空気が街中に溢れかえった七月の初旬だった。

トモヒコは相変わらず眠れなくて、眠ったのは明け方だった。それでその日も午後ようやく起き出して、キッチンで牛乳を飲んだ。母親も父親もいなかった。

部屋に戻ると携帯のメール着信のライトが点滅していた。

差出人：ａｎｇｅｌ@ｘｘｘ．ｘｘ．ｎｅ．ｊｐ
件名：お知らせ
今週の土曜日１３時　パピヨンの駐車場
お話があります

先週トモヒコは同級生のイワタ・ミドリのことが気になって、このメールの差出人に返信した。あなたは誰ですか？という内容だった。その返信に対する回答はなかった。

トモヒコはミドリのことが気になって学校に電話したが、結局、ミドリのことは分らないまま一週間が過ぎた。トモヒコは前回のメールの回答がなかったこともあり、もうメールはこないのだろうと思っていた。

しかしトモヒコの思いとは裏腹に突然メールが来た。

パピヨンというのは、トモヒコの学校の近くにあるボーリング場や映画館やパチンコ屋がそろっているちょっとしたレジャー施設のことだろう。トモヒコの通っている中学校からは歩いて十五分くらいの距離にある。

トモヒコの街に住む若者であれば誰もが知っているスポットだった。夜遅くなると不健全な若者が集まってくるということから、ト

モヒコの中学校では夜遅くパピヨンに行くことを禁止されていた。
トモヒコははるか昔まだトモヒコに家庭というものがあった頃、両親に連れて行ってもらった記憶がある。しかしトモヒコひとりでパピヨンに行ったことはなかった。

トモヒコは携帯を置き、ベッドに寝転がって目を閉じた。
何故こんなメールが来るのだろう？
このエンジェルと読める差出人のアドレス。
エンジェルはトモヒコに何をしたいのだろう？
エンジェルはトモヒコに何故こんな謎めいたメールを送るのだろう？

トモヒコはしばらくベッドに寝転がって考えていた。
前回のメールではあの倉庫におもしろいものがあるという内容だった。トモヒコがそこに向かうと、ミドリが倒れていた。そしておそらくトモヒコの学校の生徒であると思われる学生が何人かあの倉庫に来た。
あそこで見つかったら、トモヒコはミドリに乱暴した犯人にされていたかもしれない。
トモヒコは一週間前の想像の続きを開始した。

メールの差出人は――おそらくニノミヤか、あいつの周辺の誰かだ。
そいつらは何か事件を起こし、その罪をトモヒコになすりつけようとしている。いやもしかしたら、ミドリのこともニノミヤ達が仕組んだものだったのかもしれない。トモヒコがあたふたしたり、こんなに悩んでいるのをどこからか見ていて、楽しんでいるのかもしれない。
だからトモヒコが今週の土曜日にパピヨンに行ったら、また何か事件が起こる。

そしてトモヒコが疑われてしまうような状況になっているのだろう。この前の倉庫と違ってパピヨンは人が多いから、今度はとても逃げられない。

こんなメールに従ってはいけない。やはり無視すべきだ。

トモヒコはそう思った。

件名：Ｒｅ：お知らせ

おまえは誰だ。こんなメールを送るな

トモヒコは携帯の送信ボタンを押してベッドに横になった。

しばらく天井を見ていると携帯にメールが着信した。

差出人：ａｎｇｅｌ@ｘｘｘ．ｘｘ．ｎｅ．ｊｐ

件名：お知らせ

わたしはあなたの味方です

イワタ・ミドリさんのことでお話しがあります

今週の土曜日１３時　パピヨンの駐車場

必ず行ってください

トモヒコはメールを見た。味方だと？

名前も性別も教えないそんな相手をとても信じられなかった。

しかしそれと同時にミドリのことも気になった。この差出人は、ミドリのことで話しがあると書いている。

これはいたずらなのか？

トモヒコの周りで何か黒い巨大な霧のようなものが、ぐるぐると渦巻いている。トモヒコはその巨大な渦の中に取り込まれていくような気がした。

土曜日の朝、トモヒコは午前十時に目が覚めた。

最近はずっと夜眠れなくて、午後に起きることが多かった。眠れ

ないのは昨夜も一緒だったが、何故か今日は八時に目が覚めてしまった。
ベッドから起きて枕元の携帯を見ると、メールの着信ランプが点滅していた。眠っていてメールの着信に気がつかなかったようだ。
トモヒコは寝ぼけまなこで携帯を確認した。

差出人：ａｎｇｅｌ@ｘｘｘ．ｘｘ．ｎｅ．ｊｐ
件名：お知らせ
わたしはあなたの味方です
イワタ・ミドリさんのことでお話しがあります
今日１３時　パピヨンの駐車場
必ず行ってください

エンジェルからのメールだった。内容は前回と同じ。『今週の土曜』という箇所が『今日』に変わっている。
トモヒコはベッドに座り、携帯を持って、六畳ほどのむさ苦しい自分の部屋を見た。
パソコンデスクの周りに散らばったコンビニのレジ袋や弁当の殻、スナック菓子の袋。
まるで都市のビルのように乱立したペットボトル、アルミ缶。
雑誌、漫画、パンプレットなどの紙が床にも散らばっている。
埃が積もった絨毯は所々変色している。
もうずっと掃除をしていない。小学生の頃は少し汚いと見かねた母親が掃除することもあったが、最近では母親もトモヒコの部屋に入ることがなくなった。それでこの部屋を掃除する人はいなくなった。ゴミが、チリが、アカが、ホコリが、トモヒコの部屋を侵食している。そしてそんなものより、もっと恐ろしい何かがトモヒコの心に侵食しようとしている。
エンジェル――。

直訳すると天使。
トモヒコには天使が分らない。神の使い？とても可愛いものにも思えたが、その可愛さが恐ろしくも感じた。とにかくなんだか分らない。分らないものは怖い。トモヒコはこのエンジェルからのメールに怯えていた。

この二日間、トモヒコは考えた。
そして昨夜、ひとつの結論らしきものに達した。
とりあえず、パピヨンに行ってみよう――。
ただし指定された十三時ではなく、少し遅れてパピヨンに行く。
そう結論した。
十三時にパピヨンの駐車場で何かが起こる――かもしれない。
その時間にその場所に居合わせてしまったら、前回のように逃げ出すのは難しいかもしれない。パピヨンはあの倉庫なんかよりずっと人が多い。少し遅れていけば何とかなるかもしれない。何か起こって騒ぎになっていたら、パピヨンの入り口で帰ればいい。何も起こっていないようだったら駐車場まで行けばいい。本当にエンジェルが来ていて、時間に遅れたことを詰られるかもしれないが、その時はその時で何か言い訳をしよう。
トモヒコはそう考えていた。

トモヒコは部屋の暑さに耐えられなくなって、エアコンのスイッチを入れた。ベランダの室外機がぶーんと不気味な音を立てて動き出し、しばらくしたら部屋の壁に取り付けてあるエアコンが低く大きく叫びながら温風を吐き出した。
トモヒコはカーテンを開けてみた。空は今日も青くトモヒコの暗い気持ちをあざ笑っているかのようだった。

玄関の扉を開けると眩しい日差しが溢れていて、トモヒコは軽い眩暈を覚えた。昼間外に出るのは久しぶりのことだった。時刻は午

後一時を少しまわったところだった。
トモヒコはガレージの隅に置いてある自転車のスタンドを下げた。自転車はトモヒコの母親が乗っていたもので、最近はほとんど使われた形跡がなく、埃をかぶっていた。
自転車に乗ってガレージを出た。タイヤの空気があまり入っていなくて、ガレージの出口の段差を乗り越える時にがくんと衝撃があった。しかしそんなことにかまわず、トモヒコは自転車を走らせた。トモヒコの家からパピヨンまで自転車に乗って十五分くらいだ。
風はほとんど吹いていない。太陽からの光が眩しかった。その光は細かい矢のようになって、自転車をこぐトモヒコの全身を突き刺していく。ちくちくと全身が痛いように感じた。この痛みはトモヒコが半ば引きこもりのようになっていて学校に行っていない自分を後ろめたく思っているからだろうか？

商店街を抜けて二丁目のコンビニの角を曲がると、パピヨンはすぐだ。
トモヒコの目前に紫がかったパピヨンの看板が迫る。そしてその看板の向こうに「P」という駐車場を示す青い看板も見えた。
トモヒコはパピヨンの看板の前で自転車を止めて、入り口から広い駐車場を見た。
昼の太陽はトモヒコの頭上にあり、相変わらず強い光を振りまいていた。駐車場は結構広く、半分くらいが埋まっている。ほとんどがパチンコ屋に来る人の車なのだろうと、トモヒコは思った。
しばらく駐車場を見ていたが、特に変わったところはなかった。時々車が出入りしている。自転車に乗った学生もちらほらと見えた。トモヒコは学生が見えると下を向いて顔を隠した。
パトカーも救急車も見えないし、警察の人も見当たらない。何か事件が起こっている様子はなかった。
トモヒコはパピヨンの駐車場に入り、ゆっくりと自転車で一周した。やはり変わったことは起きていないようだ。

駐車場の東側にボーリング場とパチンコ屋がある建物があった。その建物の横に駐輪場があって、原付バイクや自転車が三十台くらい置かれていた。トモヒコは駐輪場に自転車を置いて、歩いて駐車場の方に向かった。

パピヨンの敷地内に建物は三つあった。駐輪場がある建物は一階がパチンコ屋で二階がボーリング場だった。その隣に一階がゲームセンターで二階が映画館になっている建物があり、もうひとつは三階建ての建物で温泉といろいろなテナントが集まっているショッピングエリアだった。

その三つの建物の周りはすべて駐車場になっていた。

だからパピヨンの駐車場といってもすごく広いのだ。トモヒコは、以前パピヨンに行ったことはあったが、記憶が薄れていて、まさかこんなに駐車場が広いとは思っていなかった。

平日の昼間のパピヨンはトモヒコが思ったより静かだった。頭の薄い中年がトモヒコの横を通ってパチンコ屋に入っていった。パチンコ屋の扉が開くと、一瞬、やかましい電子音と店員のアナウンスが聞こえたが、自動扉が閉まるとすぐに静寂が戻る。

トモヒコはボーリング場のある建物から、駐車場の周りをゆっくりと歩き出した。

パピヨンの駐車場の隅は白い柵で囲まれていた。トモヒコは車が止めてある範囲をゆっくりと歩いた。

途中、突然車から人が出てきて驚いたが、その人はトモヒコの方を見ないでパチンコ屋に向かっていった。

駐車場をふらふらと歩いているトモヒコに話しかけてくる人はいなかった。

何もないのか――？

あのメールは何だったのだろう？

映画館のある建物に近づいてその角を曲がる。
また広い駐車場が見えるだろうと思っていたら、その先は行き止まりだった。映画館のある建物は四角形――、いや四角柱ではなかった。
そしてそこに三、四人の学生が固まっていた。
学生はトモヒコの学校の制服を着ていた。
男が三人、女が一人。
トモヒコはすぐに引き返そうと思ったが、女の学生と目が合ってしまった。
女は、バンドウ・キョウコだった。
バンドウ・キョウコはちょっと茶色がかかった髪をポニーテールみたいに後ろで結んでいた。ちょうどその時駐車場の車止めに座って男子生徒と話していた。トモヒコと目が合うと少し驚いたような顔になって、すぐに目の前の男子生徒に言った。
「ああ、デカッチ！ちょっと！ちょっと！デカッチがいる！」
キョウコの高い声が響くと前に立っていた男子生徒がいっせいにトモヒコの方を見た。
汚らしい長髪でワイシャツの胸をはだけた学生はトウドウ・ミノル。
丸刈りのずんぐりした体格の学生はナカタニ・シゲル。
あとひとり、背の高い学生がいたがトモヒコは名前を知らなかった。
トモヒコは体を反転させて、来た方向に向かって走り出した。
「ああ、待てよ」
「逃げるな、デカッチ」
トウドウの大きな声が聞こえた。トモヒコは必死になって足を動かした。
トモヒコの後ろから、トウドウ達が地面を蹴って立ち上がる音、走って追いかけてくる足音が聞こえた。
トモヒコは必死に走ったが、三十秒ほどすると背中から抱きつか

れ、倒されてしまった。見上げるとトウドウの顔があった。
しばらくするとナカタニやキョウコ、そしてトモヒコの知らない男子学生がトモヒコの周りを囲んだ。
トモヒコはうずくまったまま無意識に腹を抱えた。腹を蹴られると思った。
しかし蹴りは背中に入った。その瞬間、呼吸ができなくなった。
「おい、ここだと目立つ」
誰かが小声で言った。
「おい、起きろよ」
ナカタニはそう言ってトモヒコの肩を持ち上げた。トモヒコは息が苦しかったが、何とか立ち上がった。
「こいよ」
トウドウがすごい目でトモヒコの方を睨みながら言った。キョウコやナカタニもトモヒコの方を睨んでいる。トモヒコは八つの目に睨まれながら、さっき彼らがたむろしていた駐車場の隅へ連れていかれた。
トウドウはパピヨンの三つの建物の入り口や、駐車場の入り口から死角になる駐車場の車止めにトモヒコを座らせた。そしてあらためてトモヒコの方を睨んで言った。
「で、なんなんだよ、おまえ？」
トモヒコは黙っていた。
「おまえ、俺らを呼び出しただろう？何かあるのか？」
トウドウが強い口調でまた言った。

呼び出した？
トモヒコが？
いや呼び出されたのはトモヒコの方だ。トモヒコにメールを送ったのはトウドウではないのか？
「黙ってるんじゃねえ！」

ナカタニがトモヒコの腹を軽く蹴った。
「知らない」
トモヒコはやっとの思いでそうつぶやいた。
「メール出しただろう？何のつもりだよ、デカアタマのヒッキー」
キョウコの甲高い声が聞こえてスカートがふわっとめくれたかと思うと、トモヒコのわき腹に痛みが走った。ナカタニの蹴りより強烈だった。
「まったくデカッチのくせに――」
キョウコがそう言った瞬間だった。

痛て！
トウドウの短い声が聞こえた。

ううっ。
キョウコが突然、横腹を押さえてうずくまった。
見ると、トウドウも腹を押さえている。

アカい――。

トウドウの手の間から赤い液体が流れ出している。
キョウコの白い夏物のセーラー服も赤く染まっている。

おい、どうした！
ナカタニの慌てた声が聞こえた。
もうひとりの名前を知らない男もいきなり倒れこんだキョウコの血を見て、呆然とその場に立ち尽くしている。
キョウコが駐車場の地面に黒いしみを作っていた。それはキョウコの腹から出ている血だった。
トウドウは何とか立っていたが、腹からぽたぽたと血を流して、やはり駐車場の地面に黒いしみを作っていた。

トモヒコは何が起こったのか分らなかった。
突然ふたりが腹から血を流しはじめた。

アカい――。
白いワイシャツと白いセーラー服を赤い血が侵していく。

トモヒコはいつの間にか立ち上がっていた。
そして、そして――、その場から逃げ出した。

「おい、待てよ」
ナカタニの声が聞こえたが、トモヒコはかまわずに全速力で駐輪場へ向かった。ナカタニは追ってこなかった。
トモヒコはまた逃げ出してしまった。

☆★市立カンベ中学校★☆

２３４　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２
１：０３
パピヨンに救急車いた

２３５　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２
１：０４
パトカー　救急車　通り魔らしい
血のあとがあった

２３６　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２
１：１０
誰か刺された
誰か刺された

２３７　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２
１：１１
３年のトウドウ

２３８　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２
１：１２
まじ？

２３９　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２
１：１５
→まじ？？？

２４０　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２

１：１９
ニュースでやってた
パピヨンの駐車場で中学生が２人刺されて重傷だって
ひとりはトウドウみたい
２４１　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２
１：２１
まじかよ
怖いな
２４２　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２
１：２５
犯人は？捕まってないの？
２４３　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２
１：２７
逃走中
２４４　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２
１：２８
闘争中
２４５　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２
１：３０
こえー
がくがく
２４６　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２
１：３１
パピヨン、入れないぞ

パトカーとかテレビの車とかいた

２４７　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２１：３４

あとひとりは誰だ？

ナカタニくん？

２４８　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２１：３８

おまえ誰だ？名前だすな

２４９　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２１：４１

女の子ってテレビで言ってた

誰だ？

２５０　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２１：４４

誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？

誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？

誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？

誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？

誰だ？

２５１　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２１：４４

誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？

誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？

誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？

誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？

誰だ？

252　名前：　名無し学生　投稿日：2008／07／13　2
1：45
誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？
誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？
誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？
誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？

誰だ？

253　名前：　名無し学生　投稿日：2008／07／13　2
1：48
俺だ！俺だ！俺だ！俺だ！俺だ！俺だ！俺だ！俺だ！
俺だ！俺だ！俺だ！俺だ！俺だ！俺だ！俺だ！俺だ！
俺だ！俺だ！俺だ！俺だ！俺だ！俺だ！俺だ！俺だ！

254　名前：　名無し学生　投稿日：2008／07／13　2
1：50
＜＜253こんなときにふざけるな
ばか

255　名前：　名無し学生　投稿日：2008／07／13　2
1：53
学校から連絡あった
出歩くな
危険だぞ

２５６　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２１：５９
犯人は老人らしい
２５７　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２２：０２
＜＜２５６　うそつくな
２５８　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２２：１０
もうひとりはキョウちゃんらしい
２５９　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２２：１３
→だから、名前出すなよ、馬鹿
２６０　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２２：１６
キョウちゃんって誰？
２６１　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２２：１８
知らないやつは出てくるな
ひっこめばか
２６２　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０７／１３　２２：２０
またテレビでやってる
うわっ、血がすごいな

ぼくの思い出　小学校六年生

小学校六年生の二学期にサメジマ・キヨシという男の子が東京から転向してきた。
ひょろりと背が高く、何となく気が弱そうで、おどおどした雰囲気のある男の子だった。
二学期の最初の日サメジマ君の自己紹介があった。サメジマ君はよく聞き取れない小さな声で、
「サメジマです。よろしくお願いします」
と、それだけ言った。
クラスのあちらこちらでひそひそと話す声が聞こえた。

なんだ、あいつ。
何かキモいな。

「サメジマ君は東京では何か運動はやっていたの？」
クラスの担任のクマヤマ先生が訊いた。クマヤマ先生は黒縁の眼鏡をかけた三十歳くらいの男の先生だった。
サメジマ君は少し驚いて、目を白黒させていた。
「いえ、特に何もやっていません」
サメジマ君は挙動不審になってそう答えた。クラスのどこからかくすくすと笑う声が聞こえた。
サメジマ君はぼくの後ろの席になった。

「デカッチに似ているな」
「デカッチ二号」
今度はクラス中に聞こえる大きな声がした。そう言ったのはサカタだった。
『デカッチ』というのはニノミヤやサカタがぼくにつけたあだ名

だった。
ぼくの学校は五年生の時にもクラス替えがあり、ぼくはニノミヤとは同じクラスにはならなかったけど、サカタとは同じクラスになった。このクラスではサカタがリーダー的な存在でクラスを仕切っていて、誰もサカタには逆らえなかった。
ぼくは相変わらずクラス中から無視されていた。

サメジマ君は案の定中々クラスに溶け込めなかった。人見知りする性格らしくてあまり口数が多くない。
ぼくのように完全に無視されるということはなかったけど、休み時間はひとりでいることが多かった。

ぼくの通っていた小学校では、給食が終わると一時間くらいの昼休みがある。クラスの男子は運動場に出て、サッカーをやったりして遊んでいた。教室には女子が残っていてぼくがひとり教室の机で座っていると、ぼくの方を見ながらひそひそと話をしたり、くすくすと笑われたり、時には物を投げつけられたりした。
それで昼休みには、ぼくはひとりで図書室に行っていた。図書室であればクラスのみんなと離れることができた。図書館ではひとりでいても、何となくういた雰囲気ではなく自然に見えた。

あれは九月の終わり頃だったと思う。
給食が終わり、ぼくはいつものように図書室に向かった。図書室はぼくのクラスがあった北校舎ではなく、もうひとつの南校舎という建物の二階あった。
ぼくのクラスは北校舎の三階で、ぼくはてくてくと階段を降りて、渡り廊下を通り南校舎に向かう。ちょうど渡り廊下を歩いている時、後ろから軽く肩を叩かれた。
ぼくがびっくりして振り向くと、そこにサメジマ君がおどおどした顔をして立っていた。

「と、図書室、行くの？」
サメジマ君は顔に汗をかきながら小さな声でそう言った。
ぼくは学校で先生以外の誰かに声をかけられるなんてめったになかった。だからぼくも少し驚いておどおどした態度になってしまった。
「う、うん」
「ぼくも一緒に行っていい？」
サメジマ君は目をパチパチさせながら言った。
ぼくは聞き間違えかと思った。誰かがぼくと一緒に何かをしようなんていうことは、小学校入学以来初めて聞いた言葉だった。
「ダメかな？」
ぼくが黙ってるとサメジマ君が言った。
ぼくは慌てて言った。
「いいよ、いいよ、一緒に行こう」
サメジマ君はまだクラスのことがよく分っていなくて、ぼくがみんなに無視されていることを知らないのかもしれない。
ニノミヤやサカタもサメジマ君にはまだぼくの学校でのしきたり、『デカッチをシカト』ということを言っていないのだろう。
だからサメジマ君は何も知らなくてぼくに声をかけたのだ。
しかしそれでもぼくはうれしかった。ニノミヤやサカタがいなかったら、ぼくも普通の学校生活が送れるのだと思った。
ぼくはサメジマ君と一緒に渡り廊下を歩いて図書室に向かった。
図書室はいつもあまり人がいなくて、ぼくにとってとても過ごしやすい場所だった。ぼくのクラスで図書室に行く人はいなかった。たまに学級委員のウエシマさんを見ることがあったが、一カ月に一度くらいだった。
図書室は普通の教室で三つ分くらいのスペースがあって、本棚と読書用の机があった。本は何冊くらいあるのだろうか？ぼくがよく行く駅前の本屋よりは少し多い。その程度だ。読書をするスペースは教室一部屋くらいで、二十人ほどが座れる机と椅子があった。

その日の昼休みも図書室にはほとんど人がいなくて、カウンターに座っている図書当番の生徒の他には二、三人が座って本を読んでいた。
ぼくはサメジマ君と一緒に図書室の前まで行って、引き戸を開けて中に入った。
ぼくは図書室には行くのだけど、本を借りたことがなかった。ただ時間をつぶすだけだった。だからいつも本棚から適当な本を取ってきて読書スペースで眺めるだけだ。本当は読書なんかあまり好きではなかった。
今日はサメジマ君がいるので、まずサメジマ君に訊いてみた。
「サメジマ君はどんな本が好きなの？」
サメジマ君は少し驚いたような顔をして、
「えっ」
と言って苦笑いをした。
そんな質問をされるのをまったく予想していなかったようだった。
「えーと、そう、動物の本が好きなんだ」
サメジマ君はしどろもどろにそう言った。
ぼくはその答えを聞いて、サメジマ君はあまり本が好きでないのだと思った。おそらくまだクラスのみんなと打ち解けていなくて、休み時間もひとりぼっちで、同じようにいつもひとりぼっちのぼくに近づきたかったのだろうとぼくは推測した。
「じゃあ、本を選んで一緒に座って読もうか」
ぼくがそう言うとサメジマ君は痙攣したように何度も首を縦に振った。
本棚のあるエリアに二人で行って、それぞれ適当な本を選んで、図書室の隅の方の席に迎え合わせで座った。
サメジマ君は動物図鑑のような本を手にしていた。ぼくは天体観測の本を選んでいた。
二人はしばらく無言で持ってきた本をぱらぱらとめくっていたが、サメジマ君がぼくの方を見て話し出した。

「タケダ君はいつもひとりで図書室に来ているの？」
サメジマ君は小さく、ささやくように、そう訊いてきた。ぼくは少し間を置いてゆっくりと話した。
「うん、そうだよ。本が好きだしこの静かな図書室が好きなんだ」
「みんなとは、遊ばないの？」
ぼくは一瞬黙ってしまった。本当はみんなと遊びたいのだけど、ぼくと遊んでくれる人はいないから、しかたなくひとりで図書室に来ている。
「うん、みんなと遊ぶより、図書室の方がいいんだ」
ぼくはサメジマ君に嘘をついてしまった。サメジマ君はどこか中空を見るような目をしていた。そしてぼそぼそと小さな声で話す。
「ぼくは前の学校で、友達がいなかったんだ。いつもひとりだった。今度の学校でもダメみたい」
サメジマ君は下を向いていた。そんな悲しそうなサメジマ君の姿はまるで自分を見ているようだった。
「ぼくも実はみんなとうまくいっていないんだ。だからいつも昼休みはひとりで図書室にいるんだ」
ぼくがそう言うと、サメジマ君は顔を上げてぼくの顔を凝視した。

似たもの同士。
いじめられっこ――。

そんな言葉がぼくの心の中に浮かんだ。サメジマ君はぼくのようにクラスのみんなから無視されていたのか？
サメジマ君がぼくの顔をまじまじと見ながら、意を決したように重い口調で言った。
「タケダ君、ぼくと友達になってくれないか？」
ぼくはしばらく口を開けたまま、ぽかんとしてしまった。
ぼくに友達なんて一生できないと思っていた。一生いじめられて、ひとりで生きていくのだと思っていた。だからサメジマ君の言葉は

とても温かく、まるで神か仏の言葉のような気がした。
サメジマ君はぼくの方を見ていた。ぼくの反応を待っていた。
ぼくははっと我に帰って、サメジマ君に言った。
「いいよ、友達になろう。今日からぼく達は友達だ」
サメジマ君の顔が一気に綻んだ。目に涙が溜まっているようだった。それはぼくも同じで手で目頭を覆った。

その日からぼくとサメジマ君は昼休みには一緒に図書室に行って、下校の時も一緒に帰るようになった。
ぼくの学校生活は以前より、ずっとずっと明るくなった。学校で誰かと話をすることができるというのがとても幸せに感じた。

しかし――。
しかし、その幸せも長くは続かなかった。
ニノミヤ、サカタ、その取り巻きがぼくらのことに感づいて――。
ぼくにとっても、サメジマ君にとっても、とんでもないことが起こった。

その年はいつまでも暑く、九月の終わりになっても三十℃を超える日が何日かあった。そんな残暑が厳しい中、運動会の練習をよくやった。十月の始めに運動会が開かれるためだ。
ぼくにとって小学校最後の運動会だったが、何をやったのかほとんど覚えていない。
創作ダンスみたいなものを学年みんなで踊ったような気がする。その踊りの練習を毎日のようにやったのだと思う。
暑くて埃っぽい運動場――。
覇気のない九月の太陽はぼくたちの単調なダンスをあざ笑っているかのようだった。

その日は放課後もその創作ダンスの練習があった。できの悪い生

徒が先生に呼び出されて、放課後体育館で特訓を受けたのだった。
体育館なら太陽の日差しを浴びないから少しは涼しいかと思ったが、体育館の中には淀んだ生温い空気が充満していて、運動場で練習するのと同じようにだらだらと汗が出た。体育館には冷房装置なんてついていない。
放課後の特訓には十人くらいのできの悪い生徒が参加していて、その中にサメジマ君もいた。サメジマ君は見た目のとおり運動神経もダメみたいだった。
担任のクマヤマ先生はどちらかと言うと穏やかな性格で、あからさまに怒ることはなかった。しかし遠まわしにぼくたちの運動神経の鈍さをけなしているような感じがした。先生のダンスを指導する態度からそれが感じられて、ぼくはますますやる気がなくなった。
ダンスの練習がようやく終わって、ぼくはサメジマ君と一緒に校門を出た。ぼくたちが一緒に帰るようになってから二週間くらいたっていた。

「まったくさあ、あんなダンスなんて、やってられないよなあ」
ぼくは横を歩いているサメジマ君に向かって愚痴を言った。サメジマ君もぼくに同調して愚痴を言うのだと思ったが、少し頷いただけで何も言わなかった。
そういえばその日のサメジマ君のぼくに対する態度はなんだかそっけなかった。
ぼくはかまわずにサメジマ君に話しかけた。
「あのダンスって、先生達が考えたらしいね。いつもは器械体操みたいのをやるんだけど、今年は二組のマツノ先生がはりきって、父兄に受けようと思って考えたらしいよ」
ぼくはどこからか聞いた噂話をサメジマ君に言ったが、サメジマ君はぎこちなく笑うばかりで話に乗ってこなかった。
ぼくがなんだかおかしいなと思っていると、サメジマ君が突然立ち止まって言った。

「タケダ君、今日はちょっとこっちの道から帰ろう」
サメジマ君は細い路地を指差していた。その路地は二本木公園へ向かう細い道だった。
サメジマ君の家はぼくの家より少し学校から離れていたが、途中までほぼ同じ道を通って帰ることができた。歩いて十五分くらい二人は同じ道を通った。
今サメジマ君が指差した細い路地を通ると少し遠まわりになる。その時ぼくは何故サメジマ君がそんなことを言うのか、分らなかった。
「いいけど――何故そっちの道から帰るの？」
ぼくは不思議に思ってサメジマ君に訊いたのだけど、サメジマ君は何か口の中でもごもご言っていて、はっきりとその問いに答えなかった。
やがてサメジマ君が歩き出したので、ぼくもしかたなくその細い路地に入っていった。
路地を抜けると二本木公園が見えた。小さな公園で遊具がない。それでぼくの学校の生徒はほとんどその公園には行かなかった。
サメジマ君に続いて公園に入ると公園の隅の方に人影が見えた。赤いTシャツを着たサカタの姿がまず目に入った。
あと、二、三人。
そして一番後ろにニノミヤの姿も見えた。ニノミヤは白い開襟シャツを着ていた。
ぼくが驚いて立ち止まると、サメジマ君がいきなりぼくの手を掴んでサカタやニノミヤの方に向けて歩き出した。その力はとても強く、ぼくは引きずられるようにしてニノミヤ達の前まで運ばれてしまった。
「ちょ、ちょっと、待ってよ。サメジマ君」
ぼくはそう言ったけど、サメジマ君は何も言わずぼくの方を見ることもなかった。

ニノミヤの悪魔のような顔が見えた。
ぼくの心臓がきりきりと痛んだ。

ニノミヤは公園の隅のベンチに座っていた。そのまわりにサカタとトウドウがいた。公園のベンチは木の陰になっていて、外からは見えなかった。
ぼくがサメジマ君に引きずられてベンチの近くまで来ると、赤いシャツを着たサカタが走って近づいてきて、いきなりぼくの背後にまわって背中を押した。ぼくはよろよろとベンチの上に倒れてしまった。
サカタはすかさずぼくの右手を取って、背中の上で固めて、その上に膝を乗せた。
ベンチに胸が押し付けられて苦しかったので、ぼくはバタバタとして何とか逃れようとしたけど、サカタが体重をかけていて、ほとんど身動きが取れなかった。
「逃げるな」
サカタが低くすごんだ。
「ちょっと、やめてよ」
ぼくは息を切らせながら、やっとそう言った。うつぶせになっているのでニノミヤの顔は見えなかった。
ぼくはその時白いTシャツを着ていたのだと思う。
トウドウかニノミヤか分らないけど、ぼくのシャツを脱がせた。いや、サメジマ君だったのかもしれない。ぼくは彼らがいったい何をしようとしているのかさっぱり分らなかった。
ぼくは必死に抵抗したけど、サカタはぼくの左腕も固めて、さらに全体重を乗せてぼくをベンチに押さえつけ、ぼくの抵抗はまったく通じなかった。ぼくはあっという間に上半身を裸にされてしまった。
「やめてよ」
力なくぼくは言ったけどサカタは力をゆるめない。

「おい、これでいいんだよな」
ニノミヤの声がした。その声は氷のように冷たい感じがした。
「おお、それ、それ、それ、真ん中のやつ」
サカタが笑らいながら言った。
「それ、ちょっと太くない？」
トウドウらしき声が言った。
「インクは？」
「赤がいいんじゃない？」
「青しかなかった」
ニノミヤ達の会話がよく分らなかった。ぼくに何をしようとしているのか？その時ぼくには想像もつかなかった。
「それでいいよ、サメジマやれ」
またニノミヤの冷たい声。
「やれって言ってんだよ」
サカタの低くドスのきいた声。
やがてサメジマ君の足音がぼくの方に近づいてくる。ぼくはその足音を今でも覚えている。公園の湿った土とサメジマ君の運動靴の裏が擦れて微かな摩擦音が聞こえた。
足音が止まった。サメジマ君はぼくのいるベンチの近くまでやってきた。

ちくりと、右の背中、肩甲骨の上のあたりに痛みが走った。
「痛い」
ぼくはびくりと体を震わせて叫んだ。
またちくりと痛みがして――。
ああ――針で刺している？
ぼくは刺されている？
「ちょっと、痛い」
ぼくは必死になって体を動かして、何とかサカタから抜け出そうとした。

「動くなよ」
サカタは今度は大きな声で言った。そしてさっきより強い力で押さえつけた。ぼくが足をバタバタさせると、今度はトウドウが足を押さえた。
「ちゃんと描けよ、サメジマ」
描く？
描くって？
サメジマ君が？
またちくりとした痛みがして、今度はその痛みが下に走る。ああ、針が皮膚を引き裂いている。そう感じた。
少しするとハンカチのような布で刺した部分をふき取った。
「ごめんよ」
サメジマ君の小さな声がした。泣きそうなそして苦しそうな小さな声だった。
「おまえはしゃべるなよ」
サカタがサメジマ君に向かって言ったようだった。
「ごめんよ」
「ごめんよ」
サメジマ君は小さな声でそう言って、鼻をすすりながらぼくの背中に針を刺していた。
「おお、いいじゃん！」
ニノミヤの明るい声がした。
「ははっ、いいねえ」
サカタの声もした。
なんとぼくはこの時になっても、何をされているのか分っていなかった。
「よおし、終わりだ。デカッチ、服着ろよ」
サカタが大きな声でそう言ってぼくを解放した。
ぼくが立ち上がるとサメジマ君の泣き顔があった。サメジマ君はぼろぼろと涙を流していた。

ぼくはベンチに置いてあった服を着て、すぐにその場から立ち去った。全速力で公園から走り去った。涙が次々と溢れてきた。ニノミヤの悪魔のような顔やサカタの低い声、そして、サメジマ君の泣き顔が頭の中に浮かんだ。

サメジマ君はニノミヤ達に脅されて、しかたなくぼくの背中に針を刺した。しかたなくやったんだ。

ぼくはサメジマ君がかわいそうになった。そして何もできない自分自身も嫌になった。

その日、帰ってから、ぼくは針で刺された背中を鏡に映してみてみた。

ぼくの背中にあのマークが描かれていた。あの卑猥なマーク。発電所のマークに似た形。小学校六年生のぼくにもあのマークがいやらしいものだと分った。

そして何度も何度も手で擦っても、そのマークは消えなかった。お風呂に入って、タオルで擦っても消えなかった。

ある日の午後の会話　その3

「先生、ニノミヤは勉強もできるし、スポーツも得意だし、先生方からも好かれていますよね」
　トモヒコはサトウの顔を見ながら言った。サトウは軽く頷いた。
「でも本当のニノミヤは違うよ。先生、あいつの本性を知っていますか？」
　トモヒコがそう訊くと、サトウはじっとトモヒコの目を見つめたまま黙っていた。
「先生、これを見てください」
　トモヒコは立ち上がってワイシャツを脱ぎ、下に着ていたTシャツをまくって右肩を出した。トモヒコの座っていた椅子ががたりと音をたてて倒れた。
　そしてトモヒコは半分はだけた右の背中をサトウの方に向けた。
「ああっ――」
　サトウはトモヒコの背中を見ながら力なく呻いた。
「これは？これは何だ？」
「笑っちゃうでしょ、先生。これはニノミヤが描いた、いや、ニノミヤが描かせたんだ。さっき先生はニノミヤに何をされたかって訊きましたよね。そうこれもニノミヤにされたことのひとつです。酷いですよね」
「タケダ、おまえ、こんなことをされて――。誰かに言ったのか？親や先生に言ったのか？」
　サトウがトモヒコの肩を掴んで強い口調で言った。
「言いましたよ、もちろん」
「それで？」
「…」
「どうなったんだ」
「どうなったも、こうなったも、結局、これはニノミヤに命令され

て描いたやつのせいになりました。ニノミヤはまったく知らないと言って、そいつのせいになりました。
ぼくはいろいろ言ったけど、そいつも自分がやったんだと言った。
それでニノミヤは何も罰を受けなかった。これを描いたやつもニノミヤが怖くて本当のことを言ってくれなかった。
そいつは結局転校してしまって、消息が不明なんだ。噂では自殺したって――、聞いた。
いつもそうなんだ。あいつは頭が良くて、ずるくて、あんなに酷いことをしているのに、いつも罰を受けない」
サトウはじっと黙ったままトモヒコの話を聞いていた。そして、もう一度トモヒコの背中に描かれた青いマークを見て、目を閉じた。トモヒコの方に置いたサトウの手が静かに震えていた。

陰鬱な展開

トモヒコはトウドウ・ミノルとバンドウ・キョウコの腹から赤い液体が流れているのを見て、パピヨンの駐車場から走り去った。トモヒコの後ろでナカタニが叫んでいたが、その声を振り払って自転車に乗って家に戻った。

自転車でパピヨンを出る時、何人かの人が駐車場の方に向かって走っていった。

誰か刺されたらしいぞ――。

おーい、救急車だ。

静かだった平日のパピヨンにざわざわとした嫌な空気がやってきた。そのざわめいた空気を避けながら、トモヒコはできるだけ早くパピヨンから遠ざかろうと、必死になって自転車を漕いだ。

家につくと自転車を玄関の横に乱暴にとめて、トモヒコは自分の部屋に向かった。部屋に入ってカーテンを閉め、ベッドにうずくまった。

アカい――。

アカい――。

真夏の日差しの中に鮮明な赤色があった。それはトウドウとキョウコの血の色だった。トモヒコの頭の中が血の色に染まっていく。

いったいどういうことだろう？

何故トウドウとキョウコが血を流すのか？

トモヒコはトウドウとキョウコに蹴りをくらって、下を向いていた。次の瞬間二人は血を流していた。

分らない。トモヒコにはさっぱり分らない。
トモヒコの心臓の鼓動が速くなっていく。心臓は破裂するのかと思うくらい激しく動いて、その振動が頭の方にも伝わって、ずきずきとこめかみが痛んだ。
トモヒコは体を丸めて、ベッドの上でうずくまっていた。
夢であってくれ、とトモヒコはそう思った。

――トモヒコの家に愛知県警の刑事と思われる人が来たのは、夕方、午後六時を少し過ぎた頃だった。

夕方、トモヒコの部屋のドアが軽くノックされた。
「トモヒコ、いるの？」
それは何日ぶりかに聞く母親の声だった。母の声は無気力でどこか投げやりな感じだった。
「トモヒコ、いるんでしょ、ドアを開けて――」
トモヒコはそう言われても部屋のドアを開けなかった。母親と話すことなど何もない。
「ちょっと話を聞きたいって、警察の方が――」

警察！
その言葉でトモヒコはベッドから飛び起きた。パピヨンの事件は夢ではなかった。
ドアを開けると母親の緊張した顔があった。
「トモヒコ、あんた、何したの？」
トモヒコは何も言わず母親の横を通り過ぎ、階段を下りていった。
玄関には二人の男がいた。
一人は中年で頭の禿げ上がった小太りの男。もう一人はまだ三十歳前に見える黒ぶちの四角い眼鏡をかけた若い男。
「君がタケダ・トモヒコ君？」

眼鏡をかけた若い男の鋭い視線がトモヒコを捉えた。
トモヒコは何も言わずに小さくうなづいた。
「君は今日、パピヨンに行ったよね。そこで起こったことを少し聞かせてもらえないか？」
若い男がはきはきとした口調で言った。鋭い視線はずっとトモヒコを捉えていた。
「ここでは何だから、ちょっと署の方に来てくれませんか？ほんの少しの時間です。お母さん、いいですよね」
いつの間にか母親がトモヒコの後ろに立っていた。
「ええ、でもいったい――」
母親は言葉を詰まらせて、心配そうな顔をトモヒコの方に向けていた。
「今日、パピヨンで――ああパピヨンはご存知ですよね。パチンコやボーリングのある――、あのパピヨンで傷害事件がありました。トモヒコ君と同じ中学の生徒が二人、腹を刺されて重傷を負いました。犯人はまだ捕まっていません。トモヒコ君もその場に居合わせたようです。それでちょっと捜査にご協力していただこうというわけです」
禿げの小太りの男が言った。顔に似合わず高い声だった。
「トモヒコ、あんた、パピヨンなんかに行ったの？まさか、あんた――」
母親が叫ぶように言った。まるでトモヒコが犯人であるかのように疑い深い目でトモヒコを睨んでいた。
「まあ、ちょっとお話しするだけですので――」
小太りの男がトモヒコの腕を掴んだ。優しそうな顔をしていたが、その力は思ったより強く、トモヒコは玄関の床に下ろされる形になった。それでトモヒコはしかたなく靴を履いた。
「ではちょっとお子さんをお借りします。お話が終わったらご連絡しますので、迎えに来てください。Ａ警察署です」
小太りの男はそう言うと、トモヒコの腕を掴んで歩き出した。ト

モヒコは男に引っ張られるような形で玄関から連れ出された。表には白いセダンが止まっていた。
トモヒコはもしかしたらパトカーに乗せられるのかと思っていたが、外に止まっていた車はありふれた白いセダンだった。

トモヒコは小太りの男に左腕をがっちりと掴まれたまま、白いセダンの後部座席に乗せられた。小太りの男は体こそ小さかったが、握力はとてつもなく強く、トモヒコは上腕に痣が残るのではないかと思うくらいだった。
まるでトモヒコが逃げ出さないように——逃走しないようにしっかりと押さえている、そんな感じだった。無論、トモヒコは逃げる気などまったくなかった。

A警察署はトモヒコの家から、車で二十分くらい走った、駅の大通りに面したところにあった。
眼鏡の若い男は無言でただ機械的に運転していた。その二十分の間、会話はなかった。トモヒコは小太りの男に掴まれた上腕が少し痛くて、右手でさすっていた。
警察署の門から中に入り、建物の裏側にある暗い駐車場に白いセダンは止まった。車から降りると、小太りの男がまたトモヒコの左腕を掴み、トモヒコを暗い建物の裏口まで連れて行った。
トモヒコは腕が痛くなったので、上腕に少し力を入れて男の束縛から逃れようとしたが、小太りの男が急に立ち止まりトモヒコを睨んだ。その顔は鬼のようで、トモヒコは足がすくんでしまい、その後小太りの男に逆らうことができなくなってしまった。
男のなすがままになって建物に入り、二階にある小さな部屋まで連れて行かれた。

その部屋は小さな机とパイプ椅子があるだけで、殺風景な狭い部屋だった。どこからか生ごみが腐ったようなすえた臭いがして、ト

モヒコは部屋に入ったとたん、気持ち悪くなってしまった。蛍光灯の照明も暗くて、部屋の中は救いようがなく、よどんでいた。
トモヒコがパイプ椅子に座っていると、先ほどの若い黒ぶちの眼鏡をかけた男が部屋の中に入ってきて、めんどくさそうにトモヒコの前に座った。
男はコモリと名乗った。刑事なのか？警部なのか忘れたが、少年の担当だと言った。

「タケダ・トモヒコ君。カンベ中学校三年。今日、午後一時四十五分くらいに君はパピヨンの駐車場にいたね」
コモリは黒ぶちの眼鏡を右手で触りながら、ゆっくりと話し始めた。
「どうしたんだ？話したくないのか？」
トモヒコが黙っていると、コモリは細い眉を少しつり上げて言った。
「これは、取り調べなんかじゃないから、別に話したくなければ話さなくてもいいけど、何か答えてくれよ。知らないとか、話したくないとか」
コモリはいらいらしているようだった。気の短い男なのだろうか？
「今日、パピヨンに行ったよね？」
コモリがまた訊く。
「はい、行きました」
トモヒコは小さな声で答えた。トモヒコがパピヨンにいたことは、隠しようがない。トウドウも、キョウコも、ナカタニも知っていることだ。
「何故、パピヨンに行ったの？」
コモリの声は優しい。しかし顔を見ると、冷たい目がトモヒコを観測していた。トモヒコは黙っていた。
「何故、パピヨンに行ったの？」
コモリがまた訊く。

どうしよう――。自分は疑われているのか？
トウドウやキョウコ、ナカタニは警察に何を話しているのだろうか？
メールのことを話そうか？
いろんなことが頭を駆け巡った。あのメールのことを話したらイワタ・ミドリのことも話すことになってしまうかもしれない。しかし、トモヒコがパピヨンに行く適当な理由がないのだ。このコモリという男に適当な言い訳は通用しないように思えた。
コモリは何も言わずにトモヒコの顔をじっと見ていた。やはり表情は冷たい。
「ある人に呼び出されました」
トモヒコはコモリの重圧に耐えられなくなり、口を開いた。
「ある人っていうのは？」
「友達です」
「名前を教えてくれない？」
「すみません」
「はあ？」
「すみません。名前を知りません」
「知らない？それどういうことなの？」
「ネットで知り合った友達なので本名は知りません」
「ネットで知り合った？どこのネット？」
「すみません。忘れました」
「で、何故その友達が君をパピヨンに呼び出すの？」
「何故って――それは分りませんが、今日パピヨンで会おうってことになって、一時に待ち合わせでした。それでパピヨンまで行きました」
コモリは訝しげな顔をしていた。トモヒコの話に納得していないようだ。
「トウドウ君とバンドウさんは知っているよね」
「はい」

「彼らとあとナカタニ君、それにナイトウ君とパピヨンで会ったよね」
「はい。偶然会いました」
「偶然？トウドウ君は君に呼び出されてパピヨンに行ったと言っているよ」
「それは違います。ぼくは彼らを呼び出していません」
「でも、君からメールが来たって――」
「ぼくはメールを出していません。トウドウ君のアドレスも知りません」
コモリはふーんと鼻を鳴らした。そして次の言葉を発した。
「彼らが刺されたのを見た？」

刺された？
刺されたのを見たのだろうか？
トモヒコはあの時の光景を頭に思い浮かべる。

トモヒコが見たのは、赤い血だ。
トモヒコが見た時には、キョウコは血を流していた。
トモヒコが見た時には、トウドウは血を流していた。

「見ていません」
トモヒコはそう答えた。コモリの眉がまた吊りあがった。
「見ていませんって、おかしいな。あの時君は彼らの一番近くにいたと、ナカタニ君が言っていた。君が何も見ていないというのはおかしい」
「ぼくは――ぼくはあの時つまづいてしまって、転んでしまって、うつぶせに地面に倒れていました。そして起き上がったら、二人が血を流していて――」
コモリの表情がますます曇る。そしてトモヒコはその冷たく鋭い

視線が突き刺さるのを感じた。
「タケダ君、本当のことを言ってくれ。誰か見ただろう？」
えっと思った。誰かを見た？僕らの他にあの場所に誰書いたのか？
「ぼくはトウドウ君とバンドウさんとナカタニ君と、あとナイトウ君しか見ていません。その他にあの場所に誰かいたのですか？」
コモリはじっと目を閉じていた。そしてしばらくしてから言った。
「そうか、君は見ていないのか」
トウドウやキョウコ、ナカタニ、ナイトウは何かを見たのだろうか？

その日、トモヒコが警察から開放されたのは深夜近くなってからだった。
A警察署にトモヒコの父親と母親が迎えに来た。両親は何度も何度も警察の人に頭を下げているようだった。父親の運転する車で家まで帰った。車内での会話はなかった。
家について、両親はリビングに向かった。トモヒコが二階の自分の部屋に行こうとすると、父親が静かに言った。
「トモヒコ、ちょっと来い」
父親の声を聞くのは本当に久しぶりだった。トモヒコは足を止めて父親の顔を見た。
「なんか用？」
ぶっきらぼうに言うと、父親がトモヒコの腕を取って、トモヒコを無理やりリビングに連れていった。
「そこに座れ」
父親はそう言うとトモヒコの前の席に座った。母親もその横に座った。トモヒコもしかたなく腰を下ろした。
「何故、パピヨンなんかに行ったんだ？」
トモヒコが座ると父親が静かに言った。
「何故って、友達に会うためだよ」
「本当なんだな？」

「どういうこと？」
「警察に嘘はついていないんだな」
「…」
トモヒコは警察で言ったことを思い出してみた。
ネットで知り合った友達に呼び出されてパピヨンに行った――。
これは嘘ではない。エンジェルとはネットで知り合ったことは確かだ。メールのやり取りをしている。友達――とも言えなくはない。
さらにトモヒコはトウドウ達をパピヨンに呼び出してもいない。これも事実だ。
つまづいて転んでしまったこと――これはトウドウやキョウコから蹴りを入れられたからだが、転んだことは嘘ではない。
そしてあの時、トウドウやキョウコ達以外の誰かを見ていないことも嘘ではない。
ただトモヒコが彼らからいじめられていたこと――これについては言わなかった。そのことについては得に訊かれもしなかったのだが。
だからトモヒコは何も嘘はついていないのだ。あらためてそのことを思った。
「ぼくは嘘は言っていない。何も嘘は言っていない」
トモヒコはそう言って、立ち上がり、自分の部屋に向かい、階段を駆け上がった。
父親のトモヒコを呼び止める声が聞こえたが、無視して、自分の部屋に入って、ドアに鍵をしめた。
おそらく両親は、トモヒコが今回の事件の犯人――かそれに近い重要な参考人か何かと思っているのだろう。
自分の子供も信じていない両親にトモヒコはますます幻滅した。もう誰も信じられない。
A警察のコモリという男は結構細かいことをいろいろ訊いてきた。
トモヒコはそれに対して思いつきで回答した。今考えると不自然

な回答もあったような気がする。
例えばトモヒコをパピヨンに呼び出したネットで知り合った友達のメール。それを見せて欲しいと言われたが、削除してしまったと答えた。
さすがに携帯を見せて欲しいとまでは言われなかったが、トモヒコは携帯で受信したメールはすべて削除していたから、携帯を見せてもよかった。
また、トウドウに送られたトモヒコからのメールのアドレスを見せられたが、それはフリーメールという誰でも取得できる使い捨てのアドレスだった。メールの内容にはトモヒコの名前が書かれていたが、トモヒコにはまったく覚えがないものだった。
そのことを言うと、コモリはちょっと訝しげな表情をしていたが、特に反論はしてこなかった。
結局、トモヒコの言ったことはほとんど受け入れられて、開放されたのだった。もともと警察ではトモヒコが今回の事件の犯人であるとか、そういう疑いをもってトモヒコから話を聞いたのではないようだ。
誰か――。
トウドウ達やトモヒコの他にも誰かがいたのだ。警察ではそれが誰なのか教えてくれなかったが、そいつがトウドウやキョウコを刺した――のだと、トモヒコは思った。
警察は目撃証言が欲しくてトモヒコから話を聞いたのだ。決してトモヒコが犯人であるという前提ではなかった。
トモヒコはベッドに横になり、そんなことを考えていた。

――それで、トウドウとキョウコの容態はどうなのでしょう？
トモヒコは帰り際、コモリに訊いてみた。
トウドウ、キョウコは出血が多かったと思ったが、傷としてはそんなに深くなく、内臓の損傷はほとんどないようで、全治一ヶ月程度ということだった。

それにしてもトモヒコにメールを送ってきた『エンジェル』。いったい何者だろうか？
イワタ・ミドリのこと。
そして今回のトウドウとキョウコのこと。
被害を受けているのはトモヒコをいじめつづけ、苦痛をあたえてきたトモヒコにとって嫌な存在の生徒ばかりだ。そのことが気になった。

リベンジ　その3

あのパピヨンでの事件から一週間がたった。トモヒコはその間、もう一度警察に呼び出されて、コモリという少年課の刑事からいろいろと質問を受けた。しかしその質問は前回と同じような内容だった。

コモリという刑事は中々事件のことを話してくれなかった。

トモヒコが知ったこと――。

トウドウとキョウコは鋭利な刃物で横腹を切り裂かれていた。それは本格的な刀、小刀のようなものらしい。凶器は見つかっていない。

そしてあの時、あの場所にいたトモヒコ以外の生徒が見た『誰か』とは――。

それはなんと小学生くらいの小さな子供のような人だったという。その小さな人が近づいてきて、トウドウとキョウコの脇を通り過ぎた瞬間二人とも腹から血を流した――ということだった。

おそらくトウドウやキョウコ、ナカタニらの証言なのだろう。しかしトモヒコはそんな小さな人は見ていなかった。

サトウ先生からは事件の翌日電話があった。警察から聞いたのか、トモヒコがパピヨンに行ったことは知っていた。サトウ先生はまず第一にトモヒコの体のことを心配してくれた。トモヒコ自身に怪我がなかったか、トウドウやキョウコに何かされなかったか、そんなことを訊かれた。

そしてその時の状況を先生に話してくれ――とそう言った。そしてトモヒコの家までやってきた。

トモヒコはサトウ先生にも警察で話したことを話した。ただ警察では話さなかったこと――。トウドウやキョウコがトモヒコに蹴りを入れたことも、サトウ先生には話した。

犯人はまだ分っていないらしい。小学生のような小さな人物についても、目撃証言が得られていないようだった。サトウ先生はそんな風に警察の捜査状況もトモヒコに話してくれたのだった。

トモヒコは相変わらず自宅に引きこもっていた。学校ではあの日トモヒコがパピヨンに行ったことは噂になっているだろう。あるいはトモヒコが犯人だということになっているかもしれない。もう学校へは行けないと、トモヒコは思った。授業に出なくて説教部屋でサトウ先生と話すのも、なんだかまったく気が進まない。とにかくどこへも行きたくなくて、自分の部屋でネットばかりしていた。

あの事件に関しては、A市通り魔事件として結構大きく新聞に載ったし、ネットの掲示板サイトでも話題になっていた。トモヒコはそんなネットの掲示板を片っ端からチェックしていた。ほとんどのサイトでは「小学生のような少年が、短刀で切りつけた」という話題が多かった。そしてその少年は、特殊教育を受けた殺し屋で、誰かの依頼で今回の事件を起こしたと、そんな話題がネット上を駆け巡っていた。

サトウ先生がトモヒコの家を訪ねてきた日のことだった。トモヒコが深夜パソコンで掲示板サイトを見ていると、突然携帯が振動した。トモヒコは通常携帯をマナーモードにしている。

携帯をあけて着信している電話番号を見ると、見たこともない番号だった。トモヒコは一瞬迷ったが、結局電話に出た。

「おう、俺だ」

乱暴な声が聞こえた。どこかで聞いたことのある低くドスの利いた声だった。

「誰ですか？」

トモヒコがそう言うと、電話の向こうで、また低い声が叫ぶように言う。

「俺だよ、サカタだ」

トモヒコはどきりとしてしまった。サカタは何故トモヒコの携帯番号を知っているのだろうか。
「トウドウとキョウコの件、おまえ、何か隠しているだろう。おまえが殺し屋雇ったのか？」
あまりにも突拍子のない話にトモヒコは戸惑ってしまい、しばらく次の言葉がでなかった。
「明日――」
サカタはいったん言葉を切って、その後まくし立てるように一方的に話し出した。
「明日、学校へ来いよ。そうだな、昼過ぎでいいや。説教部屋まで来い。説教部屋で待ってる」
有無も言わせない力強い口調だった。トモヒコが呆然としていると、サカタはまた言った。
「言っとくけど、逃げるなよ。絶対来いよ。来なかったら――来なかったらどうなるか？　おまえの人生は終わる。それほど大事なことだ」
トモヒコは受話器の向こう側にあるだろうサカタの顔を思い浮かべた。行かなかったらどうなるのだろう。人生が終わるって、どういうことだろう。
「俺は分っているんだぜ、何もかも。とにかく明日学校へ来い。説教部屋へ来い。一時だ。いいな？」
そう言って電話は一歩的に切れた。
胃がきりきりと痛んだ。いったいサカタはトモヒコの何を知っているのだろう。行かなかったらどういうことになるのだろう。
おそらくサカタだけの考えではなく、裏にはニノミヤがいるのだろう。トモヒコはサカタに呼び出されたのだけど、サカタに指示を出したのはニノミヤかもしれない。
トモヒコは迷った。汚い部屋の中をぐるぐると歩き回った。無視してしまおう――そう思ったりもしたが、おそらく今回行かなくても、サカタは――あるいはニノミヤかもしれないが、何度も何度も

トモヒコを誘ってくるに違いない。
人生が終わるということはどういうことなのか分らない。まさか殺されるようなことはないとは思ったが、あのサカタならやりかねない。しかし殺されるのも悪くはないと、一瞬、トモヒコは思ってしまった。
以前、自殺しようと思って、電車に飛び込もうとした時、変な男に助けられた。本来その時自分の人生は終わっていたのだ。
トモヒコはいろいろと考えたが、どうせ死ぬのなら今回はサカタに会ってみようと思った。どんなことをされるのか？とても心配だった。しかし苦しかったらまた自殺を考えればいいと、楽観的に考えた。
とにかくトモヒコは明日の昼にサカタに会うことにしたのだった。

八月の空は青く、からりとした空気が気持ちよかった。
梅雨は先週ようやく明けて今日から八月になった。トモヒコの学校ではもう夏休みに入っている。
トモヒコは正門の前に立って校内を観察していた。
トモヒコが前回学校に来たのは六月中旬、梅雨の頃だ。あの時イワタ・ミドリの事件があった。
今日は夏休みということもあり、先生も生徒もずっと少ない。だからトモヒコは前回のようにこそこそとする必要はないと思っていた。しかし部活動などで学校に来る生徒も多少はいる。なるべく知っている生徒には会いたくない。それで正門の前から学内を観察していた。
校庭にはほとんど人がいなかった。トモヒコはそれを確認すると、ゆっくりと正門を通って校庭に入った。
左手に見える運動場の方から声が聞こえた。野球部とサッカー部が練習をしているようだ。その他には何も聞こえない。左腕にはめたGショックを見ると、午後0時五十分だった。サカタとの待ち合わせは午後一時。後十分だ。

トモヒコは生徒の下駄箱のある入り口から校舎に入った。自分の下駄箱は分らなかった。見ると来客用と書かれた下駄箱があった。トモヒコはその下駄箱に自分の靴を入れた。

サカタはいったい何を知っているのだろう――。

ニノミヤはいったいトモヒコに何をしたいのだろう？

トモヒコは説教部屋に続く廊下を歩きながら、もう一度考えた。それはイワタ・ミドリのことだろうと想像できた。ミドリが倒れていたあの倉庫でトモヒコを見たのだと、脅してくるかもしれない。しかしそのことに関してもトモヒコはまったく無実なのだ。パピヨンの事件がある前は、ミドリのことで自分が疑われないかとどきどきしていたが、パピヨンの事件があってからはそんなことは小さなことのように感じていた。だから、今日、サカタに会うことについても、実はそんなに緊張していない。

廊下の突き当たりに相談室――説教部屋があった。前回来た時にはニッタ先生に案内してもらった。その時のニッタ先生の形の良いヒップが脳裏に浮かび上がって、トモヒコは苦笑した。

説教部屋の扉は頑丈な鉄製だった。

トモヒコは軽く扉をノックしたが、中から返事はなく、扉は閉ざされたままだった。まだサカタは来ていないのだろうか？

もう一度ノックしたが、やはり返事はない。

トモヒコがドアノブを回すとあっけなく扉は開いた。鍵はかかっていなかった。

少しだけ扉を開いて中を見た。薄暗い部屋の中には細長い机とパイプ椅子。前回来た時と同じ。サカタは部屋の中にはいなかった。

トモヒコは部屋に入った。

ここでサカタが来るのを待つしかないだろう。パイプ椅子に腰掛けると机の上に小さな紙が置かれているのに気づいた。紙を手にとって見る。

『北校舎の屋上』

明朝書体でそう書かれていた。どうやら印刷されたものらしい。裏を見てみたが、何も書かれていなかった。これはサカタが置いたものだろうか？わざわざ印刷するのか？サカタらしくないと思ったが、ニノミヤがやったことなら納得できる。

トモヒコの学校には三階建ての校舎が二つあった。それぞれ北校舎、南校舎と呼ばれていた。南北に平行に建てられていたから、ずっと前からそう呼ばれていた。

説教部屋は南校舎の端にあった。正確に言うと南校舎の一階部分が増築されていて、校舎から少しはみ出ていた。そこに説教部屋があった。

『北校舎の屋上』というメッセージは、トモヒコに北校舎の屋上まで来いということなのだろう。

トモヒコは説教部屋の重い鉄の扉を閉めて、長い廊下を歩いて連絡通路を通り、北校舎まで行った。

北校舎の階段を上り、屋上へ向かう。

校舎は三階建てで、通常の階段は三階までしかなかった。屋上へ出るには屋上用の階段を上らなければならない。屋上用の階段は三階の廊下の途中にあった。

トモヒコの学校では生徒が屋上へ出ることは禁止されていた。屋上用の階段の入り口に『立ち入り禁止』という小さな立て札が置かれていた。しかし立て札が置かれているだけで、入り口自体は封鎖されているわけではなく、階段を上ることができた。

トモヒコは立て札の横を通り、屋上に向かって階段を上った。階段には通常の階段にある踊り場はなく、そのまま直進すると屋上についた。

北校舎の屋上には小さな建物があった。それを何というのだろうか？トモヒコは知らなかった。とにかく屋上には十平方メートルほどの小さな建物があり、階段を上っていくとその建物に出る。その建物に屋上へ出るための扉がある。要は屋上へ出るための扉がある

だけの建物なのだ。
ただ扉があるだけの建物なのだが、わずかなスペースにダンボール箱や書類などがごちゃごちゃと置かれていた。物置としても使っているようだ。
サカタもニノミヤもこの部屋の中にはいない。おそらく外にいるのだ。
屋上へ出る扉は青色の鉄製のものだった。トモヒコはその扉に近づいた。

あれ？
扉が少し開いている。
もしかしたら鍵がかかっているのでは？と思ったが、予想に反して扉が少し開いていた。
トモヒコは扉を開けようとノブを手にとって押したが、扉の外に何かあるらしく、開かなかった。
隙間から見ると、扉の向こう側、屋上にダンボール箱や机が積み重ねてあった。それらの物に扉があたっていて開かない。
がんがんと何度か扉を押してみたが、ダンボール箱や机がバリケードのようになっていて、中々扉は開かなかった。
トモヒコはがんがんと乱暴にノックした。外にはサカタかニノミヤがいるだろうと思った。
「ちょっと、開けてくれよ」
トモヒコはそう言ってみた。しかし外からは何も聞こえなくて、ダンボールが取り除かれるということもなかった。
「おーい」
トモヒコは少し大きな声で扉の外に呼びかけてみたが、誰も答えなかった。

からかわれているのか？
弄ばれているのか？

そう思いもした。
今度は足で扉を何度か蹴った。少しダンボールと机が動いた。
助走をつけて体当たりした。ダンボールがいくつか倒れた。
何度か体当たりを試みていると、ついにバリケードが壊れ、扉が開いた。
外に出ると日差しが眩しくて、トモヒコは一瞬目を閉じた。
ダンボール箱多数。生徒用の学習机が二つ、三つ。椅子もあった。
これらが扉の前にあって、中々開かなかったのだ。
サカタは何故こんなことをするのだろう。
トモヒコは額に流れてきた汗を手でぬぐって、サカタの姿を探した。

アカい――。

トモヒコの視界に赤い閃光が飛び込んできた。
屋上の真ん中あたりに赤い塊があった。
トモヒコはその塊にゆっくりと近づく。

アカい――。

赤い塊は、正座をして頭を垂れた人間――、だった。
首――、首の右側から、どくどくと赤い液体が流れて、ワイシャツが赤く染まっている。
そしてその人間のまわりに血溜まりができていた。屋上の床は緑色に塗られていた。緑色の中で赤い血溜まりは映えていた。
膝ががくがくと音を出して震えた。
心臓もばくばくと音を出して震えた。
トモヒコはゆっくりと中腰になり、その人間の顔を見た。
かっと目が開いていて、眼球の毛細血管が見えた。
顔に傷はなく綺麗だったが、これが人間の肌の色なのかと思うほ

ど青ざめていた。

サカタだった。

その顔はサカタだった。

「サカタ君――」

トモヒコは力なくサカタに声をかけた。しかしサカタは目を開いたまま動かない。すごい血でよく見えないが、首の右あたりに傷がある。そこから赤い血がどくどくと流れ出しているのだ。

そして――息をしていない。

呼吸をしていない。

サカタは死んでいる――。

サカタは死んでいる――。

トモヒコはそう思った。間違いなくサカタは死んでいる。

トモヒコが地面を見ると、白いソックスがサカタの流した血で赤く染まっていた。血溜まりが大きくなって、トモヒコの足を飲み込んでいく。

トモヒコは慌ててサカタから離れた。そうしたら膝の力が抜けて、その場に尻餅をついてしまった。

しばらくそのまま、呆けたように、赤い塊――それはサカタだったのだが――を見ていた。

アカい――。

どれくらい時間がたったのだろうか。トモヒコにはすごく長い時間のように感じたが、実際はほんの数分だったかもしれない。

トモヒコの意識は朦朧として、今にも気を失いそうだった。

ふとトモヒコの後ろの方で音がした。屋上の建物から誰かが出てきた。
トモヒコが後ろを見ると大人の男が立っていた。男はサカタとトモヒコを交互に見ながら、口をぱくぱくとさせていた。
「た、た、た、大変だ！」
男はサカタに近づいてサカタの顔を見たが、もうだめだと思ったらしく、そのまま何かを叫びながらドアの方へ向かっていった。
トモヒコはその様子をただ見ていた。
体が動かなかった。足が震えて立つことができなかった。
その後、学校中の先生が屋上にやってきて、口々に何か叫んでいた。トモヒコは中年の男の先生に抱きかかえられて、保健室に連れていかれた。

救急車のサイレン。

パトカーのエンジン音。
保健室のベッドの上でそういった音を聞いたような気がする。

廊下を誰かが走っていく。
廊下で誰かが叫んでいる。

——ええ、そうです。
——被害者は二人。

——屋上で二人死んでいました。
——首を切られています。

——若い男、教師と思われます。それと生徒。
——名前は分りません。

男の声だった。おそらく携帯で話しているのだろう。
誰なのか分らない。警察の人かもしれない。
トモヒコは朦朧とした意識の中でその声を聞いていた。

二人？
あの屋上にもう一人いたのか？
教師が殺されていた？
トモヒコはサカタしか見ていない。

――はい、えーと、教師はサトウ、生徒はサカタ。

教師はサトウ――。
サトウ先生？
サトウ先生が死んだ？

その言葉を聞いて、トモヒコはベッドから飛び起きた。保健室には保健の若い女の先生と見たこともない中年の男がいた。

☆★市立カンベ中学校★☆

988　名前：　名無し学生　投稿日：2008／08／01
9：04
殺人事件発生！！！！！！！

989　名前：　名無し学生　投稿日：2008／08／01
9：05
※投稿は削除されました

990　名前：　名無し学生　投稿日：2008／08／01
9：06
サトウ先生が
サトウ先生が
サトウ先生が
サトウ先生が

991　名前：　名無し学生　投稿日：2008／08／01
9：06
※投稿は削除されました

992　名前：　名無し学生　投稿日：2008／08／01
9：07
北校舎の屋上。3年のサカタ

993　名前：　名無し学生　投稿日：2008／08／01
9：07
※投稿は削除されました

９９４　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０８／０１　１９：０８
※投稿は削除されました

９９５　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０８／０１　１９：０８
※投稿は削除されました

９９６　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０８／０１　１９：０９
デカッチがたいーほされました

９９７　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０８／０１　１９：１０
※投稿は削除されました

９９８　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０８／０１　１９：１２
※レスが１０００を超えると書き込めなくなります

９９９　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０８／０１　１９：１２
サトウ先生
サトウ先生
サトウ先生

１０００　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０８／０１　１９：１３
サカタ君はデカッチに殺されました
酷い

１００１　名前：　名無し学生　投稿日：２００８／０８／０１　１９：１３

※レスが１０００を超えたので書き込めなくなりました。

クワタ刑事の捜査　その１

クワタ・マスミは自分の名前があまり好きではなかった。
クワタという苗字は、まあどうっていうことはない。マスミという名前も嫌いではない。しかしそれらが組み合わさると、元ジャイアンツのピッチャーの名前になった。
小学校の頃、よく男子生徒にからかわれた。特にクワタ投手が打たれてジャイアンツが負けた次の日、男子生徒は必ずマスミをからかった。
しかしマスミはそんなことはあまり気にしていなかった。いろいろ言われたが軽く流していた。くやしいとか、腹立たしいとか、辛いとか感じたことはなかった。
所詮、名前などただの記号だ。そう思っていた。そんなことでマスミをからかっていた男子生徒はいったい何がおもしろかったのだろうか？
ただできるならそんなめんどうなことはない方がいい。それでマスミは自分の名前があまり好きではなかった。
マスミが生まれた時、おそらくクワタ投手は高校生くらいだったと思う。当時からクワタ投手は有名だった。しかし驚くべきことに、マスミの両親はクワタ投手のことをまったく知らなかったらしい。両親がそのことに気づいたのは、クワタ投手がジャイアンツに入って二年目か、あるいは三年目のことだった。マスミの両親は高校野球もプロ野球もまったく興味がなかったのだ。
それにしても誰か両親に教える人がいなかったのか？
マスミはそれが不思議だった。

先週ようやく梅雨が明けて、今日から八月に入り、本格的に夏が始まった。
空気がからりとかわいていて、太陽からの光線がじりじりと肌を

焼く。マスミは肌が弱く、夏の日差しは苦手だった。
八月に入ったその日、マスミのいる愛知県警に殺人事件の連絡が入った。
A市にある中学校で教師と生徒が殺害された。そしてその場所に、犯人と思われるもう一人の生徒が居合わせたということだった。
事件の一報が入ったのは午後三時ごろ。マスミはサカキバラ警部に呼ばれて現場に行くことになった。
実は今日は以前の事件で知り合った会社員と会う予定が入っていた。会社員は三十代の男性。居酒屋で酒を飲む約束をしていたのだった。

「おい、クワタ。A市にある中学校だ。校舎の屋上で先生と生徒が首を切られて、出血多量でほぼ即死。これ見とけ」
サカキバラ警部はA4の白い紙をマスミに渡した、二、三枚がホチキスで止められていて、細かい文字がたくさん書かれていた。
はあ――とマスミは軽いため息をついた。刑事という職業はこんなふうに突発で仕事が入る。だからプライベートの約束も吹っ飛ぶことが多い。
「警部、わたし今日何となく体調がすぐれないんですけど――」
マスミはサカキバラ警部から渡された細かい文字で書かれたレポートをぱらぱらとめくりながら、そう言ってみた。
サカキバラ警部は普段は温厚な性格で、丸々とした仏のような優しい顔をしている。しかしマスミのその言葉を聞いた瞬間、ぎらりと目が光って、引きつった笑顔になった。
「おまえなあ。体調悪いって、いつもそうじゃないか。いいかげんにしろよ。今日昼飯の時、俺の目の前で、ばくばくと食ってただろう。それで体調が悪いってどういうことだ？」
ちっ、見られていたか。
マスミは声には出さなかったが、心の中で昼食のことを後悔した。今日はごまかすことはできないようだ。

「さあ、いくぞ」
サカキバラ警部は椅子から立ち上がった。マスミもしかたなくサカキバラ警部の後に続いて部屋を出た。

愛知県警の建物の中はいつでも薄暗い。照明器具が少ないし、それぞれの明るさも足りないような気がする。それで昼間でも署内は薄暗いのだ。
マスミは愛知県警に配属された時に、まずその暗さが気になった。そして職場にいる人間も暗く感じるようになった。
性格が暗いとか表情が暗いとか明確には分らないが、とにかくみんな『暗い』のだ。そんな雰囲気は今でも感じる。それで時々、やりきれなくなって仕事を抜け出すのだった。
サカキバラ警部の後について、暗く暑い廊下を歩いた。
建物の裏口から外に出ると西の空に夕日が沈むところだった。オレンジ色の光が街を包んでいた。マスミは思わず立ち止まって夕日を見ていたが、前を歩いていたサカキバラ警部にはそのドラマティックな美しさはまったく分らないようで、マスミに冷たい声をかけた。
「おい、ぼうっとしているな。はやく車を出せ」

古い型のマーク？のキーを取り出し、ボタンを押してドアロックを解除する。サカキバラ警部は何も言わずに助手席に乗り込んだ。マスミは運転席に乗ってエンジンをかけた。
「えーと、A警察署っと」
サカキバラ警部は最近やっとカーナビのルート検索機能を使えるようになった。どうやら新しく買った自分の車にカーナビがついているらしい。
「よし。おやこのルートは？。高速か。この時間、高速は混んでいるから下道だな」
サカキバラ警部はそう言ってカーナビを操作していたが、途中で

分らなくなったらしく、カーナビからのエラー音が多くなった。
「警部、もう出発しますけど」
マスミは優しい声で言った。サカキバラ警部はちょっと待てと言って、まだぶつぶつ言いながらカーナビを操作していた。マスミはかまわずに車を発進させた。
「ちょ、ちょっと待てよ、バカ！今設定してるだろ」
サカキバラ警部がマスミの方を見て、引きつった顔をしていた。
「いいですよ、警部。高速で行きましょう。下道も混んでますから、一緒ですよ」
「いや、そうだけど――おまえなあ、せっかく上司が設定してやっているんだから少しは待てよ」
サカキバラ警部は口を尖らせてそう言ったが、マスミが黙っているとあきらめて口を閉じた。

オレンジ色の夕日を背にしてマーク？は東へ向かう。名古屋高速のインターの近くになると、カーナビは高速に入るように指示をする。マスミはその指示を無視して国道のバイパスを進んだ。
「おい、高速で行くんじゃなかったのか？」
「この時間高速は混んでますから」
マスミがしれっと言うと、サカキバラ警部は何か言おうとしたらしいが、うまく言葉が出ないようで右手の拳で自分の膝を叩いた。そしてもういいや――、と小さな声で言った。

「それで――どんな事件なんですか？」
国道が渋滞し始めた頃、マスミはサカキバラ警部に訊いた。警部は黙っている。
「サカキバラさん、寝ているんですか？」
マスミがそう言ってもサカキバラ警部は口を開かない。
「サカキバラさん、すねているんですか？」
「別にすねてはいないよ。事件についてはレポートに書いてあった

だろう。それくらい読んでおけよ」
「読んでおけって――さっき渡されたばかりじゃないですか？」
「あのレポートは三時にはうちの課に来ていただろう。普通は渡す前に読んでいるんだ」
マスミは、何、無茶言っているんですか――という言葉を飲み込んだ。サカキバラ警部の反撃が始まった。マスミは事件のことを現場に着く前に知っておきたかったため、ぐっと押さえた。
「すみません、以後気をつけます。申し訳ありませんが教えてください」
警部の顔を見ると、勝ち誇ったようににやにやと満面の笑みを浮かべていた。
しょうがないなあと言いながら、サカキバラ警部は事件の概要を話し出した。

事件が起こったのは、今日、八月一日の午後一時三十分頃。
通報があったのはA警察署で時間は一時五十分。
通報者はA市立カンベ中学校三年生の学年主任であるキノシタという男。
A警察署員がカンベ中学に駆けつけ、キノシタの案内で北側の校舎の屋上に行った。屋上の小さな建物から向かって東側、屋上のほぼ中央に死体があった。
その死体はカンベ中学三年生のサカタ・テツヤ。十五歳。
死因は出血多量。首の頚動脈を鋭利な刃物で切られた模様。
そして屋上の建物の向かって西側にも死体があった。
その死体はカンベ中学三年生担任のサトウ・キヨシ。三十一歳。
死因は出血多量。サトウの方は首の他にも腹と胸にも傷があったらしい。
そして屋上の建物の東側、サカタの死体の近くに一人の生徒が座っていた。
その生徒の名前はタケダ・トモヒコ。トモヒコは座ったまま動け

ない状態だった。カンベ中学の教師であるコバヤシがトモヒコを保健室に連れていった。トモヒコの靴下に血がついていた。
屋上の建物の扉の前に学校の書類が入ったダンボール箱が八箱。生徒用の学習机が三つ。生徒用の椅子が二つあった。それらは扉のまわりに散らばっていた。
第一発見者は通報者と同じ学年主任のキノシタという男。
キノシタの話では――。
北校舎の三階を歩いていると屋上の方からどんどんと扉を叩くような音がしたため、気になって屋上へ行った。
屋上へ行くと扉が開いていて、生徒が座っているのが見えた。座っていた生徒がタケダ。
そしてその先に血を流した生徒が見えた。キノシタは生徒の顔を見たが、すでに息をしていないことが分ると、現場をそのままにして職員室へ行った。職員室にいた先生に事態を告げ、一一〇番をした。
もう一度屋上に戻ると、建物の東側にも死体があると、屋上にいた先生達が騒いでいた。
その死体が、三年生担任のサトウだった。サトウは屋上の床にうつぶせになって倒れていた。

「これから、タケダっていう生徒から話を聞くことになっている」
サカキバラ警部は最後にそう付け加えた。
「そのタケダ君は、これまで何か話したんですか？」
「さあ？　今A警察署で身柄を確保しているようだが――。おそらくまだ何も話していないだろう」
サカキバラ警部の口調は重かった。
ようやく渋滞が終わり車が流れるようになった。日が暮れてあたりが暗くなったころ、車はA警察署についた。
A警察署の建物はとてつもなく陰気だった。

マスミは愛知県警本部の建物や雰囲気が暗いと感じていたが、A市警察署の建物に比べればまだましだった。マスミが生まれる前、いや、もっともっと昔かもしれない――、それほど古臭い三階建ての建物は白い壁の所々にひびが入っていて、今にも崩れ落ちそうな気がした。

夕闇の中で見ると、その建物は圧倒的な不気味さを放出していた。マスミは駐車場に車を止めながらため息が出た。そしてこの事件はややこしくなるかもしれないという嫌な予感がした。

不気味なA警察署の入り口をサカキバラ警部に続いて入っていった。薄暗い廊下で何人かの警察官や刑事と思われる人とすれ違う。ほとんど誰もがサカキバラ警部に軽く礼をしていく。そしてマスミの方を見ると少し驚いたような表情をするのだった。マスミはその表情の意味が分らなかった。確かに愛知県警には女の刑事はあまりいないが、現代では女が刑事になることはそれほどめずらしくないと、マスミは思う。

二階へ上がる階段の前で、背の高い眼鏡をかけた男がサカキバラ警部を呼びとめた。まだ三十歳になっていないだろう。若い男だった。

「愛知県警のサカキバラ警部ですね」

眼鏡の男がはきはきとした口調で言った。

「そうですが――あなたは？」

「私はA警察署のコモリといいます。少年犯罪担当をしています」

そう言って眼鏡の男はポケットから名刺入れを取り出し、サカキバラ警部に名詞を渡した。

ああ――すみません。サカキバラ警部もコモリ刑事に名詞を渡していた。

「こちらの方は？」

コモリ刑事がマスミの方を見ていた。薄暗くてよく分らなかったがよく見ると整った顔立ちをしている。四角い黒ぶちの眼鏡のせいだろうか？　精悍な顔に見えた。

「ああ、この人は私の部下の見習い刑事で、クワタといいます」
サカキバラ警部はそっけなくマスミをコモリに紹介した。コモリは軽く頭を下げマスミに名詞を渡した。
「すみません。名詞ないですけど――クワタといいます」
マスミも軽く頭を下げた。
なんで名詞もってないんだよ――サカキバラ警部が小さな声でつぶやいていた。顔を見ると、引きつったような笑顔だった。
「こちらへどうぞ」
コモリ刑事は苦笑してサカキバラ警部とマスミを廊下の突き当たりにある部屋に案内した。
A市警察署の中も県警本部のように薄暗かった。そして案内された部屋の蛍光灯も暗かった。警察というところはわざと薄暗くなるようにしているのだろうか？わざと居心地を悪くしているのだろうか？
部屋の中には簡素な机とパイプ椅子があるだけだった。十人くらいが座ることができる広さのそっけない、ただの会議室だった。

「事件の概要はだいたいお聞きでしょうか？」
サカキバラ警部が座ると、いきなりコモリが立ったまま言った。
「ええ、まあ、大体は聞いています」
サカキバラ警部は少し驚いたような顔をして言った。
「では、タケダ・トモヒコのこれまでの供述からお話しましょう」
コモリ刑事がパイプ椅子を引いて座った。マスミもちょうど座ったところだった。がちゃがちゃと椅子を引く音が重なった。
「タケダは何か話したのですか？」
マスミが真剣な声で訊いた。
「ええ、ずっと黙ったままだったのですが、ついさっき今日あったことをぽろぽろと話し出しました。彼は今食事中ですよ。食事が終わってからもう一度話を聞きます」
コモリ刑事はマスミの顔とサカキバラ警部の顔を交互に見ながら、

ゆっくりと話し出した。部屋にある丸い時計の分針が進む音が聞こえた。
「第一発見者のキノシタという教師の話では、タケダ・トモヒコはサカタ・テツヤの死体の前で座っていたそうです。座っていた――というか、腰を抜かしていたといった感じでまったく動かなかったと、キノシタは話していました」
コモリ刑事の眼鏡が薄暗い部屋の蛍光灯の光に反射して、一瞬その目が光ったような感じがした。
「すでにお聞きかもしれませんが、サカタとサトウの死因は、鋭利な刃物で首を切られたことによる出血多量によるショック死です。サトウの方は胸や腹にも傷がありましたが、そちらは致命傷ではありません。そしてその凶器は見つかっていません」
「凶器はダケダが持っていたのではないのですか？」
サカキバラ警部が少し驚いてそう訊いた。まあタケダが二人を刺したと結論するのは簡単だ。
しかしこれまでの報告では、凶器のこともタケダが犯人であるということも、まったく述べられていない。だからマスミはこの事件がややこしくなるような予感がしていたのだ。
「いや、タケダは何も持っていませんでした。捜査員が屋上を隈なく探しましたが、見つかっていません。現在、校舎の周辺、学校の周辺を探索中です」
サカキバラ警部は軽く首を捻っていた。
「私がまずタケダに訊いたのは、何故あの場所にいたかということです」
「タケダは何といっていたのですか？」
サカキバラ警部が目を見開いて、パイプ椅子を引き、コモリ刑事に近づいた。
「サカタに電話で呼び出されたのだと、そう言いました」
「それは事実なのですか？」
「今調査中ですが、携帯の履歴にも残っているのでます間違いない

でしょう」
「サカタは何故タケダを呼び出したのでしょうか？どんな用事があったのですか？」
サカキバラ警部がそう言った時、部屋の入り口の扉が静かに開いて婦人警官が入ってきた。婦人警官は器にアイスコーヒーを三つ載せていた。婦人警官はなれた手つきでプラスチックのカップに入ったアイスコーヒーを配った。サカキバラ警部の前にアイスコーヒーが置かれると警部は軽く頭を下げた。
「どうぞ――」
コモリ刑事がプラスチックのカップを指差して言った。
ああーどうも。サカキバラ警部はそう言ったが、コーヒーカップを手に取ることはなかった。
マスミは喉が渇いていたため一番最初に口をつけた。サカキバラ警部はマスミの方をちらりと見て、何か言いたげな引きつった顔をしていた。マスミはかまわずにごくりと冷たいアイスコーヒーで喉を潤す。
コモリ刑事もカップに軽く口をつけ話の続きを始めた。
「実はですね、二週間ほど前の七月――えーとそう七月十三日にこの近くの娯楽施設である事件が起こっています」
マスミは記憶を手繰った。まさかあの事件か？
思い当たる事件があった。
「その事件って、パピヨンの白昼通り魔事件？」
マスミがそう言うと、コモリ刑事はゆっくりと頷いた。
「パピヨンの事件にサカタ君が関係していたんですか？」
「いえ、関係していたのはタケダの方です。タケダはパピヨン事件の時、被害者の一番近くにいました」
マスミは絶句した。パピヨン事件の被害者は中学生だとは聞いていたがカンベ中学の生徒だったのか。
「ということはタケダのまわりで、最近二回も事件が起きているということですね」

サカキバラ警部が分かりきったことを大げさな口調で言った。
「まあパピヨンの事件については後でお話します。今日起こった事件について、まず話しましょう」
コモリはやや興奮気味のサカキバラ警部を制して話を続けた。
「サカタはパピヨンでの事件について話したいことがあると言って、タケダをカンベ中学の教育相談室という部屋に呼び出しました。パピヨンでの事件の被害者――トウドウとバンドウという生徒なのですが――彼らはサカタの仲間だったらしいのです。タケダは『サカタはぼくが彼らに何かした――』と疑っているようだったと言っています」
「待ち合わせ場所は屋上ではなく教育相談室だったのですか？何故タケダとサカタは屋上に？」
「タケダが言うには、相談室に行ったのだけど誰もいなかった。そしてそこに『北校舎の屋上』と書いた紙が置いてあったと言っています。それで北校舎の屋上へ行った」
「それで？」
「北校舎の屋上へ出る扉があるのだけどこれが開かなかった。ダンボールやら机やらが扉の向こう側に置かれていて、開けるのに苦労したということです。
タケダは体当たりをしたりしてようやく扉を開けた。そうしたらそこにサカタが座って血を流していた。
それを見たら体が動かなくなった、とそういうことです。さっきようやくそこまで話しました」
コモリ警部は話し終わるとアイスコーヒーをすすった。
その後、トモヒコが扉を開ける音を聞いたキノシタが屋上に駆けつけることになるのだろう。
サトウは？
タケダはサトウを見ていないのか？
マスミは気になってコモリに訊いた。
「サトウは見ていないと言っています。確かにサトウは屋上の建物

の扉がある方とは反対側で死んでいました。タケダの話が本当だとしたら、タケダのいる位置からサトウは見えません」

タケダの話が本当だとしたら――。

コモリはそう言った。マスミはそれを聞いて、体に電流を通されたように、頭がびりびりとするのを感じた。

タケダの話が本当だとしたら――不思議なことになる。

登場人物が足りない。

屋上に出る扉の向こう側にダンボールや机を置いて人が屋上に入れないようにした人物。

サカタの首を切り裂いて殺した人物。

サトウの首を切り裂いて殺した人物。

タケダの話が本当だとしたら、それらの人物はどこへ消えてしまったのだろう。

屋上から飛び降りた？

どさくさにまぎれて扉を通って階段で下りた？

そんな目撃証言があるのだろうか？

マスミがコモリに訊こうとすると、コモリはマスミの疑問を察したらしく右手を上げてマスミを制した。

「そうですよ、クワタさん。タケダの話が本当だとしたら犯人がいなくなってしまう。我々は現在も聞き込みを続けています。しかしあの時間に屋上から飛び降りた人を発見できていない。あるいは屋上からロープをつたって下りてきたなんて人も発見できていない。ロープも凶器も見つかっていないのです」

コモリ刑事はマスミの目を見ながらそう言った。

「それでタケダ君の話が今回の事件の鍵となるわけです。ああ、もうそろそろ夕食の時間が終わりだ。また彼に話を訊きます。そうだ、クワタさん、一緒に聞いてくれませんか？」

それを聞くとサカキバラ警部が急に立ち上がり、にこにことしな

がら言った。
「いやコモリ刑事、タケダと話をするのは私だと伺ってここに来たのですが」
コモリ刑事は不思議そうな顔をしてサカキバラ警部の顔を見ていた。
「いえサカキバラ警部、申し訳ないですけどそれは聞いていません。聞いていたとしても何人も別な大人が少年と話をするのは望ましくありません。私がまた話を聞きます。ただクワタさんは女性なので――その――タケダも少し安心して平常心を取り戻せるんじゃないかと」
コモリ刑事は若いが県警本部の警部にしっかりと主張すべきことは主張した。マスミはこの男に少し好感を持った。ただ女性だから――タケダが気を許すとか、そういうことは違うと思った。
「サカキバラ警部、そういうことですからわたしが話を聞いてきます。警部はここで待っていてください」
「いや、しかし――」
「思春期の少年の心は壊れやすいのですよ。サカキバラ警部の怖い顔を見たら何も話さないかもしれないじゃないですか！」
マスミがそう言うとさっきまでにこにこしていたサカキバラ警部は、引きつったような笑顔になってコモリ刑事を見ていたが、コモリ刑事はこの部屋はしばらく使えますから待っていてください――と冷たく言った。

マスミはコモリ刑事の後に続いて薄暗い部屋を出た。コモリ刑事は足早に廊下を歩いていく。マスミはタケダ少年と会う前に一服したくなった。
「すみません――」
「はい？」
コモリ刑事が振り返る。
「ちょっと、煙草吸いたいんですけど」

「ああ煙草ですか。この廊下の突き当たりに喫煙所がありますよ」
そう言ってコモリはまた廊下を歩き出した。突き当たりに黄色くなったガラスで囲まれた小さな部屋があった。コモリは扉を開けて中に入った。マスミもそれに続いた。
喫煙所には誰もいなかった。白色だったらしい壁や天井は黄色く変色していて煙草の臭いが充満していた。部屋は薄っぺらなパーティションで区切られただけの簡易的なものだった。白いプラスティックのパーティションも煙草のヤニの影響なのか黄色く変色していた。
コモリは白いワイシャツの胸ポケットからマイルドセブンを取り出し、電子ライターでかちりと火をつけた。マスミもバッグからメンソールを取り出し火をつける。
「クワタさんが喫煙するとは以外ですね」
コモリが煙草をふかしながら言った。
「そうですか？すみません。さっきからずっと吸っていなくて――。時間は大丈夫ですか」
「まあ少しくらいはいいでしょう。僕も今日は忙しくて中々吸えませんでしたし」
マスミも大きくメンソールを吸い込み、煙を吐いた。ニコチンが体に吸収されていき、脳が開放される――そんな感じがした。
マスミはタケダと話す前にコモリ刑事に聞いておきたいことがあった。先ほどそのことを聞きそびれてしまったため、ちょうどよい機会が訪れたと思った。
「ぶっちゃけた話、コモリさんから見てタケダは本当のことを言っていると思いますか？」
マスミはいきなりコモリに訊いてみた。コモリは煙草をくわえながら目をぱちぱちとさせていた。
「ははは、いきなりそうきますか」
コモリは煙草をふかして言う。
「正直分りません。嘘を言っているという感じはしないのだけど、

まだすべてを話していない。そんな感じです」
「嘘は言っていない？」
「いや僕には分りません。あのくらいの年齢の子供は――、いや子供に見えてとんでもないことを考えたりしているものですから。正直、僕にはよく分らないのですよ」

嘘でなかったら犯人がいなくなる。
嘘でなかったらやっかいだ。
いったいタケダ・トモヒコとはどのような少年だろうか？
マスミの心臓が少しだけどきどきしてくるのが自分でも分った。
それはとてもめずらしいことだった。

タケダ・トモヒコは刑事課の大部屋の隅にある『事情聴取部屋』と呼ばれる狭い部屋にいた。事情聴取部屋とは正式な名前ではなく、本当は『プロジェクト五号室』というんです――とコモリ刑事が言っていた。
マスミはコモリ刑事に続いて刑事課の大部屋に入った。やはり薄暗い陰気な部屋だった。何人かの刑事がいたが部屋には活気がなかった。
「静かでしょう。今事件が重なって、みんな出てしまっているのです」
そう言ってコモリ刑事はマスミを『事情聴取部屋』に案内した。事情聴取部屋と刑事課の大部屋を仕切る壁は全面ガラス張りで、狭い部屋の中に白いTシャツを着た少年が座っているのが見えた。
コモリはガラス張りの扉を軽くノックして部屋に入った。マスミも続いて部屋に入った。
タケダ・トモヒコは白いTシャツとジーンズという服装だった。靴は履いていないで緑色のスリッパを履いていた。
「タケダ君、ご飯食べた？」
コモリ刑事がトモヒコの前に座りながら訊いたが、トモヒコは黙

って下を向いていた。
「タケダ君、こちらの女性が愛知県警のクワタさん、一緒に話を聞いてくれる」
コモリ刑事がマスミをトモヒコに紹介した。トモヒコは一瞬顔を上げマスミの方を見た。
これが人間の皮膚なのかと疑えるほど青白い顔。
それに目が死んでいる。光が感じられない。
トモヒコはその虚ろな目をマスミの方に向けた。表情はまったく変化しなかった。
まず基本的に平均的な日本人より頭が大きい。体全体に対する頭部のしめる割合がかなり高い。マスミはそう感じた。
それに目が離れていて顔のバランスが悪い。
そして顔全体が青白く目が死んでいて覇気がない。
そうトモヒコを見たほとんどの人は『キモい――』とそう言うだろう。
テレビのＵＦＯ特番などの怪しげな番組で見たことのある宇宙人の想像図みたいな雰囲気だった。
トモヒコには悪いがそれがマスミの第一印象だった。

ある夏の日の偶然

私の恋人であるヨウコさんがこの世からいなくなって、もう三ヶ月が過ぎようとしている。

この三ヶ月の間、何度も何度もヨウコさんのいたずらっぽい笑顔が私の脳裏に浮かんだ。その笑顔に手を伸ばせば届きそうな気がした。声をかければ返事をしそうな気がした。

しかし私が何をしようと、ヨウコさんは私の中でただ微笑んでいるだけだった。

うっとうしい梅雨がようやく明けた。暦は八月になって、いつの間にか、もう夏。

時は冷酷なまでに正確で、少しも立ち止まることがなくただ過ぎていく。

私はその時の流れを受け入れなくてはならない。どうやっても、時は止まらない。

私はおそらくヨウコさんを愛していたのだろう。

愛――というものがあるのか？

そもそも私は愛というものを知らない。いや、知らなかった。ヨウコさんに出会い、これまでにない不思議な感情が私の中に芽生えた。私がヨウコさんに感じた思い――他のどのような言葉も当てはまらない。

そう――それはおそらく愛なのだろう。

しかし三ヶ月前、そのヨウコさんが私の前から突然消えたのだ。ヨウコさんはある事件に巻き込まれこの世を去った。

私は、最近、思う。

私の愛の対象はこの世からいなくなったが、愛はなくなっていないのだと。

そう私の思いは永遠だ。少なくても私の意識がある限り、私はヨ

ウコさんを思い続けよう。そう思い私は生きていくのだ。

名古屋駅の近くの雑居ビルにあるメンタルクリニックを出ると、街は朱色に染まっていた。黄昏が町全体を包み込んでいてビル街が滲んでいた。

狭い裏通りを歩いて小さな交差点に差しかかった時だった。

突然私の後ろの方で大きな音がしたと思うと、赤い物体が目の前に踊り出た。

それは真紅の車高の低い車だった。その車は私の目の前の狭い路地をとんでもないスピードで通り過ぎると、乾いたエンジン音と激しいブレーキ音を残し、車体をスライドさせながら交差点を曲がった。

私が唖然として交差点に立ちつくしていると、その真紅の車が少し先のコンビニの前で急停止した。また激しいブレーキ音がした。コンビニの前を歩いている老夫婦が何事かと驚いていた。

しばらくすると、今度はその真紅の車がすごい速さでバックしてきて、私の目の前に停止した。交差点を曲がってからの一連の動きはまるで映画かドラマのカーチェイスのシーンのようだった。

私が驚いていると、左側のウインドウがするすると下がって黒いサングラスをした男の顔が見えた。ちょうど夕日が当たって男の右耳のピアスがきらりと光った。

「やあ、ミツヤさんじゃない？久しぶり」

サングラスをした男が明るい声で言った。

私は何が起こったのか解らず首をすくめていた。

「俺だよ、俺、サンタ」

男はサングラスを取ってその彫りの深い欧米人のような顔を見せた。

赤い車高の低い車のドアがゆっくりと開いて、サンタが車から降りて私の前に立った。

黒いＴシャツとジーンズ。胸には複雑な銀色の装飾品がぶら下が

っていた。
彫りの深い顔立ちはまるで欧米人のようで、頭髪は短い銀髪。背丈は高くないが、がっちりとした引き締まった体がTシャツの上からでも解る。
そして驚くべきことにこの男――、サンタは十五歳の少年なのだ。
私はおそらくぽかんと口を開けたまま、突っ立っていたのだろう。
「ミツヤさん、どうしたの？俺だよ、俺。忘れたの？」
サンタはそう言うと、私の目の前でひらひらと手を振った。
「やあ、君か――。それにしても」
それにしても――。
それにしても相変わらず酷い車の運転だと、まず私は思った。目の前に駐車してある車はサンタと初めて会った時に乗ったスポーツカーだ。この車はとても高価で信じられないような加速をする。
そしてそもそもサンタは無免許運転なのだ。
「それにしても、君は――いいかげんに無免許運転はやめたらどうだ」
私は久しぶりに会ったサンタについ説教じみたことを言ってしまった。
サンタは私の言葉はまったく聞いていないようで、サングラスをかけて言った。
「ミツヤさん、久しぶりにビールでもどう？」
「いやそういうことじゃなくて、君は――君はまったく変わっていないね。未成年はビールなんか飲んではいけないんだよ」
私は無駄だと思いながらも一応注意する。
「ミツヤさん、固いこと言わないで行こうよ。ビール」
サンタは私の忠告を無視してにこにことしながら繁華街の方を指差している。
「いや今日はちょっと約束があって――」
「約束って？一生に一度あるかないかの偶然で俺と会って、その貴重な日に一緒にビール飲むより重要なことなの？」

「いや、重要というか――」
私がしどろもどろになっていると胸ポケットの携帯が振動した。
メールが着信したようだった。
「ちょっと、失礼」
私は携帯を取り出してメールを確認した。

差出人：ｋｕｗａｔａ@ｘｘｘ．ｘｘ．ｎｅ．ｊｐ
件名：ダメかも
いきなり事件
７時はムリ　今日はダメかも

メールは愛知県警のクワタ刑事からだった。クワタ刑事はヨウコさんの事件を担当した女性刑事で、その後何度か会うことがあった。今日は名古屋で酒でも飲もうと約束をしていた。
私が携帯を見ているとサンタがうれしそうな顔をしていた。
「あれ、ミツヤさん、約束ってもしかしてデートとか？それで、今のメール、相手がドタキャン？」
「ち、違うよ、何を言っているんだ」
「本当に？　ミツヤさん、失望が顔に出てるよ」
私は必死になってごまかしたが、サンタの読みはいつでも鋭い。
二ヵ月前に起こったヨウコさんの事件は複雑な事件だったが、この少年がほとんど解決したようなものだ。
「しかたがない。軽く食事でもしようか？」
私は今日の予定がなくなったのもあり、サンタとつきあうことにした。
「食事じゃなくてビールだよ」
「解ったらから、この車をどうにかしてくれよ」
「それじゃああそこのパーキングに置いてくるよ。今日は焼き鳥がいいな」

サンタはそう言うと車に乗り込んだ。
真紅のスポーツカーは、乾いたエンジン音を街中に響かせながら発進して、通りの向こう側のコインパーキングに入っていった。

夕日が西の空のビルに隠れて見えなくなった。ビルの影が街を包むと裏通りはなんだか寂しくなった。まだ若干黄色い街の遠くの方で喧騒が微かに聞こえた。
私とサンタは薄暗くなった裏通りを歩いた。しばらくして、私は少し奥まった静かな居酒屋の前で立ち止まった。
「ここなの？」
黒い和風の造りをした居酒屋の入り口で、サンタは不満そうな顔をして私を見ていた。どうやらサンタはにぎやかな一杯飲み屋に行きたかったようだ。
私は少し気分が沈んでいてできれば静かに飲みたいと思っていた。
そして未成年のサンタと一緒に飲んでいるのを多数の人々に見られるのはどうかと考えていて歩いていた。
お店の前の看板に『個室』という文字を見つけて、ここなら人が少ないし静かだろうと思い、立ち止まったのだった。
「今日はなんだか気分が乗らないんだ。静かなところで飲もう」
私はそう言うと居酒屋の古ぼけた木の引き戸を開けて中に入った。サンタはぶつぶつ言いながら私の後に続いた。
店に入ると、黒い和服を着た店員が私の方を見た。
「いらっしゃいませ」
無精髭を生やした若そうな店員が静かな声で言った。
「すみません。個室って書いてあったんですけど入れますか？」
私は店の看板に書いてあった文字を思い出しながら言った。
「ああ、いいですよ。空いてます」
店員は笑顔になってそう言い、店の奥の方に手を向けた。私とサンタは店員に従って店の奥に入っていった。
その居酒屋は入り口からは想像できないほど奥行きがあった。我

々はおそらく店の一番奥のパーティションで区切られた四人掛けのテーブルに案内された。個室といっても完全な部屋ではなく、小さな四人掛けのテーブルが黒い木のパーティションで区切られていた。
店の奥まで歩いていく途中にいくつかのテーブル席とカウンター席があったが、客はひとりもいなかった。我々は今夜最初の客らしかった。
和風な店の外観と同様、内部も木がふんだんに使われた和風の造りだった。
テーブルも壁も天井も黒い木で、さらに照明も落としてあり全体的に暗い。これを落ち着いた雰囲気というのだろうか。少し洒落た感じがした。仕事帰りのサラリーマンよりカップルがデートに使うことが多いのだろうと、そんな気がした。
私もできれば女性と二人で来たいと感じたが、今日の相手は男、それも少年である。
「こちらがメニューです。お飲み物はお決まりでしょうか」
私が店内を見ていると若い店員がメニューを差し出して言った。私は、ああ――すみません、と言って椅子に座った。椅子も木製で黒だった。
サンタはすでに座っていてメニューを取って見ていた。
「ああビールね！生ビール。ミツヤさんもビールでしょ」
「それでは生ビール二つ、お願いします」
店員は伝票に注文を書き込んでいた。
「まずビール持ってきて」
サンタがメニューを見ながらそう言うと、店員は我々のテーブルを離れていった。
店員はすぐに生ビールのジョッキを持ってきた。私とサンタはまず軽くジョッキを合わせた。わりと大きな硬質な音が店内に響いた。店員は笑顔でテーブルの横にいる。
「この偶然に感謝」
私はいつも調子でお疲れ様と言ったが、サンタは少しきざなこと

を言った。そしてメニューを手に取ってあれこれと注文をした。ひととおり注文を終わると、ああ――と言って私にメニューを差し出した。私はサンタから受け取ったメニューをそのまま店員に渡した。
「あれ？ミツヤさん、頼まないの？」
「いや、今日はなんだか、あまり食欲がないんだ」
私は苦笑いをしながらそう言った。
サンタは喉を鳴らしながらビールを一口飲んで、黒いサングラスを外した。すると暗い店内にサンタの顔がぼんやりと浮かび上がった。
そういえば店内は黒を基調としていて、さらに照明は暗い。そしてサンタは黒いTシャツと黒いサングラスの黒づくめ。サンタの姿が闇に溶け込んでいるようだった。
「ミツヤさん、久しぶりだね。えーと、一カ月ぶりくらいかな？」
サンタはまたビールを飲んだ。中ジョッキはほとんど空になった。とても十五歳の少年とは思えない。
私も軽く一口飲んだが、サンタのように豪快に飲むことができなかった。
「ミツヤさん、驚くべきほどの偶然で俺に出会ったのに何か元気ないんだよなあ。仕事で疲れてるの？」
サンタは私の方を見ながら少し真剣な顔をしていた。
「あの事件でヨウコさんがいなくなってから、ちょっと元気がないんだ。最近は少しは良くなってきたけどね」
私にとって、ヨウコさんの存在は想像以上に大きかったのだ。
ヨウコさんがこの世から消えてしまった後、私はその単純な事象に納得ができなくて根底にある真実を探った。
確かに真実はあった。
それは運命の糸が複雑に絡み合い、表面的には見えないものだった。
複雑に絡み合った糸を解し、私に真実を教えてくれたのは、十五歳の少年――、今私の目の前でビールを飲んでいるサンタだった。

真実は私にとって衝撃的なものだった。私はヨウコさんがいなくなったことによりショックを受け、その真実を知って、さらに大きなショックを受けた。
それ以来、私は何もする気がなくなってしまった。
世の中で起こっている出来事にもまったく興味がなくなって、テレビも新聞も見なくなった。
私の中にあったエネルギーがすべて消滅してしまった感じで、体を動かすのも辛い時期があった。

何かをやってどうなるのだ？
ヨウコさんが帰ってくるわけでもない。
何をやっても疲れる。

そのうち生きていてどうなるんだ？　と思うようになった。
死んでしまおう――とも何回か思った。本当にそう思った。
しかし私が死に向かうのを思いとどまらせたのは、ヨウコさんの最後の言葉だった。

がんばって――。
何かできるはず――。

その言葉で私はどんなに勇気付けられたか。どんなに救われたか。
私はメンタルクリニックに通い、精神安定剤を飲んではいるが、最近では何とか生きていこう、何かやってみよう、と思えるようになってきた。

「ああそうか。ヨウコさんのことか。でも、もう三ヵ月もたつよ。まだあのことをあれこれと考えているの？」
サンタは『もう三ヶ月』と言った。三ヶ月という期間はサンタにとっては長い期間なのだろうか？

私にとって最愛の人をなくしてからの三ヶ月はとても短い。そのショックから立ち直るには三ヶ月では足りない。
「まだ三ヶ月しかたっていない。あれこれと考えることは最近ではなくなったけど、まだぼくは立ち直れないんだ」
私の声は少し大きくなった。サンタは意外な顔をしてテーブルの隅にある店員を呼ぶための小さなスイッチを押していた。サンタのジョッキが空になっていた。
「そうか――。ミツヤさん、よほどヨウコさんのことが好きだったんだね。でも俺には理解できないや。まあ、俺はミツヤさんじゃないから理解できないのはあたりまえなんだけど――」
先ほどの若い髭を生やした店員がまたやってきた。サンタは生ビールのおかわりを頼んだ。私のジョッキにはまだ半分以上ビールが残っていた。
「まあ君には解らないだろう。人を愛するということが――そして愛する人がいなくなるということが、どれほど辛いか」
サンタの言葉と態度あまりにも冷たかったので、私は下を向きながら小さな声でつぶやくように言った。
「でもさ、ミツヤさん、愛する人だろうが嫌いな人だろうが、人は必ず死ぬんだぜ。だから絶対に別れは避けられない。別れのない出会いなんてないんだ」
私は黙っている。そんなことは解っているつもりだ。
「だからさ、別れは辛いけどそれをいつまでも引きずって何もできないまま過ごすのは、無駄なんじゃないかな」
そう言うとサンタは店員が持ってきた新しい生ビールを一口飲んだ。
「無駄！　そう確かに無駄だ。だけど、だけど、どうしようもないんだ」
「ミツヤさん無駄だと思っていてもどうしようもないってのは、精神が疲れていると思う。それは病気だよ。いや変な意味じゃなくて、誰にでもある、心の病気だと思う」

私は自分のジョッキを取りビールを一口飲んだ。
「そうだよ。だからメンタルクリニックで治療も受けているよ。それで最近は少しは良くなってきたんだ」
「そう――そうするべきだよ。最近は心の病気のことも科学的に解ってきているから」
確かにメンタルクリニックで治療をするようになってから幾分気分は良くなったとは思うが、実際のところ治療の効果なのかどうか、私には疑問だった。
科学的に解ってきている――本当にそうだろうか。
「ところで、ミツヤさん、今日は何をやっていたの？約束って仕事？」
サンタはいきなり話題を変えてきた。
「いや、だから、この近くのメンタルクリニックに通っているんだ。その帰りだよ」
「ああ病院か。会社へは行っていないの？」
私はまた黙ってしまった。あれ以来、ずっと休職していて会社には行っていない。
私が黙っているとサンタはいつの間にか並べられた料理から、焼き鳥を手にとっていた。そして一口食べて首を横に捻った。
「ちょっと塩が足りないかな」
そう言って次におでんに箸をつけた。
「うん、会社は休んでいる――。仕事をする気にもなれないし、会社でいろいろ言われるのも嫌だしね」
私はサンタがやわらかい大根を箸で摘むのを見ながら言った。
「ミツヤさん何も悪いことしてないじゃん。いろいろ言われたってどうってことないんじゃない？」
サンタは少しあきれたような顔をしていた。確かに私は悪いことはしていない。普通の精神状態であればそんなことはどうだって良いのだが、今、私の心は沈んでいる。
「まあそれはそうだが――いろいろあるんだよ。大人には」

ふーん、そうなの――とサンタは大根を頬張っていた。
ちょうどその時、私の胸ポケットの携帯が振動した。メールを受信したようだった。私は、ごめんとサンタに言って、携帯を確認した。

差出人：ｋｕｗａｔａ@ｘｘｘ．ｘｘ．ｎｅ．ｊｐ
件名：いまから
何とか行けそう
今からいい？

メールはクワタ刑事からだった。
そう――今日名古屋に来たのは、メンタルクリニックに行くということもあったが、もうひとつはクワタ刑事と会うという約束のためでもあった。
クワタ刑事のショートヘアーの端整な顔が浮かんだ。すらりとしたスタイルと甘い香水の香りも浮かんだ。
クワタ刑事はヨウコさんの事件で捜査を担当した女性だった。その姿や仕草は刑事というよりクラブのホステスという感じがした。先週久しぶりにクワタ刑事から電話があり、一緒にお酒でも飲まないかという話になった。
私は他人との接触を避けて半ば引きこもりのような生活をしていたが、最近では体調もよくなってきたので、久しぶりに酒を飲むのも良いかと思いクワタ刑事の誘いを受けたのだった。
クワタ刑事は電話でははっきりとは言わなかったが、多少なりとも私のことを心配してくれているようだ。私はそれがうれしかった。この三ヶ月間会社を休んでいるが、会社の上司や同僚から私を心配する声はまったくなかった。
会社には私を心配してくれる人はいないのだ。ビジネスでつながれた関係など所詮そんな程度だ。
「サンタ君、クワタさんを覚えている？」

私がそう訊くとサンタは怪訝な表情になった。
「クワタさん？　誰それ？」
「ああやっぱり覚えていないんだ――。あのヨウコさんの事件の担当だった刑事だよ」
「富士吉田の刑事？　あのひょろりとした性格の悪い男？」
「いやそうじゃない。愛知県警の女性刑事」
「ああ――、あの口の悪い攻撃的なおねえさんか！」
「そう――、いやそんなに攻撃的でもないだろう」
「いや、あの人は俺を敵対視しているね。まあいいや。それでそのクワタさんがどうしたの？」
「今からここに呼ぶけど良い？」
サンタはビールジョッキをテーブルに置いて、目を細め、私の顔をじっと見ていた。そしてにやりとして言った。
「ミツヤさん、落ち込んでいるなんて言って、やっぱり今日デートだったんだ」
「いやそうじゃない。たまたま名古屋にいるから酒でも飲もうって――」
「まあいいや。で、俺がいていいの？ミツヤさん二人きりの方がいいんじゃない？」
「そんな関係じゃないよ。君がいてまったくかまわない。サンタ君はどう？」
「どうって――別にいいよ。ビール飲んでたら逮捕されるってなら来てほしくないけど」
「それはないよ――」
私は苦笑いをしながらクワタ刑事のメールに店の場所を返信した。
私がようやく二杯目の生ビールを注文した時、店員の後ろにすらりとしたスーツ姿の女性が見えた。女性は私の顔を確認するとにこりと微笑んだ。
ストレートのショートヘアーが店の薄暗い照明の中で艶やかに光

った。
紺のジャケット。白いブラウスの胸元に金色のネックレスが見える。スカートも紺で少し短めだった。
「ごめん。いきなり事件が起こって、ちょっと遅れちゃった」
クワタ刑事が我々のテーブルに近づいてきた。甘い香りが漂う。
店員はクワタ刑事の姿を見て少し驚いたような表情をしていた。
クワタ刑事は笑顔で私の前の席に座ろうとしたが、そこにはサンタがいて生ビールを飲んでいた。
クワタ刑事はサンタの姿を見ると、驚いた顔をして眉をひそめた。
「なんであんたがここにいるのよ」
先ほどの声より一オクターブほど低い声でクワタ刑事が言った。
注文を取りに来ていた店員はびくっと肩を震わせた。自分のことを言われたのだと勘違いしたようだ。
「なんでおねえさんが来るの？」
サンタもクワタ刑事を見ながら低い声で言った。にやにやと顔を緩ませている。
店員が苦笑いをしながらテーブルから立ち去ると、クワタ刑事は、ちょっとどきなさいよ――と言ってサンタの横に割り込むように座った。
「あっ、ビール、お願いします」
クワタ刑事が立ち去ろうとしている店員の背中に言った。
「ちょっと、ミツヤさん、何故この子がいるのよ」
今度は私の方に向かって眉をひそめる。
「いや偶然なんだ。本当に偶然にさっきそこの角で会ったんだ」
「そうだよ。偶然、本当に偶然なんだよなあ。こんな偶然めったにないから飲まないわけにはいかないでしょ」
サンタは何度か小さく頷いてビールジョッキを口に運んだ。
クワタ刑事は、はあ――小さくため息をついた。
「そう――ミツヤさん電話した時相当落ち込んでいたから、いろいろと話を聞いてあげて、できればちょっとは気持ちが楽になるとい

いなあって思っていたけど――」
クワタ刑事はそこまで言うと脇に置いてあった茶色のバッグから、見たこともない外国のタバコとライターを取り出して、テーブルの上に乱暴に放り出した。
金属製のライターががちゃりとした音を立てて、私とサンタは思わず顔を見合わせた。
「何よ。ミツヤさん、元気じゃないの。サンタなんかと楽しそうに飲んじゃって」
私はなんだかクワタ刑事に申し訳なくなった。やはり私のことを心配してくれていたのだ。
「ミツヤさんが元気ならそれでいいじゃん？何故おねえさんが怒るの？」
サンタがクワタ刑事の放り出したタバコの箱を手にとって、つぶやくように言った。
「うるさいわね」
クワタ刑事は乱暴にサンタからタバコを奪って、一本取り出してライターで火をつけた。
サンタはごほごほとわざとらしく咳き込んだ。クワタ刑事はそれを見てサンタの顔に煙を吹きかけた。
相変わらずこの二人の相性は悪い。私は今夜この二人を会わせたことを後悔し始めていた。
「ところでクワタさん、今日はどんな事件だったんですか？」
刑事が一般人に事件のことを話すとは思えないが、二人の気をそらすため私はあえてクワタ刑事に訊いてみた。
「どんなって――」
クワタ刑事の目が少し輝いたような気がした。
クワタ刑事はタバコをふかしながら、遠くを見るような目をしていた。そして軽くため息をついた。
「どんなって――殺人事件なのよ。うーん、言っちゃおうかな」

殺人事件――。
私はその言葉を聞いて、三ヶ月前の事件を思い出し、切なくなった。クワタ刑事は日常的にそんな切ない事件に接しているのだろうか。
「殺人事件か。それどんな事件？俺、不思議なことには興味があるんだよね」
今度はサンタの目が光る。
サンタの言葉は何だかとても不謹慎に感じた。殺人事件の関係者や当事者がどんな思いでいるのか？どんなに大変なのか？そんなことをまったく解っていないのだ。
「サンタ君よそうよ。君が首を突っ込むことじゃない」
私はサンタに向かって窘めるように言った。
クワタ刑事はビールを一口飲んで、タバコをふかす。
「そうね、ちょっと不思議な事件かな。まあどうせもうニュースでやってるし、明日の新聞には大きく報道されると思うから、少し言っちゃうか」
私は心臓の鼓動が速くなっていくのを感じた。
「今日、A市のカンベ中学校で殺人事件があったの。校舎の屋上で、生徒と先生が首を切られて死んでいた。そしてもう一人の生徒が、その学校の生徒で、屋上で座りこんでいたの」
「ふーん、その事件のどこが不思議なの？」
サンタが訊く。
「その座り込んでいた生徒の話がちょっと不思議なの。その生徒の話では殺された生徒に呼び出されて屋上へ行ったら、屋上に出る扉の向こう側にものが置いてあって、扉が中々開かなかった。
強引に扉を開けて、屋上に出ると生徒が殺されていた。屋上にはもう一人教師も殺されていたのだけど、その生徒は見ていないと言っている。
そして凶器――、おそらくサバイバルナイフや小刀みたいなものだと思うけど、発見されていない。

校舎は三階建てで、屋上から下に下りる手段はその扉の他にはないの」
クワタ刑事はそこまで言うとまたビールを飲んだ。灰皿に置いたタバコは火が消えてフィルタだけになっていた。
「その座り込んでいた生徒が犯人なら、まったく不思議でもなんでもない」
サンタは興味なさそうにつぶやいた。
「今日、その生徒に会ったのよ。気の弱そうな感じで嘘を言っているようには見えなかった。なんだかいじめられっ子みたいな――」
「ああ、そうか。その生徒が言っていることが本当なら、これは密室だって言うんでしょ。空中に現れた密室」
サンタは少しうれしそうな顔をしていた。
「いやそこまでは言わないけど――」
クワタ刑事は苦笑した。
「そうだよね。密室って言うには穴があるよね。その生徒の言うことが本当だとしても、屋上から逃げる手段はいろいろありそうだし。校舎を見てみないと解らないけどロープを伝って降りるとか」
「今のところそんな目撃証言はないのよ」
「ふーん。まあもう少し捜査が必要だね」
サンタは偉そうな態度で言った。その言葉にクワタ刑事が反応する。
「あんたはなに偉そうなこと言ってんのよ」
クワタ刑事は不機嫌な顔になったが、続けて話す。
「それとね、もうひとつ気になることがあるの。二週間前、A市のパピヨンで起こった事件を知ってるでしょ？」
私は最近ほとんどテレビを見ていなかったがパピヨンという言葉には覚えがあった。確かパピヨンという娯楽施設の駐車場で人が刺されたという事件だった。
「ああパピヨンの白昼通り魔事件か――。それがどうかしたの？」
私がその事件についてクワタ刑事に質問しようと思っていると、

サンタが先に言った。
「そう、白昼パピヨンの駐車場で中学生が二人刺されている。被害者は今回の殺人事件があったカンベ中学校の生徒なの。さらにそのパピヨンの事件の時にも、今日殺人事件があった屋上で座り込んでいた生徒が居合わせたのよ。それも被害者の一番近くにいたのよ」
その言葉を聞くとサンタは記憶の奥を探るような複雑な顔をしていたが、何か思い当たることがあるらしく、ポケットからＰＤＡの端末を取り出してキーを叩きながらクワタ刑事に訊いた。
「おねえさん、その今日殺された被害者の生徒の名前はなんていうの？」
「名前は――まあいいか。どうせ新聞には出るから。まず殺された生徒だけど名前はサカタ・テツヤ――」
「サカタ・テツヤだって！」
サンタの声が大きかったので私もクワタ刑事もびくりとしてしまった。
「ちょ、ちょっと声が大きいよ、サンタ君」
私は慌ててサンタに言った。しかしサンタは私の声を無視してＰＤＡを凝視している。
「えーと、それで――パピヨンの被害者はトウドウ・ミノルとバンドウ・キョウコ？」
サンタがＰＤＡを見ながらクワタ刑事に訊く。
「ええっ！ちょっと待ってよ。あんた何言っているのよ」
クワタ刑事は鞄の中を引っ掻き回して、赤色の洒落たシステム手帳を取り出した。ぱらぱらと手帳をめくってようやく目的のページを見つけて緊迫した声で言った。
「そう――パピヨンで刺されたのは確かにトウドウ・ミノルとバンドウ・キョウコだけど、何故あんたが知っているのよ。マスコミには被害者の名前は公表されていないはずだけど」
「知っているも何もこのサイトに予告されているよ」
サンタはＰＤＡのディスプレイを開いてテーブルの上に置いた。

ＰＤＡには黒い画面に赤い文字が表示されていた。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｘｘｘ．ｘｘｘ．ｃｏｍ

主文

被告人ニノミヤ・トオルを死刑とする。

被告人サカタ・テツヤを死刑とする。

被告人トウドウ・ミノル、バンドウ・キョウコに肉体的苦痛をあたえるものとする。

被告人イワタ・ミドリには性的な苦痛をあたえるものとする。

理由

被告人ニノミヤ・トオルは数々の陰湿な事件の首謀者。こいつのおかげでぼくの人生は暗く悲惨なものとなった。こいつの心は氷のように冷たく、人が苦しむことによって快楽を得る。情状酌量の余地なし。

被告人サカタはニノミヤの命令に逆らえなかったという点では、多少同情の余地はある。しかしサカタの性格は残忍で、ニノミヤの命令とはいえ、人を傷つけることを楽しんでいた。ニノミヤがいなかったら、こいつが首謀者となりえた。生きている資格なし。

被告人トウドウと被告人バンドウは、ニノミヤに弱みを握られており、しかたなく彼の命令に従っていたと思われる。しかしこいつら、人間的な感情が欠けている。だから自分の体が傷ついたら、どれほど痛いか、身をもって知ってもらう。

被告人イワタは、その心と体をニノミヤに支配されていた。直接ぼくに危害を加えることはなかったが、いつも周りで煽っていた。

ぼくの肉便器になって、罪を償ってくれ。

クワタ刑事の捜査　その2

愛知県警の情報管理課はエレベータホールから延々と長い廊下を歩いた突き当たりの総務部の入っている大部屋にある。
クワタ・マスミは大部屋のドアを開けて中に入った。入り口は総務課で受付机があって若い女性が座っていた。
マスミはその女性に声をかけた。
「すみません」
ノートパソコンを操作していた女性がマスミの声に気づいて顔を上げた。
「はい――なんでしょうか？」
「あの――情報管理課っていうのはどこにあるのでしょう？」
総務部のある部屋は広く、ぱっと見ただけでは各課がどの机の島にあるのか、マスミにはまったく見当がつかなかった。部屋はざわざわとしていて百人くらいの人が働いていた。
「はあ情報管理課は、この部屋の一番奥の島になります」
女性は部屋の奥の方を指差しながら言った。
部屋は広くて奥の方にいる人は霞んで見えなかった。
「あの――サイバー犯罪の担当の方は情報管理課でよろしかったでしょうか？」
マスミは部屋の奥を指差している女性に訊いてみたが、女性は指差したままきょとんとしていた。
「サイバー――ですか？」
「はい、サイバー犯罪対策担当のシモダさんという方に――」
「すみません。分かりません。この部屋の一番奥が情報管理課なのでそちらで聞いてください」
「ありがとうございます」
マスミはそう言って女性の指差した部屋の奥に向かって歩き出した。総務課には何回か庶務関連の用事で来たことがあるが、情報管

理課に行くのは初めてだった。

一昨日カンベ中学で起こった殺人事件の被害者――。

そして二週間前、パピヨンという娯楽施設で起こった通り魔事件の被害者――。

その三人の名前が、インターネットのホームページに予告されていた。

そのことをマスミに教えたのは、十五歳の少年、サンタだった。

サンタは三ヶ月前女性会社員を事件から救い、実質その事件を解決した。

直感が鋭く論理的な思考を持つ少年。少し生意気だが犯罪捜査における能力は高い――のかもしれない。、

マスミはすぐに愛知県警本部に連絡した。電話に出た捜査一課のサカキバラ警部にその話はまったく通じなかったが、同僚がすぐに動いて情報管理課のサイバー犯罪対策室の協力を得ることになった。

サイバー犯罪対策室ではインターネット上の違法行為や有害情報を扱っている。今回の犯罪予告ともとれるホームページについて何か情報を持っているのかもしれない。今回の事件との関係はあるのだろうか？

一日が過ぎた。情報管理課・サイバー犯罪対策室では何かつかめたのだろうか？

総務部の大部屋は広かった。部屋の奥まで行ったが、情報管理課がどこなのか分からない。マスミは十人ほどの机の島の前で立ち止まって、ノートパソコンを操作している白髪の男に訊いた。

「すみません。シモダさんはどこの席でしょうか？」

白髪混じりの初老の男はめんどくさそうに顔を上げてマスミの方を見た。男の黒縁の眼鏡がずり下がっていた。

男は眼鏡をかけ直して改めてマスミを見て、少し驚いたような表情になった。女性の刑事がめずらしいのだろう。

「シモダは――うん？あんたもしかして、クワタ刑事か？」
「はい、クワタです」
マスミはすぐにそう返した。
白髪混じりの男はマスミをじっと見ていた。そして笑いを飲み込むようにして言った。
「あんた女の人だったのかや。クワタ・マスミってどんな男かと思ってたんだけど」
最後の方は笑いながら言った。
マスミは自分の姓だけでなく名前の方も言われて少し戸惑ったが、いつものことなので軽く流した。
「ええ偶然にも同じ名前なんですよ。まあそんなことはどうでもいいと思います。それよりシモダさんは？」
「ああシモダね。シモダはマシンルームにこもってなんかやってるなあ。それにしても、女の人だったのかや」
男はまだマスミの名前にこだわっているようだった。
「マシンルームはどこですか？」
マスミはできるだけ冷静を装って言った。
「ああ、あそこの部屋だがや」
白髪の男が指差した先に木目調の扉があった。
マスミは木目調の扉の前まで歩いて、軽くノックをした。
しかし中から応答はなかった。マスミが扉のノブに手をかけて回すと扉があっけなく開いた。
「すみません」
マスミがそう言って扉を少し開けると、熱気とどこかで嗅いだことがある臭いが噴出してきた。
部屋はそれほど広くない。人が十人程度入れるかどうかの広さだ。その部屋の壁は棚があり、ネットワーク機器か、あるいはコンピュータ機器で埋め尽くされている。
小さなＬＥＤの光がいくつも点滅していた。そして部屋の片隅に机があってディスプレイが三つあった。その前に太った男が座って、

キーボードを操作していた。
マスミはもう一度その男に向かって声をかけた。
「すみません――シモダさんでしょうか？」
太った男が椅子を回転させてマスミの方を向いた。
でっぷりとした腹、脂肪でズボンが張り裂けそうだ。
顎と首の境界線はなく下膨れの顔に汗をかいている。
この男も黒縁の眼鏡をかけていた。頭頂部に頭髪はなく、部屋の蛍光灯の光を反射して艶やかに光っていた。
そして左手にハンバーガーを持っていた。先ほどの臭いはこの臭いだ。マクドナルドのハンバーガーとポテトの臭いだ。
その男は目を細めてマスミの方を見たまま、口を半開きにしていた。
「すみません――シモダさんでしょうか？」
マスミがそう言うと、その男は手に持っていたハンバーガーを机の上に置いて椅子から立ち上がった。回転椅子が音を立てて倒れた。
「はあそうですが――あなたは？」
「わたし、捜査一課のクワタです」
「クワタ――ああクワタ・マスミ刑事？」
「ええそうです」
「ええっ！女の人だったんですが、てっきり――」
「てっきり？」
マスミは微かに微笑みながら訊いた。
「いえ、なんでもないです。すみません」
「シモダさん、あのカンベ中学の事件のことでちょっとお話したいのですけど――」
マスミが優しくそう言うと、シモダは慌てて自分の倒した椅子を起こし、隣にあった椅子をマスミの方に向けた。
「ああそうですか。こ、この椅子に、とりあえず座ってください」
マスミはすみません――と言って座った。
シモダはポケットからよれよれの小さなタオルを取り出し、必死

に汗を拭いていた。
「さっそくですがシモダさん、あのカンベ中学の事件ですが――」
マスミはすぐに核心に迫った。
シモダはまだタオルで顔の汗を拭いていた。
「はあ――」
「あのカンベ中学の事件、インターネットのサイトに予告されていたのですがそのサイトについて何か分かりました？」
もう一度マスミが言うとシモダはやっと我に返ったようで、少しずつ状況を話し始めた。
「ええそうですね。えーと、ああいう犯罪予告というか、そんなやつは最近増えているんですよ。
インターネット、携帯でもそうですが、掲示板と言われているサイトがいくつもありまして、そこでは基本的に匿名で何でも書くことができます。
そう、基本的に何でも書き込むことができるんですね。だけどあまりに酷い内容――、犯罪予告だとか、誹謗中傷なんかは警視庁や各県の警察に窓口があって、そこに通報できるような仕組みがあるんです。
通報を受けると、我々のような対策室が調査するんですが――」
シモダは、またタオルで汗を拭く。
「調査するんですか？」
マスミはシモダの顔を見ながら訊いた。シモダは少し照れた表情をしながら話を続ける。
「調査するんですが――通報が相当多いためよほど現実的でないと対応するのが難しいのが現状です」
「現実的とはどういうことですか？」
「えーと、例えば犯罪予告であれば場所や対象の姓名がはっきりと書かれているとか――」
それはそうだと、マスミは思った。そこまで書かれていなければ、対応できないのだろう。

「調べてみると今回のサイトは確かに通報されていました。通報されたのは二ヵ月前になります。
しかし、場所が書かれていなかったため対応が遅れました。それに――この判決という書き方――。いまいち具体性がない。死刑にすると書いてあるのですが殺すとは書かれていない。
それで、しばらく様子を見ようと――」
しかし二週間前このサイト、判決文に書かれていたトウドウ・ミノルとバンドウ・キョウコが刺されたではないか？
マスミはそのことをシモダに訊いてみた。
「確かにそうなのですが――。その――何と言うか、こういう通報は多いので――」
「気づかなかったと？」
「まあそう言えば、そうなんですけど」
結局警察は見落としていたということだろう。
「このサイトは誰が作ったのかは分かりましたか？」
マスミは一番気になっていたことを訊いてみた。
「まだ完全には分かっていません。このサイトは無料レンタルホームページサーバと呼ばれるものです。メールアドレスと簡単な個人情報を登録すれば誰でも自由にホームページを作ることができます。
このページが作成されたのは四ヵ月前のことです。作者のメールアドレスはｄｅｖｉｌ@ｘｘｘ．ｘｘ．ｎｅ．ｊｐというこれも無料で取得できるメールアドレスで個人情報はデタラメでした。
さらに調べているのですが、このページを作成した人物はあるインターネット・サービス・プロバイダーからアクセスしています。このサイトはパソコン用で携帯ではページを作ることができません。
そのプロバイダの四ヵ月前のアクセスログを提出してもらって、今、ちょうどそれを調査しているところです」
シモダは最後にてかてかした頭部をタオルで拭いていた。
「それでそのサイトを作った人物は分かりそうなのでしょうか？」
「たぶん作った場所いやパソコンか――それは分かると思います」

「それが分かっても人物は特定できないのでしょうか？」
「ええネットカフェから書いたとすると、ちょっとやっかいになります」
そうかネットカフェというものがある。四ヶ月も前のネットカフェの客なんか分かるのだろうか？
「そうですか。インターネットは匿名が基本とはいえ結構分かるものなのですね」
マスミがそう言うとシモダの分厚い唇が微笑んでいた。

マスミが捜査一課に戻るとサカキバラ警部が電話をしていた。
「そうかニノミヤは大丈夫なんだな。それで、えーと、イワタなんとかは、そうか分かった」
サカキバラ警部は時代遅れの大きな受話器を置いた。
マスミは警部に訊いた。
「ニノミヤってあのサイトに予告されていたニノミヤ・トオルのことでしょうか？」
サカキバラ警部は難しそうな顔をしていた。
「そうあのニノミヤ・トオルだ。A警察署が無事でいることを確認して、しばらくは見守ることになる。あのサイトの予告通りに二人が刺されて一人が殺されているからな」
「それでサイトで予告されていていたもうひとりのイワタ・ミドリについてはどうなんでしょうか？」
「どうって――今、話を聞いているところだそうだ。彼女にも何かあった――らしい」
結局あのサイトに予告されていた人物はすべてカンベ中学の生徒だったのだ。今回の事件の被害者の中でサトウだけが違った。サトウはカンベ中学の教師だった。
マスミはその疑問をサカキバラ警部に投げかけた。
「それにしてもサトウ・キヨシの死はどう捉えたらいいのでしょうか？」

サカキバラ警部はの顔はさらに険しくなった。
「サトウの死は予告されていませんでした。しかし一連の事件と無関係とは思えません」
「そもそもあのサイトってのはどうなんだ？誰が作ったんだ？　サイバー対策室は何といっている？」
サカキバラ警部が逆にマスミに訊いてきた。
「サイバー対策室ではまだ調査中ですがあのサイトは少なくても四ヶ月前には作成されてインターネットに公開されていました。なので今回の事件の予告だと思われます」
サカキバラ警部は宙を見るような仕草をした。
「警部、タケダ・トモヒコはあのサイトについて何か話してはいないのですか？」
「A警察署でタケダにそのことを訊いたが、知らないと言っているらしい。しかし――何だかなあ。インターネットとかパソコンとか携帯とかメールとか、何なんだよ。そんなものができるから捜査がややこしくなる」
「警部、いつの時代でも新しいものは出てきます。そしてそれを利用した犯罪も必然的に生まれます。警察もそれに対応しなければならないかと――」
サカキバラ警部は引きつった笑顔になった。この顔は警部の機嫌が悪くなった時に現れる。
「おまえが言うな。そんなことは分かっている。とにかくサイバー対策室と情報を共有しておけ。それと――サトウ・キヨシについて調べるか」
マスミはそれは感じていた。サトウについては調べてみるべきだ。
今回の事件の被害者の中でサトウだけが異質だ。サイトに予告されていない。それにサトウだけが『大人』だ。他の被害者はすべて生徒でサトウは先生。
マスミはサトウの死が今回の事件の鍵となるような気がしていた。
「おい、カンベ中学に行くぞ」

見るとサカキバラ警部がスーツの上着を持って立っていた。
昼過ぎの日差しは強かった。雲ひとつない青空が広がっていて真夏の太陽が眩しい。
マスミはマーク?を運転してA市に向かった。しばらく走ると、ようやくエアコンが効きだし車内が冷えてきた。
「まずA警察署へ行って、それからカンベ中学だ」
助手席のサカキバラ警部はハンカチで顔の汗をぬぐっていた。
道路は空いていて車は順調に名古屋市内を抜けた。
「おい、インターネットってのはそんなに簡単に、その――ホームページとかいうのは作れるのか?」
しばらく無言だったサカキバラ警部が突然訊いてきた。警部はまったく知らないのだ。
「ええ、簡単に作ることができます」
「中学生でもできるのか?」
「小学生でもできると思いますが」
マスミがそう答えると、サカキバラ警部はふうっとため息をついた。そしてこうつぶやいた。
「もしタケダ・トモヒコがそのホームページを作ったということが分かったら決まりだな」
マスミはタケダ・トモヒコの顔を思い出して複雑な気分になった。あの少年にこんな犯罪ができるのだろうか?
A警察署の古ぼけた建物が見えた。
警察著の正面の駐車場に多くの車が止められていて、空いている場所がなかった。マスミは駐車場を一周し、サカキバラ警部の顔を見た。
「たしか裏の方にまだ止める場所があったな」
サカキバラ警部は警察署の建物の横の狭い道を見ながら言った。
マスミはステアリングを大きく切って狭い道にマーク?を向けた。建物の裏にも数台の駐車スペースがあったが、そこにもすでに車が

止められていた。
「なんだよ、いっぱいか。そこの脇に止めちまえ。大丈夫だろう」
マスミは警察署の建物の脇のわずかなスペースに車を止めた。
車外に出ると真夏の熱気がマスミとサカキバラ警部を包んだ。警部は暑いなあ――と、小さくつぶやき、A市警察署の入り口を目指し、足早に進んだ。マスミもその後に続いた。
警察署の入り口で待っていると、薄暗い廊下の向こうからコモリ刑事が歩いてくる姿が見えた。今日はまずA警察署での捜査状況を確認する予定でコモリ刑事にアポイントを取っていた。マスミとサカキバラ警部はほぼ時間通りにA警察署に到着していた。
「暑いところ、お疲れ様です」
長身のコモリ刑事がマスミたちを見て微笑んでいた。
「ああ、どうも」
サカキバラ警部は小さく頭を下げた。マスミはそれに合わせて目礼した。
「あちらに部屋を取ってあります」
コモリ刑事は廊下の方を指差しながら言った。
コモリ刑事は薄暗い廊下を歩いて突き当たりの部屋に入った。その部屋は事件があった日、A警察署を訪れた時に案内された部屋だった。
部屋にはむっとした熱気がこもっていた。コモリ刑事は入り口の壁のエアコンのスイッチを入れた。
「暑くてすみません。この部屋はあまりエアコンが効かないんですよ」
それぞれがパイプ椅子に腰掛けた。サカキバラ警部はハンカチで顔の汗をぬぐっていた。
「さっそくですが、タケダ・トモヒコはどんな感じでしょうか？」
サカキバラ警部はトモヒコの様子が気になるらしい。
そう――トモヒコが犯人であれば、この事件は単純なのだ。この男は物事を単純に簡単に終わらせるようと考える傾向がある。しか

しマスミは今回の事件が警部の考えどおりに進むとは思えなかった。
コモリ刑事は目を閉じ額に手を当てて、何か考え込んでいるような仕草を見せた。
「それが――まだ身柄を拘束していていろいろと話を聞いているのですが、ほとんど何も話さないのですよ」
「黙秘しているということでしょうか？」
「いやあ黙秘というか――精神的にかなりショックを受けている状態で――、ただ泣くばかりで――」
コモリ刑事は苦笑した。かなり困っているようだった。サカキバラ警部は腕組みをしながら、うーんとうなった。
マスミは思う。
もしトモヒコがやったのではないとしたら――。目の前に同級生、担任の教師の血まみれの姿を見れば、かなりのショックを受ける。ましてやトモヒコは十五歳の少年になのだ。
「それとカンベ中学のトモヒコと同じクラスの生徒にも聞き込みを行っていますが、どうやらタケダは――陰湿ないじめにあっていたらしいです」
「いじめ？」
マスミはトモヒコの顔を思い出しながらコモリ刑事に訊いた。
「そうです。かなり陰湿です。気になるのが――タケダをいじめていた生徒があのインターネットのホームページに書いてあった生徒らしいのです」
「えーとニノミヤ、サカタ、トウドウ、バンドウ、そしてイワタですね」
サカキバラ警部がポケットから取り出した小さな手帳を見ながら言った。
「そうです。まあタケダはクラスみんなから無視されていたらしいですが、主となっていじめていたのがそれらの生徒らしいのです」
マスミは胸が締め付けられるような感じがした。
いじめ――か。

マスミの脳裏に、また、タケダ・トモヒコの顔が浮かんだ。あの時のおどおどした態度も思い出した。
キモい。
そんな言葉がつい口に出そうになる。
外見だけで人の何が分るというのだろう。
本質は何も分らないのだ。マスミはそんなことは十分知っているつもりだ。そして多数の人も分っているはず――だと思う。
しかし理屈では分っているが人は外見で人を差別し、区別し、卑下し、愚弄する。
外見だけではない。親や兄弟、血液型、生まれた所――数え切れないほどの要素で人は人を差別し、区別し、卑下し、愚弄する。
マスミは自分の名前のことで幼少時に嫌な思いをしたことがある。おそらくトモヒコはマスミの経験なんかよりはるかに辛い思いをしたのだろう。
「そういえばタケダは何かこう気持ち悪いって言うか、ちょっと変わっている感じだったな。それでいじめか。まあ、よくあることだな」
サカキバラ警部が間の抜けた声で言った。
マスミは警部を睨みつけた。しかし警部はマスミの視線にはまったく気づかない。
「そうか！　いじめられた相手に仕返し――これは復讐か？　そういうことかもしれない」
突然警部は大発見をした科学者のように大きな声を出した。
「サカキバラ警部、そう結論付けるにはまだ早いかと思います。例のサイトをタケダが作ったということも確定していません。また例えそうだとしてもまだまだ証拠が不十分です。凶器も見つかっていません」
コモリ刑事は逸るサカキバラ警部を押さえるように右手を顔の前に上げて言った。
「警部、まあ落ち着きましょう。相手が少年です。慎重にいかない

と問題になりますよ」
　マスミも警部の方を見てなだめるように言った。
「そんなことは分ってるよ。俺はあくまで可能性のひとつを言ったにすぎないんだよ」
　サカキバラ警部は叱られた子供のようにうつむいていた。
「タケダ・トモヒコはどんないじめを受けていたのでしょうか？」
　マスミはコモリ刑事の方を見ながら訊いてみた。
「はあ――まだ私も詳しくは聞いていないのですが、なんでもクラス中から無視されていたらしいです。それに日常的に暴行されていたという証言もあります。特にサカタ・テツヤがタケダに暴行していたのだと――」
　コモリ刑事の話を聞いて、マスミは一連の事件の被害者やサイトに予告されていた生徒についてほとんど知らないことに気づいた。
「そう言えばまだ訊いていませんでしたが、ニノミヤやサカタらはどのような少年なのでしょうか？」
「おまえそんなことも知らなかったのか？今日の朝、被害者についてのレポートを渡しただろう。読んでいないのか？」
「はい、そのレポートは読みましたよ。住所、氏名、年齢、実家のこと、家族のこと。しかしわたしが知りたいのはそんな情報ではなく、学校ではどんな態度や生活をしていたかということです」
　マスミがそう言うとサカキバラ警部は黙ってしまった。　警部の顔が引きつった笑顔になっていた。
「そうですね。えーと、まず、ニノミヤですが、ご存知のとおり、ニノミヤ建設の社長の次男です。表向きは成績は優秀で素直な性格。教師の受けも良い。しかし裏ではかなり酷いことをしていたようです
　実質ニノミヤには誰も逆らえなかったみたいですね。彼のことについては聞き出すのに苦労しています。みんな話したがらないのですよ。相当恐れられている感じです。
　次に今回の被害者のサカタ。両親は離婚していて父親と兄と一緒に住んでいます。サカタは喧嘩が強くて乱暴で、ちょっと問題のあ

る、まあ不良と言いますか――そんな生徒です。あとこれはレポートには書かれていないことなんですが、彼の兄が指定暴力団の構成員です」
「ええっ！　サカタの兄が？」
サカキバラ警部が暴力団という言葉に反応した。マスミも少し驚いた。
「ええそうです。そのこともちょっと気になるのですが――まあ一応、県警の組織犯罪の方には言っておきました」
「うーん、聞いていなかったな。クワタ、署に帰ったら確認しておけ」
サカキバラ警部の顔が少し曇っていた。やっかいな問題を抱えてしまった時に見せる表情だった。
「あとトウドウとバンドウですが、サカタの不良仲間で、よく一緒に遊んでいたようです。イワタに関してはまだほとんど分っていません」
ようやくエアコンの冷房がその能力を発揮し始め、部屋の中に冷たい空気が流れるようになった。
コモリ刑事は黒色のシステム手帳をぱらぱらとめくって、その他の情報を探しているようだった。
「それで殺された教師、サトウなのですが――。教師からも生徒からも悪い話は出ていません。教育熱心で、真面目で、いわゆる『いい先生』ということでした。だから何故殺されなければならないのか、まったく想像できないと、みな口々にそう言っています」
そう――サトウは何故殺されなければならなかったのか？
マスミにもそれが引っかかる。
「その――学校側はタケダ・トモヒコがいじめられていた――いじめがあったということは認識しているのでしょうか？」
マスミはいじめの問題について確認する。
「いえ、まだそこまで聞き込みができていません。今回の事件といじめの関連性が明確ではありませんし――」

コモリ刑事の眉間に皺ができていた。今回の一連の事件といじめはどう考えればいいのだろうか？マスミには無関係のようには思えなかった。
「まあ、これからタケダへのいじめのことについても調査をしていこうかと思っています。それはそれで問題でもあります」
コモリ刑事はシステム手帳を閉じて黒縁の眼鏡をかけなおした。
「コモリさんありがとうございます。だいぶ内情が分ってきましたよ。あのインターネットのサイトについては県警の方で調べていますのでそのうち分ると思います」
サカキバラ警部がそう言って立ち上がると、コモリ刑事も立ち上がって軽く礼をした。マスミも慌てて立ち上がって頭を下げた。
コモリ刑事が扉を開けてマスミと警部が廊下に出た。薄暗い廊下は冷房がなく、ねっとりとした空気が肌に絡み付いてくる。
「クワタ、俺はもう少し話があるから、先に行って車出しておけ」
そう言ってサカキバラ警部はコモリ刑事に何か言って、奥の方に向かって歩き出した。コモリ刑事はマスミの方に軽く礼をしてサカキバラ警部に続いた。マスミはとりあえず一服しようと、喫煙所に向かった。

マスミは喫煙室の黄色く変色した壁を見ながらメンソールに火をつけた。ニコチンがマスミの体内に吸収され脳が開放される。
マスミは考える。
――今回の事件といじめの関連性が明確ではありませんし。
コモリ刑事の言葉と眉間の皺が頭に浮かんだ。
確かにそのとおりだ。
いじめていた生徒が被害者。
いじめられていた生徒の担任教師も被害者。
いじめられていた生徒がその現場にいた。
インターネットのサイトにあった犯行予告とも受け取れる『判決文』。

これらの事実はどう関連するのだろう。あるいは単なる偶然なのか？
マスミはしばらく考えたが糸口は見つからなかった。
マスミがタバコを吸い終わり喫煙室から出ると、サカキバラ警部が早足でマスミの方に向かってくるところだった。
警部はマスミを見つけると口を尖らせた。
「おい、車まわしとけって言っただろう。何やってんだ」
マスミはまさか警部がこんなに早く戻るとは思っていなかった。
「すみません」
一応、謝っておく。
「まったく――時間がないんだよ、時間が。タバコなんて吸ってんじゃねえ」
マスミは無言でA警察の入り口を出て裏の駐車場に向かう。サカキバラ警部はぶつぶつと言いながらマスミの後をついてきた。
太陽はまだ高く、夏の日差しはおそらく最高に強いだろう。マスミは一瞬眩暈がした。
たった一時間ほどの駐車だったが、マーク？のドアを開けると、むせ返るほどの熱気が溢れ出してきた。
「さあカンベ中学へ行くぞ。さっさとエンジンをかけろ」
サカキバラ警部はもう顔に汗をかいていた。

ある夏の日の冒険

昨日、サンタから私の携帯に電話があった。

ミツヤさん、カンベ中学に行ってみようよ――。

サンタはそう言った。

クワタ刑事からカンベ中学で起こった一連の事件を聞いた日の翌日のことだった。サンタはクワタ刑事からその話を聞いて、インターネットに公開されていた『判決文』のサイトのことを話した。サイトには事件の被害者の名前が公開されていた。

おそらくカンベ中学には警察がいて中に入ることはできないだろう。私はサンタにそのことを話したが、サンタはそれでもいいから行こうと言う。

私は気が進まなかったが、サンタが何を考えているのか、少し興味がわいた。事件の真相に近づいているのだろうか？

私はしかたなくサンタの誘いに乗ることにしたのだった。

サンタとは私の近所のコンビニで待ち合わせた。サンタは俺が誘ったのだから俺の車で迎えに行くよ――とそう言った。

私は無免許の少年が運転する車には乗りたくなかったが、結局サンタに押し切られるように了承してしまった。

私はアパートの近所の喫茶店で昼食を取り、コンビニの駐車場でサンタを待っていた。

コンビニの近くの公園からクマゼミの鳴き声が聞こえた。クマゼミの鳴き声は照りつける太陽の光の強さを増幅させ、私は脇の下から汗が滴るのを感じた。

今朝のニュースで見た天気予報では今日も気温が三十五℃を超えるでしょう――とそう言っていた。

じりじりと照りつける真夏の日差しとコンビニの駐車場のアスファルトからの照り返しに嫌気を感じていると、前の通りの交差点の方から真夏の空気を振動させるような大きな音がした。

これは――サンタの車の音だ。
そう思っていると、交差点を黄色い車が曲がってきた。
車高が低くまるでヒラメのような車だ。いつかこの車からサンタが降りてくるのを見たことがある。
黄色い車は恐ろしいほどのスピードで車体を滑らせながらコンビニの駐車場に入ってきた。ちょうど私の前に駐車スペースがあり、そこに突っ込んできた。私は一瞬轢かれるのではないかと思い、その場から逃げた。
コンビニの駐車場には他にも何人かの人がいたが、みな目を丸くし、放心していた。
黄色い車のドアが上に跳ね上がり、黒いTシャツを着たサングラスをした男が出てきた。
相変わらず黒づくめの格好をしたサンタだった。
「やあ、ミツヤさん、早いね」
駐車場にいた数人の人はサンタに注目していた。よく見るとコンビニの中で立ち読みしている人もサンタを見ていた。
「やあ」
私は少し恥ずかしくなって小さな声になっていた。
「しかし――いつも君は変な――っていうか、変わった車に乗ってくるね」
「変かな？この車も結構いいと思うけどなあ」
私は自動車部品を製造するメーカーに勤務しているが、自動車についてはほとんど知らなかった。私にとって自動車というのは移動手段であって、その形とか性能にはそれほど興味がなかった。あまり壊れなくて適度に快適であれば、それは移動手段として十分だった。
だから、今日サンタが乗ってきた車について、私はその良さがまったく解らない。
「まあいいから。とりあえず乗ってよ、ミツヤさん」
サンタは明るく言って黄色いヒラメのような形をした車に乗り込

んだ。
カンベ中学は私のアパートから一キロほど東にあった。サンタの黄色い車は平日の昼間のすいた県道を猛烈な速さで走る。私はサンタがアクセルを踏み込むたびに狭いシートに押し付けられ、後ろからの獰猛なエンジン音に耐えた。
「サンタ君もうちょっとゆっくり行こうよ」
私は必死な思いで言ったが、エンジン音と排気音、さらにカーステレオからのロックで私の声はかき消されて、サンタには届かなかった。
「スピード、出しすぎだって」
大声で叫ぶと、ようやくサンタが運転しながら私の方を見た。
「ええっ！　何？」
ちょうど信号が赤になり車の速度が落ちた。
「だから運転が乱暴すぎだよ」
私はやっとの思いでそう言った。この車では満足に会話もできない。
「そうだよ、そうだった、ミツヤさん。うん、この車はランボルギーニっていうんだ。イタリアの車だよ」
会話になっていない。信号が青に変わってまた強烈な加速度が私を襲う。小さなサイドウインドウから見える街の景色が歪んでいた。
サンタはカーナビを見ながら鼻歌を歌っていた。
A市内に入って県道を左折した。あの事件のあったパピヨンが左に見えた。パチンコ屋の看板がいくつもあった。もう少しでカンベ中学だ。
――目的地の近くです。
カーナビのアナウンスも私にはよく聞こえなかった。
車は急激に速度を落としかと思うと、今度は右折した。しばらく狭い道を走ってようやく停止した。低い車のサイドウインドウからはよく見えないが、カンベ中学に到着したようだ。
「ミツヤさん、カンベ中学についたよ」

サンタがのん気な声で言った。
私には煩いとしか思えないエンジンが止まった。どこか遠くへ行っていた私の意識がようやく私の中に戻ってきた。サンタの運転する車に乗るといつもこんな感じで、へとへとに疲れてしまう。
サンタはドアを開けて外に出た。私も呼吸を整えてドアを開ける。むっとした真夏の熱気が戻ってきた。
サンタの車はカンベ中学に向かう一本道の途中に停車していた。百メートルほど先に校門が見えた。校門の鉄の門は閉まっていた。さらにテープが張られている。関係者以外は立ち入り禁止らしい。殺人事件が起こったのは一昨日なので当然だろうと思った。
サンタは車のドアを閉め、すたすたと校門に向かって歩き出した。私は驚いて声を出す。
「おいサンタ君、どこに行くんだ。勝手に入っちゃまずいだろう」
サンタは私の声を聞くと立ち止まり、振り向きざまに言った。
「入っちゃだめかどうかを確かめてくる」
この男には校門に張ってあるテープが見えないのか？私は慌ててサンタの後を追って校門に向かった。
校門に続く道は少し上り坂になっていた。校門の前まで行くと、サンタは立ち止まった。鉄の黒い引き戸は閉められていて、黄色いテープが張ってあり、『立ち入り禁止』という白い厚紙があった。
「やっぱり中には入れないな」
サンタはそう言いながら校門から校庭を覗いていた。私もつい覗いてしまったが、予想に反して校庭には誰もいなかった。私は警察官がいると思っていた。
校庭の向こう側、向かって右側と左側に校舎が二つあった。校舎は南北に平行に建てられていた。殺人事件があったのは北側の校舎の屋上だ。私は今どの方角を見ているのか、解らない。どちらが北校舎なのだろうか？
「北校舎は右か」
サンタがつぶやくように言った。方向感覚が優れているようだ。

私はサンタの言葉を聞いて右側の校舎を見た。校舎はやや古く、白い壁にひびが見えた。三階建てで、私は東側から見ている。私の見ている壁には窓はひとつもなかった。屋上は見えない。

校門の右側には高い木が何本か見えた。私には木の種類は解らない。そして校門の右側にはどぶ川が見えた。どぶ川の向こう側は上り坂になっていて、その上に高い木があった。その木にもテープが張られていた。

いきなりサンタがどぶ川に沿って右の方に歩き出した。

私が呆然としていると、サンタはジャンプしてどぶ川を飛び越え、校内に向かって坂を駆け上がっていった。そう――校門は閉まっていて校内に入ることはできないが、どぶ川を越えた所には柵はなくテープが張られているだけなので、簡単に校内に入ることができる。

「ちょ、ちょっとまずいよ。サンタ君、サンタ！」

私はサンタの思いがけない行動にあたふたしてしまった。

サンタには私の声はまったく聞こえていないようだった。あっという間にどぶ川の向こう側の坂を上りきり、黄色いテープの前まで進んでしまった。私もサンタの後を追いかけ校門の右側に走り出した。

見上げるとサンタはテープの前で止まっている。

「おい、おまえ！」

少し高い男の声がした。

「こら、入るな。誰だおまえは」

今度は低い声が聞こえる。私はどぶ川を飛び越えサンタの背中を目指して坂を登った。坂を登りきってサンタの背後に立つと、そこには警察官が二人立っていて、私とサンタを睨みつけていた。

私は体が硬直してしまって、何か話そうとしたが、口がぱくぱくと動くだけで声が出なかった。

「ああ、すみません。校門から入れなかったんで――。何かあったんですか？」

サンタが惚けた声で言った。

「何かあったんじゃない。おまえらは何者だ」
サンタの声を聞いた背の低い方の警察官がすごんだ。
「いやぼくはこの学校の卒業生でちょっと懐かしくなって学校を見に来たんですが、校門が閉まっていて入れなくて、あれ？」
サンタはまた惚けた。よく見ると警察官の後ろにはパトカーが止まっていて、何人かの人が歩いていた。校門からは私たちの姿はちょうど死角になっていたようだ。二人の警察官は驚くほどの速さで距離をつめてきて、私たちの前に立ちはだかった。
「あれじゃない。そっちの人も！　何をしに来たんだ。ここは立ち入り禁止だ」
今度は背の高い方の警察官が私の顔を見てすごむ。
「はあそうですか。立ち入り禁止だって。帰ろうか」
サンタがそう言って私の方に振り向き、歩き出そうとすると、背の高い警察官はサンタの肩を掴んで、強引にサンタを引き戻した。
「いたたた――ちょっと何をするんですか？」
サンタは肩を押さえて大声を出した。
「怪しいな、おまえら、マスコミか？どこの者だ？」
背の低い警察官は私の方をじっと見ている。私はどう答えていいか解らずに黙ってしまった。
「ちょっと――痛いなあ。離してくださいよ。ぼくらはこの学校の卒業生で校舎が懐かしくなって見に来ただけなんです」
サンタはまだ言い訳をする。
「ちょっと身分証を見せていただけますか？」
背の高い警察官がサンタの肩から手を離して、その手を前に出した。
「身分証って何？」
サンタがまた惚けたような声を出すと、背の高い警察官は激高した。
「免許証でもなんでもいいからさっさと出せ」
どうやらサンタの黒づくめの服装とサングラスが私たちを怪しく

させているのかもしれない。私は多少慣れてしまってはいるが確かにサンタの格好は怪しい。くだらない写真週刊誌の記者だと思われているのかもしれない。
「ええっ！何で俺が身分証を見せなくてはならないの？何もしていないじゃん」
「今、入ろうとしただろう」
「まだ入っていないよ」
「いいから身分証」
そんな問答がしばらく続いていた。私がポケットから運転免許を出そうとした時、背後から声が聞こえた。

あんた達、何やってんのよ――。
振り返ると、ずんぐりした小太りの男とすらりとしたショートヘアの女性がどぶ川の淵に立っていた。
ずんぐりとした男は確かサカキバラという愛知県警の警部だ。
そして――すらりとした女性はクワタ刑事だった。
背の低い警察官はどぶ川の向こう側の二人を見て、はっとした表情になった。
「あっ、サカキバラ警部！」
その声を聞いて背の高い方の警察官もサンタの肩から手を離し直立した。
サカキバラ警部は二人の警察官に向かって言った。
「おいどうしたんだ。何をもめているんだ」
「はっ！この二人が校舎内に強引に入ろうとしたんで――」
「この二人はちょっとした関係者なのよ。我々とここで待ち合わせていたの」
クワタ刑事が言う。
二人の警察官は顔を見合わせて目をぱちぱちとさせていた。
「そうでありましたか。すみません。そういった連絡がなかったもので、てっきりマスコミかと――」

「いやあすまん。連絡が遅れていた。開放してやってくれ」
サカキバラ警部が穏やかな口調で言った。
「あんた達何やってんのよ。早く降りてきなさいよ」
クワタ刑事が私とサンタを睨んでいた。
「サンタ君」
私はサンタに声をかけて坂をおり、どぶ川を渡った。サンタはぶつぶつ言いながら私の後に続いた。
「どうもすみませんでした――」
サカキバラ警部はもう一度二人の警察官に向かって言った。それを聞くと警察官は校内に戻っていった。
「ちょっと、困りますよ。ミツヤさん」
私がサカキバラ警部の近くまで行くと、警部は苦笑いをしながら言った。
「すみません。本当にすみません」
私はサカキバラ警部に向かって頭を下げたが、サンタの視線は空の方を向いていて反省の色がない。
「あんたも謝りなさい」
クワタ刑事がサンタを睨みながら強い口調で言ったが、サンタは驚いたような不思議な顔をしていた。何故謝らなければいけないのか？　まったく解っていない。それを見たサカキバラ警部は引きつった笑顔になっていた。
「まあ、まあ、いいですよ。でもミツヤさん、探偵ごっこもほどほどにしてくださいよ」
「はあすみません」
「探偵ごっこって言うか、元々はこのおねえさんが――」
サンタが横から口を挟もうとしたが、クワタ刑事がサンタのわき腹に平手打ちをする。
「まったくしょうがないですね、このサンタは。この前の事件を自分で解決したと思ってちょっといい気になっているんですよ。ミツヤさんもこの男にそそのかされてしまって」

「え――何言ってるの？　あのサイトだって、俺が――」
クワタ刑事のチョップがまたサンタのわき腹に炸裂した。
「いいから、あんたは黙ってなさい」
その時、クワタ刑事のスーツのポケットからシャカシャカとした慌しい音楽が聞こえた。携帯が着信したようだ。その音を聞くと、サカキバラ警部はまた引きつった笑顔になった。
クワタ刑事はスーツのポケットから携帯を取り出した。
「はいクワタです。はあ、はあ――ええっ！そうなんですか。解りました」
クワタ刑事は携帯を閉じると同時、サカキバラ警部に向かって言った。
「警部、情報管理課からですが、あのサイトはタケダ・トモヒコのパソコンからアップロードされたということがほぼ間違いないということです」
「そうか――これで逮捕状が取れるか？」
その会話を聞いていたサンタがすかさず口を挟む。
「ちょっと待って。逮捕状はまだ早いよ」
私は慌ててサンタの口を塞いだ。
「いやなんでもないです。私たちはこれで帰ります。本当にすみませんでした」
サカキバラ警部とクワタ刑事の冷たい視線を浴びながら、私はサンタの手を取って、その場から離れ、車が止められてる小道に向かった。
「サンタ君、サカキバラ警部の言うとおりだよ。事件のことは警察に任せておけばいい」
私は歩きながらサンタに言った。サンタはのろのろと私の後を歩きながら何かぶつぶつと言っていて、私の言葉は耳に入っていないようだった。
正門の前の道にサンタの黄色い車が見えた。車の近くまで来ると、サンタは急に立ち止まり、ポケットからＰＤＡの端末を取り出した。

サンタはしばらくその小さなディスプレイを見てキーボードを操作していた。
「おいサンタ君、どうしたんだ？」
「ちょっと待って――ああ、そういうことになるのか！」
ＰＤＡでメールでも確認しているのだろうか？
「これはちょっと――まずいな」
サンタは眉をしかめている。
「何がまずいんだ？　君は何を知っている？」
サンタはＰＤＡをパタンと閉じて私の方を見た。黒いサングラスをしているため表情はよく解らないが、緊迫した雰囲気があった。
「ミツヤさん、あのサイトに予告されていたニノミヤ・トオル――。彼が危ない」
「危ないって？」
「危険なんだ。彼に何かが起こる可能性がある」
「でもさっきクワタさんが言っていたじゃないか。あのサイトはタケダ・トモヒコが作った。トモヒコは今警察にいるんじゃないのか？　だったら、もう彼には何もできないよ」
「いや違うんだ。そうじゃない。話せば長くなる。ミツヤさん、警察はニノミヤを保護というか守っているのかな？」
「さあ――どうだろう？　無事であることは確認したと言っていたような気がするけど――」
「ミツヤさん、あのおねえさんに訊いてみて！」
珍しくサンタの言葉が緊迫している。サンタが私に何かを頼むことなんてほとんどなかった。私は携帯を取り出しクワタ刑事に電話した。

――もしもし、ミツヤさん、今忙しいのよ。何か用？

――ニノミヤ・トオル？無事かって？

――　ええ警察では護衛ってほどのものじゃないけど、一応、目は光らせてるけど――。

――今どうかって？知らないわよ。でもダケダは警察にいるから、何かしようと思っても無理でしょう？

サンタは私とクワタ刑事の会話を聞いていたが突然車に乗り込みエンジンをかけた。私も驚いてサンタの黄色い車のドアを開けようとしたが、どうやって開けていいのか解らず、ドアノブを探していた。

そうしたら、私の顔をかすめる様に急にドアが上に跳ね上がった。サンタがドアを開けたようだった。

「ミツヤさん、時間がない。ニノミヤの家に行ってみよう。早く乗って！」

私は携帯を耳に当てながら、腰をかがめて助手席に体を滑り込ませた。それと同時に背後のエンジンが獰猛な雄たけびを上げ、車は猛烈に加速した。電話の向こうでクワタ刑事が何か言っているが、エンジンの音でその言葉はかき消された。

サンタは車を加速させながらカーナビを操作していた。私は携帯を切って胸ポケットにしまった。クワタ刑事には悪いと思ったが、この車の中で会話をするのは無理だ。

「うーん、一〇分くらいはかかるか」

サンタはカーナビの画面を見ながらつぶやくように言った。

「サンタ君何を慌てているんだ！　前を見て！」

車は細い道を結構なスピードで疾走していた。正確な速度は解らないが、制限速度をはるかに上回っているだろう。私は首筋から冷や汗が流れるのを感じた。

カンベ中学の前の細い道を左折し県道に出た。県道はそれほど混んではいなかったが、前に何台か車が走っていて車の速度が落ちた。私は少し安心してサンタに何故ニノミヤが危ないのかを聞こうと思

った。私が口を開こうとした瞬間、いきなり車が対向車線へ出たため、私は運転席にいるサンタの方に倒れ掛かってしまった。
サンタは前を走っている軽自動車を無理やり追い抜き、その前を走っているトラックもぶち抜いた。トラックは大きなクラクションを鳴らした。
「ミツヤさん、シートベルトしなきゃ」
私はサンタに言われてまだ自分がシートベルトをしていないのに気づいた。あまりにも唐突な加速と無謀な運転で私はシートベルトをするのを忘れていた。
「サンタ君、シートベルトというか――そんな問題じゃない！　危ないよ、危ない」
私は大声で叫んだが、サンタには聞こえていなかったのだろう。その後も強引な運転は続いた。サンタの車は片側一車線の県道でいったい何台の車を追い抜いたのだろうか？　私は途中から気が遠くなりよく覚えていない。
「七分で行けそうだな」
サンタの言葉どおりなら七分間だったのだろう。しかし私にはもっともっと長く感じた。とてつもない加速と唐突にくる横への動き、そして今にも事故を起こしてしまうのではないかという不安感で、私は疲れきってしまった。
しかしその後、私はもっと過酷で凄惨な経験をすることになるのだった。

リベンジ　その4

アカい――。
目を閉じるとトモヒコの脳裏に赤色が広まった。

アカい――。
それは、血の色。
サカタ・テツヤの首から滴る血の色。
トウドウ・ミノルの――バンドウ・キョウコの腹から滴る血の色。

アカい――。
それは鮮やかな赤。そんな赤はこれまで見たこともなかった。
その赤が足元からトモヒコを飲み込んでいく。トモヒコの体が、赤く染まっていく。

もう嫌だ。赤は嫌いだ。
トモヒコがそう叫ぶと目の前が突然明るくなって、赤が消えた。
目を開くと黒縁の眼鏡をかけた男の顔が見えた。男は心配そうな顔をしてトモヒコを見つめている。
机とパイプ椅子があるだけの狭い部屋。蛍光灯の鈍い光が濃い茶色の机を照らしている。
「どうしたんだ？大丈夫か？」
眼鏡の男がトモヒコに声をかけた。男はコモリという名前だった。
そう――男は刑事でトモヒコは今、警察署の中にいる。
「すみません」
トモヒコはコモリ刑事の顔を見ながら謝った。ここへ来てもう何度謝ったのだろう。数え切れなかった。
タケダ・トモヒコは自分のまわりに何が起こっているのか、本当のところ、まったく分らなかった。

北校舎の屋上――。
赤い血溜まりの中でサカタが死んでいた。
それはいつのことだっただろうか？

パピヨンの駐車場――。
トウドウとキョウコが刺された。
それはいつのことだっただろうか？

学校の近くの倉庫――。
ミドリが倒れていた。
それはいつのことだっただろうか？

自分のまわりに何かが起こっている。何故こんなことになってしまったのだろうか？　本当にまったく分らない。
何人もの大人、おそらく刑事だと思うのだが――が次々とこの狭い部屋にやってきた。刑事達はトモヒコにあれこれと細かい質問を浴びせた。言葉は優しかったが、トモヒコが答えに詰まるといつまでも、何回も、同じ質問をした。決して待ってはくれなかった。
トモヒコは自分が何を言っているのか、何を言ったのか、もう分けがわからなくなってしまった。

――本当にそうなの？　もっとよく思い出してみようよ。

――それはおかしいだろう。そうじゃないよね。

――君がやったんじゃないの？

違う、違う、ぼくじゃない。ぼくは本当に何もやっていないんだ。
トモヒコは涙を流しそう言ったが、刑事達は納得していないよう

だった。

突然、部屋のドアが開いて頭の薄い小太りの男が入ってくると、その男がコモリ刑事に耳打ちした。コモリ刑事はその小太りの男と目を合わせて一瞬笑った。

「タケダ君、あのインターネットのサイトのこと、君は知らないと言っていたよね」

コモリ刑事がトモヒコの方に身を乗り出して言った。

トモヒコは黙っている。インターネットのサイトとはいったいなんだろう。トモヒコの記憶には残っていなかった。

「君は知らないと言っていたけど、調べれば分るんだよ。インターネットのプロバイダのログってのがあってね。君の家のパソコンからあのページが作成されたことが分かった。君が作ったんじゃないか」

コモリ刑事の口調は優しかったが、眼鏡の奥にある目はトモヒコを睨んでいて、その顔は鬼のようだった。

「サイトって何ですか？」

トモヒコが小さな声で言うと、その言葉にかぶせるように、コモリが少し大きな声で言った。

「だから、あの『判決文』だよ。君が作ったんだろう？」

そうだった。インターネットにそんなサイトがあったとコモリ刑事は言っていた。しかしトモヒコにはまったく覚えがない。

「知りません。ぼくはそんなの知らない」

また涙が溢れてくる。トモヒコは知らない、知らないと言って、机の上に伏せてしまった。

「いいかげんに惚けるのはやめたらどうだ」

コモリ刑事の口調が厳しくなった。しかしトモヒコはただ泣くばかりだった。

「あの『判決文』は五月三日の午前二時にアップロードされている。そのサイトのログに残ったＩＰアドレスは君の加入しているプロバ

イダのものだ。そしてそのプロバイダのログには君のパソコンからのアクセスが残されている。これはもう君がアップロードしたとしか考えられないんだよ」
　トモヒコにはコモリ刑事の言っている言葉の内容がよく理解できなかった。しかしその『判決文』を作ったのがトモヒコだとしたら、サカタを殺したのも、トウドウやキョウコを刺したのも、トモヒコだということになってしまうのだろうということは分かった。
　いったいどういうことだろう。トモヒコの体を恐怖が駆け抜ける。
　これは現実なのだろうか？　自分はとてつもない悪夢をみているのではないだろうか？　そう思いもした。
　しかし顔を上げると厳しい表情をしたコモリ刑事がいた。トモヒコの方をじっと睨むようにして見つめている。頭はぼんやりとしているがこれは現実なのだ。
「違います。ぼくはそんなサイトなんか知らない。『判決文』なんか書いていない」
　トモヒコは顔を上げて必死になって叫んだ。このままでは自分が殺人犯にされてしまう。
「でも事実は事実だ。タケダ君、事実は曲げようがない」
「誰か他の人がやったんだ。誰かがぼくのパソコンからアクセスしたんだ」
　トモヒコは苦し紛れにそう言ってみた。
「誰かって、誰だ？君の部屋に忍び込んでパソコンを操作したのか？　そんなことがあると思うか？」
　トモヒコは何も言えなかった。しかし他に説明のしようがない。
「君がニノミヤ達からいじめられていたことは分かっているんだ。学校で無視されていたことも知っている。だから――、だからだろう？」
　だから何だと言うのだ。だからトモヒコがやったと言わせたいのだろうか？
　心の奥から悲しみがやってきた。涙が溢れて茶色の机の上にぽた

ぽたと音を立てて落ちた。

誰か――助けて――。

サトウ先生の顔が浮かんだ。しかしサトウ先生も死んだのだ。

トモヒコは必死になって救いを求めたが、この狭い部屋の中に救いなどなかった。

胸がきりきりと痛んだ。心臓が激しく鼓動した。しかしコモリ刑事はトモヒコをじっと見たまま言葉を待っている。

誰か――助けて――。

トモヒコは声にならない叫びをあげた。

その時、また部屋のドアが開いた。今度は二、三人の刑事がバタバタと部屋に入ってきた。

「おい、コモリ！」

年配の太った男が低い声でコモリ刑事を呼んだ。

「どうしたんですか？警部」

「ちょっと、来い！まずいことになった」

「まずいことって？」

「いいから来いって」

年配の男がコモリ刑事の腕を取って部屋から出ようとした。コモリ刑事は、何ですか――と言いながら、バタバタと部屋を出て行った。

――ええっ！　ニノミヤが刺された？

部屋の外からコモリ刑事の声が聞こえた。

ニノミヤが刺された――。コモリ刑事の声は確かにそう言った。

急に部屋の外が慌しくなった。椅子が床を滑る音。刑事達の緊迫

した声。ばたばたと部屋を出て行く足音。

ニノミヤ・トオルが刺された？
ニノミヤ・トオルは――。
ニノミヤ・トオルは死んでしまったのだろうか？

あのニノミヤの悪魔のような顔が浮かんだ。
しかしトモヒコは次々と起こる予想もしない出来事についていく
ことができず、それ以上何も考えられなかった。

夏草の記憶

閑静な住宅街の一角に夏草が茂った広場があった。
濃緑色の夏草が生い茂っていた。どんな種類の草なのかは解らないが、私の腰のあたりまで細長い葉が幾重にも重なり合っていた。
青い空とわずかばかりの白い雲。太陽の光は夏草の緑を浮き立たせていた。
植物の生々しい匂いがして、一瞬、眩暈がした。
その広場の中ほどに小さな子供が立っていた。夏草の間からその子供の顔だけが見えた。
その顔は子供とは思えないほど、険しい。
眼光が鋭く、足元の何かを睨みつけている。
私たちが近づくにつれて、その子供の体が夏草の間から見えた。
白いシャツに、赤い斑点が――。
ああ、これは――？
血だ！
血しぶきだ。その子供の白いシャツに血しぶきがあった。
前を歩いていたサンタが道路のアスファルトを蹴って、急に走り出した。
その時、血しぶきを浴びていた子供がすっと手を上げた。
きらりと手が光った。
ああ、ナイフか？いや小さな刀？
その子供は手に刃物を持っていた。
そしてその手をゆっくりと振り下ろした時、どすんという鈍い音がした。
痛っ――という声がして、子供の手から刃物が落ちた。その子供の恐ろしい眼光は私の前を走っているサンタに向けられていた。
どうやらサンタが小石か何かを子供に向かって投げつけたようだ。
それは子供の手首あたりに命中して、その子供は刃物を落とした。

今思うと映画か漫画のようなシーンだった。
その子供がサンタを見た瞬間サンタは空中を舞っていた。サンタはそのままその子供にタックルして倒した。
「ミツヤさん、こっちへ来て」
バタバタする子供を押さえながらサンタが言う。
私は慌てて夏草が茂る広場へ入って行った。
そこに――そこにもうひとり少年が夏草の上に仰向けに倒れていた。
少年はグレーのシャツを着ていたが、そのシャツの左側が黒く染まっていた。少年の周りの夏草も血しぶきを浴びていた。
少年の左の首筋からどくどくと赤い血が溢れだしている。
ぜいぜいと、苦しそうな息遣いが微かに聞こえた。私は呆然として体が硬直してしまった。
「ミツヤさん何やってんの！　救急車！　救急車呼んで」
サンタが小さな子供を羽交い絞めにしながら言った。
私は慌てて携帯を取り出し一一〇に電話した。
首を切られた少年はニノミヤ・トオルなのだろう。
そして首を切った子供は――いったい何者なのだろう？
私はニノミヤの首から溢れる血を見ながら、そんなことを考えていた。
いつの間にかサンタがニノミヤの近くにやってきた。小さな子供の方を見ると、手首を縛られて夏草の上に転がっていた。
「こりゃだめかな。出血が酷い。頚動脈まではいってない――と思うんだけど」
サンタはそう言って、着ていた黒いシャツを脱いでニノミヤの傷口にあてた。
「おい大丈夫か？　って大丈夫じゃないよな。とにかくがんばれ」
ニノミヤの意識は朦朧としているようで、サンタの言葉には反応しなかった。
それにしても人間の体にこんなにもたくさんの血が――。

こんなにも大量の血が――。
眩暈がした。
私はついに立っていることができなくなり夏草の上に倒れこんでしまった。
「ちょっとミツヤさん大丈夫？」
サンタがニノミヤの元から離れ、私の隣に座った。私は何とか状態を起こし、膝を抱えてサンタの方を見た。
この少年はこんな時にもいつもと変わらずに落ち着いている。まだ十五歳のはずだ。それに比べて私は――血を見て倒れこんでしまった。自分が情けなくなった。
「いやちょっと眩暈がしただけだ。大丈夫」
私は少し強がってそう言った。
「じゃあミツヤさん、そっちの子供逃げないように見てて」
サンタはそう言って血まみれのニノミヤの脇に戻った。
私は両手を後ろで縛られ夏草の上でもがいている子供のもとに行った。
小学生、それも低学年。おそらく十歳になるかならないか、そんな子供だ。この子がニノミヤをやったのか？そもそもこの子は何者なんだ？
「サンタ君、この子はいったい何なんだ？この子が何故ニノミヤを？」
サンタはニノミヤの傷口を見ていたが、私の声に気付くと空を見ながら言った。
「その子はサトウ・キヨシ――サトウ先生の子供だよ」
「サトウ・キヨシの子供？　サトウ・キヨシというのは一昨日カンベ中学で殺された――？」
「そうだよ。俺もついさっきそれを知った。そしてサトウを殺したのがここに倒れているニノミヤ・トオル」
サンタはニノミヤの方を見ながら悲しそうな声で言った。
「ニノミヤがサトウ先生を殺した？　それはどういうことなの？」

私は頭の中が混乱してサンタの話についていけない。
いつの間にかニノミヤのぜいぜいとした息遣いが消えていた。ニノミヤは目を閉じていてまったく動かない。
「おい、ニノミヤ・トオル！おまえがサトウ先生をやったんだよな？」
サンタがニノミヤの耳元で大きな声で問いかけた。
「サンタ君――」
「おまえがやったんだろう？」
サンタがもう一度言うと、ニノミヤが微か頷いたような感じがしたが、声を発することはなかった。
その時、通りの方から救急車のサイレンが聞こえた。
「うーんちょっと遅いかな。出血が多い。もうだめかもしれない」
サンタがまた悲しそうな声でつぶやいた。
「サンタ君いったいどうなっているんだ？」
私がもう一度サンタに訊いた。
「いや、話せば長くなるんだよね。後で話すよ」
サンタの言葉が終わると、三、四人の救急隊が広場に入ってきた。救急隊は白い担架を持っていた。
「ご苦労様！　うわっ！　これはまずいぞ。急げ」
眼鏡をかけた男がそう言うと、救急隊員はあっという間にニノミヤを担架に載せて救急車まで運んでいった。
私とサンタは何もすることがなく、ただその様子を見ていた。
「こちらの子供は？」
いつの間にかパトカーも広場に到着しており、警察官が私の近くまで来て、夏草の上でもがいている子供を見ながら言った。
「ああ、犯人です」
「犯人？」
「そうです。その子がやったみたいです」
「この子供がやった？」
警察官が目をパチパチとさせていた。私の言葉を信じていないよ

うだ。それは無理もないことのように思えた。私もこの子供が刃物を持って広場に立っていたのを見ていなければ、とても信じられない。

「ちょっとその辺のことを詳しく聞かせてもらいましょうか？」

背後から別の男の声がした。どこかで聞いたことのある声だった。振り返るとサカキバラ警部が引きつった笑顔をしながら立っていた。その隣にはすらりとした長身の女性――クワタ刑事がいてサンタの方を見ていた。

「ミツヤさんと――そこの！　おい、おまえよ、おまえ」

クワタ刑事がサンタの方に向かって乱暴な口調で言った。サンタがクワタ刑事の声を聞いて振り返った。

「やあお姉さん。遅かったね」

「遅かったじゃなくて。ミツヤさんとサンタ――ちょっと事情を訊きたいので署まで同行願いますか？」

まるでドラマの刑事のような台詞だが、クワタ刑事は真剣な表情をしていた。これは現実なのだ。私は体中が緊張するのを感じた。

「はあ――俺、警察嫌いなんだよなあ」

サンタの言葉にはまったく緊張感が感じられなかった。

「いいから来るのよ」

クワタ刑事がサンタを睨みつけていた。

クワタ刑事は私とサンタを白い車まで連れて行き、後部座席に乗るように言った。その車はクワタ刑事とサカキバラ警部が乗ってきた愛知県警の車らしかった。

ニノミヤ・トオルを載せた救急車は走り出すと同時にサイレンを鳴らした。静かだった夏の街に赤い光とサイレンの音がやってきて、急に騒がしくなったような気がした。

私は愛知県警の車の後部座席からその救急車が発進するのを見ていた。

サカキバラ警部が救急車が止まっていた辺りから走ってきて、助手席に乗った。

「出血がすごいよ。動脈までいったんじゃないか？」
警部が運転席に座っているクワタ刑事に言った。クワタ刑事は黙ってハンドルを握っていた。
「ニノミヤは――ニノミヤは助かるでしょうか？」
私は助手席のサカキバラ警部に訊いてみた。警部はハンカチで顔の汗を拭きながら一瞬私の方を見て言った。
「さあどうでしょうかねえ」
警部の態度はどこか投げやりな感じがした。
私はその言葉を聞き、おそらくニノミヤ・トオルは助からないのだと思った。そう思った瞬間、あの『判決文』が頭に浮かんだ。黒いバックに赤い文字で書かれた『判決文』。
ニノミヤが死んだら判決文のとおりだ。
あの判決文は執行されたことになる。いったい誰が書いたのか解らないが刑が執行された。
そう思うと、背筋が冷たくなって、汗が引いた。
クワタ刑事は救急車の後を追いかけるかのように、県警の車――古い型のマーク？を発車させた。
「お姉さん、どこに行くの？」
サンタが運転するクワタ刑事に声をかけた。
クワタ刑事の代わりに助手席に座っているサカキバラ警部が答えた。
「A市の警察署で話を聞くことになっている。今回のカンベ中学の事件を担当している刑事も同席してもらう」
サカキバラ警部はゆっくりとした口調で話した。車内には重苦しい空気が満ちていた。
「それにしても、あんた達――何故ニノミヤが刺されるって知ったの？　それにあの子供はいったい誰？　そもそも何故ニノミヤが刺されるの？　それに…」
クワタ刑事の口からマシンガンのように次々と質問が飛び出した。
あんた達っていうことは、私にも問うているのだろう。しかしそ

れらの質問に私は答えることができない。
そう――私はサンタの後についてきただけなのだ。すべてはサンタが知っている。
「おいクワタ。まあ今はやめとけ。署についてからゆっくりと話そう」
サカキバラ警部がまたゆっくりとした口調で言った。クワタ刑事はそれを聞くと無言になった。
車は一〇分ほどでA警察署についたようだった。いつの間にか太陽が西の空に見えて夏の日差しが弱まっていた。

ある夏の日の解決

A警察署の建物は古臭く暗い雰囲気が漂っていた。
私とサンタはクワタ刑事の後に続いて警察署に入り、薄暗い廊下を歩き、二階へあがった。
警察官や刑事と思われる人が忙しそうに署内を歩いている姿を見かけた。おそらくニノミヤが刺されたことと関係があるのだろう。
私たちは二階の廊下を少し歩いて、突き当たりにある小さな部屋に入った。机とパイプ椅子が六脚、それにホワイトボードがある会議室だった。
サカキバラ警部は廊下を歩いている途中で大部屋の方に消えていった。
「適当に座って」
クワタ刑事がホワイトボードの近くの席に座りながら言った。
「何か最近警察に呼び出されてばっかりなんだよなあ」
サンタがぶつぶつ言いながらクワタ刑事の前に座った。サンタは座るとサングラスを取ってテーブルの上に置いた。私もサンタの隣に腰を下ろした。
「さあて、話してもらうわよ。後から警部が来るけど、時間がないのですぐに始める」
そう言ってクワタ刑事はホワイトボードの下に置いてあったペンを取り、キャップを外し、しばらく考えて、ボードを叩くように何かを書き出した。

1. ニノミヤ・トオルを刺した子供

白いボードに黒い右上がりの文字。クワタ刑事の外見からは想像できない悪筆だった。私は一瞬何が書いてあるのか解らなかった。
サンタも同じらしく、しばらくホワイトボードを見つめていた。

「ああさっきの子供か。あの子はサトウ先生の息子だ」
サンタは小さな声で言った。
「サトウ先生って一昨日カンベ中学で殺されたサトウ・キヨシのこと？」
「そう、そのサトウ」
「何故サトウ・キヨシの子供がニノミヤを刺すのよ」
「そりゃあ刺すよ。だってサトウ・キヨシを殺したのが、おそらくニノミヤだから――。リベンジだね。復讐だよ」
サンタはいとも簡単に思いがけないことを言った。
「サンタ君、君はさっきも言っていたが本当にニノミヤがサトウを殺したのか？　あの校舎の屋上でか？　いったいどうやって？」
私はまた頭が混乱する。一昨日、カンベ中学の北校舎の屋上で起こった事件を必死になって思い出したが、解らない。
クワタ刑事も同様でサンタの言葉の意味が解っていないらしく、じっとサンタの顔を見ながら考え込んでいた。

1．ニノミヤ・トオルを刺した子供
↓サトウ・キヨシの息子
理由：復讐

2．サトウ・キヨシを殺した犯人
↓ニノミヤ・トオル

クワタ刑事が無言でホワイトボードに書き込む。そしてサンタの方に振り返り言った。
「よく解らない。一昨日北校舎の屋上で何が起こったの？　詳しく話なさい」
「ちょ、ちょっと待ってよ。お姉さん。俺も見たわけじゃないから。これから話すことは俺の想像――」
「そんなことは解っているわよ。想像でいいから話なさい」

前回のヨウコさんの事件の時もそうだった。サンタの想像は結果的に正しかったのだ。それはクワタ刑事も解っている。
サンタが話そうとした時、部屋のドアが開いてサカキバラ警部と四角い眼鏡をかけた若い男が部屋の中に入ってきた。
「おお、もうやってるのか。こちらがA警察署の少年犯罪担当のコモリ刑事」
サカキバラ警部がそう言って私にコモリ刑事を紹介した。
「こちらが先ほどの事件の第一発見者のミツヤさんとサンタ君だ」
私は慌てて立ち上がり頭を下げた。
「私は少年犯罪の担当をしておりますコモリといいます。このたびは捜査にご協力いただきありがとうございます」
コモリ刑事は丁寧に挨拶をした。サンタは座ったままぼんやりとしていたが、私がサンタのわき腹をつつくと、めんどくさそうに頭を下げた。
「まあ座ってください。続きをやりましょう」
コモリ刑事はそう言って、私の前に座りながらホワイトボードを見た。サカキバラ警部もコモリ刑事の隣に座った。
「ええっ！　サトウ・キヨシの息子？」
二人はほぼ同時に叫んだ。そして次の言葉もほぼ同時だった。
「ニノミヤがサトウを殺したって？」
「いったいどういうことだ？」
今度は三人、いや私も含めて四人がサンタに問いかけた。
サンタは目をパチパチとさせていた。まるでサンタが犯人で、尋問を受けているようだったかもしれない。
「さっきも言ったんだけどこれは俺の想像だから――ニノミヤが死んだら、もう誰にも真実は解らないよ」
サンタはまずそう言った。
私は先ほど血まみれになったニノミヤにサンタが言っていた言葉を思い出した。

――おい、ニノミヤ・トオル！　おまえがサトウ先生をやったんだよな？

ニノミヤは最後に微かに頷いたような気がした。サンタは自分の想像の正しさを確認していたのだろうか？

「えーと、どこから話そうかな。まず一昨日のカンベ中学の北校舎での事件かなあ。いや『判決文』か！　それがいい」

サンタはそう言って椅子から立ち上がり、ホワイトボードの前に進んで、置いてあったクリーナーを取ってクワタ刑事の書いた文字を消した。

クワタ刑事はえっ！と小さく言って、口を開けたまま固まった。

サンタは左手で青いペンを取って驚くべき速さでホワイトボードに書き出した。あっという間にホワイトボードは青い文字で埋まっていく。その文字はまるで活字のように整っていて、クワタ刑事の右上がりの文字と違ってとても読みやすかった。

主文

・被告人ニノミヤ・トオルを死刑とする。。
（今日のニノミヤの家の近くの広場での事件）
犯人：サトウ・ノリオ（サトウ・キヨシの息子）
↓本来はサトウ・キヨシが実行する予定だった

・被告人サカタ・テツヤを死刑とする。
（カンベ中学北校舎屋上での事件）
犯人：サトウ・キヨシ

・被告人トウドウ・ミノル、バンドウ・キョウコに肉体的苦痛をあたえるものとする。
（パピヨンの駐車場での事件）
犯人：サトウ・ノリオ（サトウ・キヨシの息子）

・被告人イワタ・ミドリには性的な苦痛をあたえるものとする。
（事件があったはず）
犯人：サトウ・キヨシ（だと思う）

例外：
サトウ・キヨシの死（カンベ中学北校舎屋上での事件）
犯人：ニノミヤ・トオル

「これが、今回の一連の事件の被害者と犯人だと思う。どう？　わかりやすいでしょ？」
サンタは青いペンをテーブルの上に置いて、私たちひとりひとりの目を見ながら言った。
クワタ刑事もサカキバラ警部も、そしてコモリ刑事もじっとホワイトボードを見ていた。私もホワイトボードに書かれた文字を食い入るように見た。
最初に口を開いたのはクワタ刑事だった。
「ちょっと、全然、解んない！タケダは？　タケダ・トモヒコはどこにいったのよ！」
「タケダ・トモヒコは事件にはまったく関係ない。今回の一連の事件はサトウ・キヨシがニノミヤとサカタを殺すために企てた計画だよ。でも最後に計画が狂って、逆にニノミヤがサトウを殺すことになった。それで話がややこしくなったんだよなあ」
サンタは腕組みをしてホワイトボードを見ながらひとりで頷いた。
「サンタ君、今度は事件のことを――それぞれの事件のことを話してくれないか？」
コモリ刑事が切迫した表情をしながら言った。タケダが事件に関係ないとしたら、警察は無実な少年を逮捕しようとしていることになる。
「解りました。えーと今日の事件はいいよね？そのまんまだから」

「まあ、それはいいわよ。カンベ中学の屋上の事件は？　サカタを殺したサトウが死んでいたじゃない？　ニノミヤが屋上にいたの？
屋上にいたのはタケダでしょ。そこはどうなのよ」
クワタ刑事が軽くテーブルを叩いた。かなりいらいらとしている。
「おそらく――。
一昨日、サトウはまずニノミヤとサカタをカンベ中学の北校舎の屋上に呼び出したと思う。ただし呼び出したサトウは身分を明かしてはいないはず。
どういう手段をとったのか？　たぶん、メールだと思う。まあそれは後から警察の方に調べてもらうとして――。
まずニノミヤとサカタの二人を学校に来るように仕向けた。パピヨンの事件のことで話がある――なんてことを言ったのだろうね。パピヨンの事件ってのはニノミヤとサカタにとってある意味脅威になっていたから。
そしてその事件にタケダ・トモヒコが絡んでいるなんてことを吹聴したのかもしれない。
さらに、ニノミヤとサカタから一時間くらい遅れて、タケダも学校に来るように仕向けた。これはもしかしたら、ニノミヤかサカタを通じてタケダを呼び出したかもしれない」
夕日が西の空に沈んで部屋の中は薄暗くなってきた。クワタ刑事が席を立ち、入り口の近くにあるライトのスイッチを押した。
「それで――サトウは何故別々に三人を呼び出したの？」
クワタ刑事がいらいらした口調で言った。
「何故別々に呼び出したかというと――それは、タケダをこの事件の犯人に仕立て上げるための準備だ。ニノミヤとサカタ、二人の死体とタケダを密閉された空間に存在させるため。その手順はこうだったと思う。
サトウはあらかじめ屋上の扉を塞ぐ机とかダンボール箱を屋上に持っていき、扉のある建物の裏側あたりに隠しておいた。もちろん凶器の刃物――おそらく脇差のようなものも隠し持っていた。

そしてニノミヤとサカタが屋上にやってくる。サトウは二人の首を切って殺すつもりだった。サトウは武道の心得があったんだ。
最初に屋上の扉を開けて外に出てきたサカタに切りつけて、そして次にニノミヤ――これが失敗した。
何か想定外のことが起こったのだと思う。とにかく失敗してもみ合いになった。その結果逆にニノミヤがサトウを刺してしまった」
サカキバラ警部がごくりと唾を飲み込んだ。コモリ刑事はハンカチを取り出して額の汗を拭いていた。
サンタの話の続きが気になってすっかり忘れていたが、この狭い部屋はエアコンが効いていなくてかなり温度が高くなっていた。私の額にもうっすらと汗が滲んでいた。
「ニノミヤは驚いたと思う。いきなりサトウ先生が襲ってきて、サカタを刺して、さらに自分がサトウ先生を刺してしまった――。
誰もいない屋上に二人が血を流して倒れている。尋常ではない状況。
誰かに知らせたいのだけど、ニノミヤにはそれができなかった。
何故か？
ニノミヤはサトウ先生に恨まれて、殺されるようなことをしているから。それに自分がサトウ先生を刺してしまった。
冷静に考えれば正当防衛になるのかもしれないけど、ニノミヤはそこまで、考えられなかった。
でも、彼は屋上に仕掛けられたトリック――本来、サトウが二人を殺して屋上から脱出するために準備していた手段に気付いたんだ。次に屋上に来た人物に罪をかぶせる手段」
私にはサンタの言葉の意味が解らなかった。
その手段とはいったいどういうことなのだろう。
「ニノミヤはサトウの企みを理解して、それをそのまま実行したんだ。彼はずる賢いって言うか、ある意味頭の回転が速い。
まず屋上の扉を閉めて置いてあったダンボールとか机を扉の前に置いた。屋上の扉は屋上に出るときに押すタイプになっていたよね。

後から屋上に来たタケダはこのバリケートのために中々屋上に出ることができなかった。
そしてニノミヤはもうひとつの仕掛けも見つけていた。それは、屋上の柵から北校舎の近くの高い木に結ばれたロープ」
「ロープだって？」
コモリ刑事がサンタの方を見ながら大きな声を出した。
「そう――サトウは屋上の柵から近くの高い木、確かクスノキかな？　今日、カンベ中学に行って確かめたんだけど、その木の枝が北校舎の屋上の近くまで伸びていたんだ。おそらく二メートルくらい、三メートルまでは離れていなかった。
サトウはまずその木に登って、適当な枝にロープを結んで、もう一方に何か重りをつけて、北校舎の屋上に投げておいた。そして屋上に上がってそのもう一方を柵に結んだ。
あの木は枝が生い茂っていて、下から見ただけではそのロープは全然見えない。夏休みで学校に人が少ない。それでロープには誰も気付かなかった。
サトウ先生は二人を殺した後、そのロープを伝ってクスノキに移って、校庭に下りるつもりだった。
そしてニノミヤはその企みに気付いてそのまま利用した。もちろん凶器の刃物もしっかりと持っていたんだ。これで屋上はまるで密室のようになった」
「ちょっと待って！　そのロープはどうするのよ。屋上にはロープなんてなかった。どうやって回収したのよ？」
クワタ刑事が納得のいかない顔をして言った。
「たぶんロープを輪にしていたんじゃないかな。一箇所切ればすべて手元に回収できるような工夫をしていたと思う」
クワタ刑事は目を閉じて考えているようだった。
私も必死に想像してみる。そう――カンベ中学の校庭には高い木が生えていた。枝は北校舎の屋上の付近まで伸びていただろうか？
そう言われてみると、そんな気もした。

ロープを輪にして屋上の柵に引っ掛けて、もう一方をクスノキに結ぶ。屋上の柵がどのようなものなのか解らないが、柵側が固定されれば何となくできそうな気がした。
クワタ刑事もサンタの言葉で納得したらしく、反論することはなかった。
「それでニノミヤは何とか屋上から逃げ出したんだ。その後、タケダが屋上に行くことになる。扉を開けようとしたら、ニノミヤの作ったバリケードがあって中々扉が開かない。強引に開けたその音で近くを通っていた教師が不審に思って屋上へ行った。そうしたらタケダと血まみれのサカタ、サトウが倒れていた。
細かい部分では違っているところがあるかもしれないけど、一昨日の事件の構成としてはそんな感じだと思う」
サンタは話し終えると、得意げな表情をしてホワイトボードを見つめていた。
サカキバラ警部がうーんと低く唸った。
コモリ刑事は深い溜息をついた。私もそれにつられて溜息をつく。
部屋の重い空気を切り裂いたのはクワタ刑事だった。
「あんたねえ、よくもまあ、想像というか、空想というか、どこからこんな話が出てくるのよ。いったいどういう頭の構造をしているの？」
あきれたようにクワタ刑事が言った。
「えーとそれは俺を褒めてるの？　貶しているの？」
「その両方よ。いい？　まず根本的に何故サトウはニノミヤとサカタを殺すほど恨んでいたのよ。それが解らない。そもそもそれがなかったらあんたの話はまるっきり成り立たない」
「ああそうか。そりゃそうだな。そこをまだ話してなかった。
まず俺が今回の事件で不自然に思ったのはサトウ・キヨシの死だ。『判決文』にはサトウのことは何もかかれていなかったよね。タケダが犯人であるとしたらサトウの死が説明できない。それでお姉さんから事件のことを聞いた次の日、サトウ・キヨシのことを調べた

んだ」
「調べるって、どうやったんだ？」
コモリ刑事が訊いた。
「ネットだよ。ネットの友達――っていうか、知り合いに協力してもらった。俺にはハッカーの知り合いがたくさんいるんだ。これはミツヤさんやお姉さんには話したけど、個人情報なんてネットにはいくらでも溢れているし、その気になればすぐに欲しい情報は手に入る。
ネットの知り合いとはギブ・アンド・テイクの関係だよ。俺が情報を提供する場合もあるし、提供してもらう場合もある。そんな関係だよ。ハッカーっていうと悪いイメージだけど、本来ハッキングとクラッキングは別なんだ。少なくても俺の知り合いのハッカーはクラッキングなんていう悪いことはしていない――と思う。そこまでしなくてもそれなりの情報を得ることができるんだ。それが今のネット社会だよ。
まあそれは置いといて、ハッカーの協力で解ったことは――」
「何が解ったのよ！」
クワタ刑事がまたいらいらした口調で口を挟む。
「被害者の身辺情報だよ。
まずニノミヤ・トオル。ニノミヤ建設の社長の息子。そしてサカタ・テツヤ。ヤクザの幹部を兄に持っている。
この二人は小学校から同じ学校。二人が行っていた小学校がカンベ小学校。
サトウ・キヨシ。三年前、カンベ中学に赴任してきた。子供が一人。奥さんが四年前亡くなっている。どうも自殺らしい」
「自殺だって？　そんなことも解るのか？」
私はつい声が大きくなってしまった。
「解るよ。さらにサトウの奥さんはカンベ小学校の教師だった。自殺した時はニノミヤのクラスの担任だった」
「ええっ！」

サンタの話を聞いていた三人は同時に叫んだ。その情報は警察でも知らなかったらしい。
「さらにカンベ中学でも二年前に男性の教師が自殺している。その教師もニノミヤのクラスの担任だった」
サカキバラ警部は口を開けたまま、固まっていた。かなり驚いている。クワタ刑事からもコモリ刑事も言葉が出ない。
「それらの情報とカンベ中学の裏情報。どうやらニノミヤとサカタは生徒だけでなく、学校全体を支配していたようなんだ。彼らの家の力もあるのだろうけど、先生も生徒も彼らには何も言えない。彼らのグループは学校ではやりたい放題。そして学校側はそれを黙認する。そんなことがずっと続いている」
私は深い溜息をついた。そんなことが？　そんな学校があるのだろうか？
「まだよく解っていないけど、おそらく、妻の自殺の原因がニノミヤやサカタにあるというとがサトウ・キヨシにも解ったのだと思う。それで復讐を計画した。パピヨンの駐車場の事件では、息子のノリオがトウドウとキョウコを刺したのだと思う。息子を使うのはどうかと思うけど、いやノリオもお母さんを殺したのがニノミヤであることを十分理解した上で、親子で復讐したのかな？　そこは、ノリオに訊けば解ると思うけど」

私はここまで聞いてようやく事件の全体像がぼんやりと解ってきた。そしてサンタの話はまったくの空想ではなく、それなりに信憑性が高いものだと感じてきた。
後はサンタの想像を裏付ける物的証拠がどこまであるか――。
「サンタ君『判決文』に書いてあった他の事件はどうとらえるんだ。イワタ・ミドリの事件、それにパピヨンの駐車場での事件」
コモリ刑事が眉間に皺をよせ、切迫した表情をしながら、サンタに訊いた。
「それらの事件はサトウがタケダに罪をきせるためにやったんだと

思う。言わばダミーだ。サトウはタケダから誰からいじめられていたのか――を聞いていた。それでいじめられた少年が復讐するというストーリィを描いた。ニノミヤとサカタだけではインパクトが薄いし、サトウ自身が疑われるかもしれない。それで、サトウとしては直接的には恨みはないけど、イワタ、トウドウ、バンドウを事件に巻き込んだんだ」

「ニノミヤとサカタを殺すという真の目的を隠すためだけに、イワタ・ミドリをレイプしたり、トウドウ・ミノルとバンドウ・キョウコを刺した――と言うのか？」

「そうだよ。いやもしかしたら、何かあったかもしれない。サトウの妻ではなく、サトウ自身に何かしていたかもしれない。彼らはニノミヤのグループだったし」

コモリ刑事はこめかみに右手を当てて、少し頭を下げ、じっと目を閉じていた。

「ああこれはニノミヤとサカタにも言えることか！　彼らは直接的にサトウに何かしていたのかもしれない。同じカンベ中学だし。でも今のところそういった情報はないんだ。俺の考えではあくまでサトウの動機はニノミヤとサカタに奥さんを殺された――ということ。まあカンベ中学の内情をもっと詳しく調査すれば解かることだけどね」

サンタの言葉が終わる時、扉をノックする音が聞こえた。

「はい、どうぞ」

コモリ刑事が座りながらノックの音に答えた。扉が静かに開いて中年の丸刈りの男が入ってきた。

「コモリ――ニノミヤが死んだ」

男は暗い表情をして、それだけ言った。

「そうですか――。解りました。それであの子供の方は？」

「あああの子は――」

中年の男は言いかけて私の方を見た。コモリ刑事はそれを見ると席を立った。

「ちょっとすみません」
そう言ってコモリ刑事は中年の男と一緒に部屋を出て行った。
私の頭の中で中年の男が言った言葉が繰り返された。

――ニノミヤが死んだ。

夏草の上で倒れていたニノミヤ・トオルの姿が浮かんだ。
夏草の緑色の上に散らばった鮮やかな赤。
ぜいぜいとした苦しそうな息遣い。
死人のように青白かったが、無邪気な少年の顔で、とても裏で学校を支配していた生徒とは思えなかった。
もうニノミヤはこの世にいない。あの無邪気な表情を見ることは永遠にできない。
私は直接ニノミヤを知らない。
彼がどのようなことをしてきたのか？
彼がどれだけの人を苦しめたのか？
サトウ・キヨシからすると殺してやりたいほど憎い存在だったのかもしれない。
しかし人の死は人の心を悲しくさせる。
復讐などあってはならないものなのだ。

今度はいつかの先生の研究室での会話が浮かぶ。

――人は人を裁いて良いのですか？

――人が人を裁かなかったら、誰が人を裁く？　神か？　そんなものはおらん。
――だから人が裁くのじゃ。
――そして裁かなかったら――裁かなかったら、人類の存続期間は短くなるであろう

復讐――。これも人が人を裁くということなのか？
私はなんともやるせない気持ちになった。
「はあ――何かのど渇いちゃった。ビール――じゃなくて、お茶かコーヒーが飲みたい」
突然サンタが先ほどまでとは違った少年の顔をして、惚けた声を出した。
クワタ刑事は何か考え込んでいたが、サンタの声ではっと我に返ったようだった。
仕方ないわね――小さな声でそう言って部屋から出て行った。
しばらくするとクワタ刑事とコモリ刑事が缶コーヒーを持って部屋に戻ってきた。
「はい、好きなの取って」
クワタ刑事はテーブルの上に乱暴に缶コーヒーを並べた。
サンタが最初にブラック・コーヒーを手にした。クワタ刑事が私の方を見たので、私はすみません――と言って、適当に取った。コーヒーはよく冷えていた。
「サンタ、あんたの話はだいたい解った。まだひとつ引っかかるところがあるのよ」
サンタは缶コーヒーを口にしながら何か言ったが、その言葉は聞き取れなかった。
「インターネットのサイトにあったあの『判決文』だけど、あれは、タケダ・トモヒコの部屋のパソコンからアップロードされているの。それはどういうことなの？」
サンタは缶コーヒーをテーブルの上に置いて言った。
「タケダのパソコンの中身を調査したの？」
クワタ刑事がコモリ刑事の顔を見た。
「いやまだこれからだけど――。プロバイダのログとサイトのログからみて、タケダ・トモヒコのパソコンからアップロードされたこ

とは確かなんだ」
「ふーん。そうなんだ。でもそれもいろいろと方法があるかと思う。タケダのパソコンに証跡が残っているかどうか解らないけど、例えばメールを使う方法。メールに自動的にファイルをアップロードするプログラムを添付して、開いたら『判決文』をサイトにＦＴＰでアップロードするとか、いくらでも方法はある。タケダとサトウのパソコンを調べれば何か出てくるかもしれない」
「サトウにそんな技術があったのか？」
「そんなに難しいことじゃないと思うけど――」
私にはよく解らないが、サンタの話を聞いていると簡単に出来そうな気がした。
「後、もうひとつ、何かしっくりしないのよねえ。あんた、サトウが犯人でタケダに罪をきせようとしているということを前提にしたけど、タケダが犯人と仮定して、サトウを殺さなければならない理由を考える方が普通でしょ？」
サンタははっとした表情をしていた。
「ああ忘れてた。俺、実は事件の前からタケダ・トモヒコのことを知っていたんだ」
「はあ？　それどういうこと？」
「いつだったかなあ？二ヶ月くらい前だと思うけど、Ａ市の駅でタケダが電車に飛び込んで自殺しようとしたのを助けたことがある」
「なんだって？」
ずっと黙っていたサカキバラ警部が大声を出した。
「それでその時俺のメールアドレスを教えたんだ。そうしたらメールが来た。いじめられていること。でも先生に話して少しは楽になったこと――そんなことがいろいろ書いてあった。
まあこれは俺の勘だけど、こいつには今回の事件はできないって思った。
おそらくタケダはサトウ先生に誰からいじめられたのか――詳しく話したんだと思った。

サトウはタケダがニノミヤ達にいじめられていることを知っていたんだ。それならあの『判決文』を書くことができる」
それを聞いたクワタ刑事が立ち上がってサンタの目の前まで歩いた。そして手に持っていた缶コーヒーをテーブルに叩きつけるように置いた。
「あんた、それを最初に言いなさいよ！」
クワタ刑事がこれまで見たこともない怖い顔をしていた。サカキバラ警部は引きつった笑顔になっていた。
サンタは事件前にタケダ・トモヒコと接触していたのか！
「えっ！あれ？　お姉さん怒ってるの？　どうして？　ミツヤさん帰ろうか？　あれ？　そういえば俺の車！　あの中学の前の道に置いたままだ！　どうしようか」

不安な終息

あれほど煩かった蝉の声がどこか遠くから聞こえるようになった。日差しは幾分和らいでいて、窓を開けてみたら、心なしか風が冷たい感じがした。

窓を閉めまたベッドに横になって、ただ白い天井を見つめる。

タケダ・トモヒコはこの夏自分に起こったことをもう一度考えてみた。

おそらく自分の人生で起こる出来事の中で、最もショッキングなことだろう。トモヒコは何歳まで生きるのか分からないが、こんなに衝撃的なことがこの先度々起こるとは考えられない。

十五歳の夏――。

この夏起こったことをトモヒコはずっと忘れないだろう。

トモヒコは脳細胞だけでなく体の隅々の細胞の中まで、この夏の出来事が染み渡っていくような感覚を覚えた。

それは一通のメールから始まった。

霧のような雨の降る日――。

学校の近くの駅。

イワタ・ミドリの裸体。

日差しが眩しかった初夏の土曜日――。

パピヨンの駐車場。

トウドウ・ミノルとバンドウ・キョウコの腹から溢れる鮮血。

夏休みの青く晴れ渡った日――。

学校の北校舎の屋上。

サカタ・テツヤの首から溢れる鮮血。

アカい――。

目を閉じると、フラッシュバックのように、それらの光景がトモヒコの頭の中に次々とやってきた。

アカい――。

トモヒコはあれ以来、赤が怖くなった。赤を見ると吐き気がするようになった。

先週ゴミ溜めのようだった部屋を掃除した。父親と母親が手伝った。あの事件以来父親は家にいるようになった。トモヒコを避けていた母親もトモヒコに話しかけるようになった。

無数に散らばっていたコンビニ弁当やカップラーメンの空箱や、ペットボトル、空き缶、そういったものを捨てた。

無数に散らばっていた雑誌やＤＶＤ、ゲームソフトなんかを整理した。

そして部屋から赤を排除した。赤いものをすべて捨てた。

トモヒコは広くなった白い部屋のベッドで横になり、天井を見つめてた。

警察では事件についてあまり教えてくれなかった。トモヒコは父親から事件の概要を聞いた。しかしニュースやネットではもっと詳しい情報が流れていた。

トモヒコにとってあの事件の光景はショックだったが、それよりも耐え難いことは、サトウ先生のことだった。

サトウ先生は――。

サトウ先生は、トモヒコの話を熱心に聞いてくれていた――と思っていた。

サトウ先生は、トモヒコの悩みを解決しようとしていてくれた―

―と思っていた。
しかしそれはまったく違っていた。
サトウ先生がトモヒコを陥れようとしていたのだ――と、父親が鬼のような顔をしてトモヒコに言った。
トモヒコはそれを聞いて目の前が真っ暗になった。
どん底のような生活の中でサトウ先生だけは信用していたのだ。
本当にサトウ先生だけだった。
しかしそれは裏切られた。サトウ先生は自分のためにトモヒコを利用していたのだ。
トモヒコの頭の中にサトウ先生の顔が浮かんだ。
あの説教部屋での会話が次々と頭の中でこだました。

全部、嘘だったのか？

トモヒコは何故か涙が出た。
本当はサトウ先生を憎むべきかもしれないが、何故か涙が出た。
サトウ先生が可哀想だ――と思った。
そんなことを思っていると、ベッドの脇に置いてあった携帯が振動した。
誰だろう――。
あの事件以来、携帯を新しくして、電話番号もメールアドレスも変えている。トモヒコの新しいアドレスを知っている人はほとんどいないはずだ。
一瞬胸騒ぎがした。あの時も携帯から始まったのだ。ａｎｇｅｌで始まるアドレスからのメール。それがすべての始まりだった。
今思えば、あのメールはサトウ先生が出したものだったのだろう。
恐る恐る携帯を取ってメールを確認した。

差出人：ｓａｎｔａ@ＸＸＸ．ｎｅ．ｊｐ
件名：遊びにいくよ

天気がいいから、ちょっとドライブでも行かない？
ズイセンジ・サンタ

メールはサンタからだった。そう、トモヒコはサンタには新しいアドレスを教えていた。
黒づくめのあの男の姿が浮かんだ。
そうしたら、突然部屋の中が明るくなったような気がした。
サンタとは事件が終わってからも何回か会って話をした。トモヒコはサンタと話していると日常を忘れることができるような気がした。あの男は何かにつけて日常とはかけ離れているからか。
トモヒコはベッドから立ち上がって新しいTシャツに着替えた。

エピローグ

結局今回の事件の構造は、ほぼサンタが想像したとおりであったことが、その後の警察の調査で明らかになった。

サトウ・キヨシの妻、サトウ・チエコの自殺の原因にはやはりニノミヤとサカタが絡んでいた。

しかしクワタ刑事はその辺の詳しいことを教えてくれなかった。ニノミヤはかなり酷いことをしていたらしい。サトウ・チエコはうつ病を発症して自殺にまで追い込まれた。

サトウ・キヨシはその真相を突き止めようと必死に調査をしたらしい。ニノミヤがいるカンベ中学への赴任もサトウが希望したことだった。

サトウ・キヨシの息子、サトウ・ノリオも事件に関しての供述をしている。

お母さんを死に追い込んだのはニノミヤとサカタであり、彼らを殺すことを父親と一緒に誓ったのだと、泣きながら話したという。

サトウ・キヨシとノリオは武道の経験があった。それは剣術であり、特にキヨシの方は、どこの流派なのかは忘れたが、師範レベルの腕があったという。息子のノリオも幼いながら毎日のように道場に通っていて、その流派では将来を期待されていた。

今回の事件では凶器に刃物が利用されていた。それはナイフではなく、小刀――脇差のようなものだとサンタは言ったが、サトウに剣術の経験があったことから仮定したことだろう。

そしてその後の捜査で、ニノミヤの部屋からロープと脇差が発見された。脇差にはサトウの血液、サカタの血液、そしてニノミヤの血液が付着していた。

これらの物的証拠から、カンベ中学の北校舎の屋上での事件はほぼサンタの想像どおりであったと思われる。

しかし――。

謎は残った。剣術の達人であるサトウが何故ニノミヤを仕留めることができずに逆に殺されてしまったのか。サンタは想定外のことが起こったのだろうと言っていた。

何が起こったのか？

ニノミヤもサトウも死んでしまっているため、真相は解からない。

マスコミは今回の一連の事件ついて大々的に取り上げた。この一ヵ月間、ニュースやワイドショーは連日報道を行った。

サトウ・キヨシの復讐劇。

カンベ中学でのいじめ実態。

そしてニノミヤ、サカタのこと、これはさすがに実名では報道されなかったが――彼らの家庭環境まで話題は及んだ。

確かにマスコミが飛びつきそうな話題だ。私の恋人であったヨウコさんが殺された事件より、大々的に、面白おかしく取り上げられた。

私は直接事件に関わっていなかったが、これらの報道を見るたび、心が痛んだ。

ヨウコさんの事件の時と同じように、今回の事件でも、いろんなことが複雑に絡み合い、結果として悲しい結末になった。

タケダ・トモヒコのパソコンから『判決文』が書かれたテキストファイルが発見された。これは今年の三月頃受信したメールに添付されていたものだった。

そしてサンタの想像通り、そのメールには自動的にファイルをサイトにアップロードする特殊なプログラムも添付してあった。

そのプログラムはバックグラウンドで起動するようになっていて、パソコンを操作している人はプログラムが動いたということは解からないということだった。

トモヒコのパソコンにはウイルスをブロックする機能もあったが、この特殊なプログラムをブロックすることはできなかったようだ。

そのメールはフリーで取得できるメールアドレスから送信されていた。

トモヒコのメールボックスには大量のメールがあり、トモヒコ自身はそのメールについてはまったく心当たりがないと言っていた。ただメールは既読になっていたため、メールを開いて読んだことは確かだ。

メールの受信時間がサイトに『判決文』がアップロードされた時間がほぼ一致した。これでそのプログラムが『判決文』をサイトにアップロードした犯人であることが確実になった。

警察はサトウ・キヨシのパソコンも調査したが、ハードディスクは初期化されていて、有効な証拠は得られなかったという。

しかしおそらくサトウがトモヒコにメールを送ったことは間違いないだろう。

サトウにあのウイルスのようなプログラムを作成する技術があったのか？

カンベ中学の教師への聞き込みからサトウはかなりコンピュータに詳しいことが解かっている。趣味でプログラミング開発をしていて、中学のテスト結果集計システムを作ったこともあったという。サトウはかなり高いレベルのコンピュータ・プログラミング能力があった。

クワタ刑事は私とサンタにそんな事件の後日調査の話をしてくれた。

本来、外部に漏らしてはいけない情報なのだが、そもそも事件の構成を解き明かしたのがサンタである。

私たちは特別なのかもしれない。

サンタに言わせれば、それらは『そうであるべきこと』で特に興味を示さなかった。彼にとって、事件はニノミヤが死んだあの夏の日で終わっているのだろう。

駅から大学までだらだらとした坂道をあがっていく。

八月が終わり急に風が冷たくなった。秋の足音が聞こえるような晴れた日の午後だった。

いつものように大学の正門を入って、先生のいる研究室を目指す。特別な用件があるわけではないが、私は月に一度くらい先生に会う。先生との会話は私に何かを与えてくれる。

それは私にとって人生を――生きることを――考えさせてくれる有意義で不思議な時間だった。

研究室の扉をノックすると懐かしい声がした。

「開いておる」

扉を開くと先生は入り口の近くに置かれたリクライニングチェアに深々と腰掛けていた。

白髪――

度の強い眼鏡。

そしてその顔は彫りが深く整っており、欧米の映画スターのようだ。

「やあミツヤ君、今日は元気そうではないか」

先生はずり落ちた眼鏡を上げて言った。

「こんにちは。涼しくなりましたね」

私は軽く頭を下げた。

「まあそこの椅子に座りなさい」

先生が壁際にあったパイプ椅子を指差して言った。私はパイプ椅子を先生の近くに持ってきて座った。

「先生――」

私はいつものように先生に問いかける。

「先生――人生とは不思議ですね」

先生は私の方を見た。何を言い出すのか？　と言いたげな表情だった。

「偶然に起こる出来事が重なって思いもよらない方向に進んでいきます。人生というのは本当にドラマのように、いやドラマなんかよ

りドラマティックですね」
私は自分に起こったヨウコさんの事件と、今回のカンベ中学での事件を重ねていた。偶然が重なって結果的に悲しいドラマが作られたと、そう思っていた。
先生はむくりと上半身を起こした。
「君、それは違う。根本的に間違っておる」
「…いったい何が違うのでしょうか？」
「君は偶然が重なること――それを人生における不思議だと思っている。そこが根本的に間違っておる」
私には先生の言葉が理解できなかった。
「偶然が重なることは不思議でもなんでもなく、必然なのじゃ。人生は、いや、宇宙はそういうふうにできておる」
私はまだ先生の言葉が理解できなくて、黙ったまま先生の目を見つめていた。
「君に起こった偶然は――そうじゃな、君に一〇〇の事象が発生するとしよう。そのうちのひとつ事象Aが発生した。
そして君にはまだ他にも事象が発生する。事象Bじゃ。このAとBが関連して、また事象が発生する。事象Cじゃ。
君は事象Aと事象Bが発生したことを偶然と考える。
しかし――君には一〇〇の事象が発生するのだから、事象Aが発生しなかった場合は、事象Dが発生する。事象Bはそのままだとして、事象Dと事象Bから事象Eが発生する。
そうしたら君は事象Dと事象Bが発生したことを偶然と捉える。
そう――どんな事象が発生しても君は偶然と捉えるのじゃ。そして人生は不思議だと言う。不思議でもなんでもなくあたりまえじゃな」
私は先生の話は半分くらいしか解からなかった。要は、人生において意外なドラマが起こることはあたりまえのことだと言うのだろうか？
先生は話を続ける。

「この宇宙において何かが起こることは必然なんじゃ。何も起こらないこと――というのはありえない。
何故なら――万物は絶えず変化しておるからじゃな。
君の体を構成する細胞、細胞を構成する分子、分子を構成する原子、原子を構成する原子核と電子――。こういったものはいつも動いておる。変化し続けておるのじゃ。
変化がなければ、君の存在は消える。君が存在するということは、変化し続けているということじゃ。
宇宙もそうじゃ。時間と空間は絶えず膨張しておる。変化し続けておるのじゃ。変化がなければ宇宙は消えてしまう。
君のまわりでは、ミクロにおいて変化し、その変化はマクロで見ても顕著じゃ。
だから必然的に君にも何かが起こる。何も起こらないということは、君が存在しないということじゃ。
君はその変化を偶然が重なったと捉えておる。そこが間違いじゃ。君にとって、偶然が重なることは必然的なのじゃ」
私は少し考えてみた。何となく先生の言いたいことが解かったような気がした。
「そう、君に発生した事象を不幸だと捉えるか、幸運だと捉えるか、偶然と捉えるか、必然と捉えるか、それは君しだいなのじゃ。面白いのう」
そう言って、先生は笑っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6857o/

オートマティック・リベンジ

2010年11月8日09時37分発行